



柳田文庫
文庫11
A1325



文庫11
A/325

英人約翰本人原著

意譯 天路歷止程 全

明治十二年十月 東京上梓

天路歷止程

天路歷止程

帝
之

國
之

義裁是

求

小川義綏謹書



題辭

喜峰藤翁我益友 六十蟹文始下手
 雙耳重聽幾乎聾 真成納約苦自牖
 乃由勉強忍耐功 約書十中了其九
 天路歷程前後編 嘉而譯之志深厚

逢其難讀問于余

郵亭驛夫汗且走

辛苦成冊將鋟板

遍喻婦女及童叟

嗟翁誠心為是舉

天賞至如形影偶

現世安穩子孫榮

真福矧更天上有

明治十二年八月

中村敬字



緒言

一此書ハ明治九年七一雜報第十五號ヨリ年ヲ追テ譯出セルヲ輯メテ編ヲナス

一原稿モト婦女子ノ為メニ譯セルモノナレバ俗耳ニ入り易キヲ本旨トス故ニ俚語ヲ用ヒ又或ハ活字ノ訛假字ノ違モ無ニシモアラズ然レ深ク之ヲ改刻セサルハ本旨ニ背ヲ恐ル且早ク上梓シテ信者ヲ増殖スルノ種子ヲ播クニ意急ナレバナリ

一七一雜報發端ニ云フ如ク該書ハ全世界ニテ

四十餘國其方言ニ譯シ信者ノ最愛スル珍書也
 ト 本朝ニ於テ七一雜報ノ譯出ヲ嚆矢トス然
 氏未タ一部ノ全書ナキヲ嘆シ之ヲ編輯スト雖
 モ如何セン之ヲ梓行スルノ財力ナシ顧フニ安
 リンゾ之ヲ得ル所アラシ乎ト教友島亘氏ニ謀
 ル同氏マタ之ヲ岡見清致氏ニ謀ル岡見氏ハ品
 川教會ノ信者也欣然トシテ贊ヲ援ルヲ肯シ
 遂ニ十字屋書舗ニ謀テ之ヲ成就ス實ニ二三子
 ノ篤信厚志也抑亦 真神ノ安排ニ出ル事ヲ深
 ク信ゼリ

編輯者 佐藤喜峰誌

天路歷程書ハ英國ノ人姓ハパンヨン名ハシヨン今ヨリ凡二百年
 前傳道ノ為ニ官子惡まれ十二年ノ星霜を獄中ニ送り絶て怒
 恨心も道を慕ノ念ハ轉殷あり此時子此書を輯成リ人名地
 名ノ如クハ其字義を觀テ善人惡人たる事ハ一目判然たり凡そ書
 中ニ我といへるハパンヨン氏自ラうり也也卷首ニ穴といへるハ囚獄ニ比
 也睡中ノ夢とは静中ノ思想をいふ也壹人ノ破衣を衣とは世人ノ
 罪ありて功あきをいふ也面ハ家々轉トは世俗ニ背テ天理ヲ向リ
 とを欲ふ也背上ノ重任トハ世人ノ多罪をいふ也よく此書を読まば誠
 天路ノ捷徑也假設虚造ノ詞トせば筆者の本旨を失ふのみならず
 世教ノ罪人なり何況や福音ノ真祥を望をえんや

天路歷程意譯

我此世の曠野を行不計一ツの穴あるところのうら其處に偃卧て
 睡り一ツの夢をみる其夢一人此人破爛た衣をきて一町よ
 立ちその面八家を轉け他のとちを視手お書物を執り背上おハ
 大任を負へりやがて彼の人を手持たる書を展きて觀め頻りお戰
 慄流涕こらへかぬてつひは大聲を發ちさけびひらるる我いうにせん
 うてとづら宅へ帰り務めて其憂さまを妻孥お見せどとかく
 居り一ふまゝとちへぬて終お彼の心配しをる故を一々告て
 曰るはあ賢妻よ愛子よ爾の至親さも此は我のほかあるす
 志るは今重荷我を壓し亡さんとさまゝとこれらのすめ此城も天火



イザヤ六四六ルカ
 古三詩三六四
 我ニ使徒行
 傳章三七節

の為は焚くれ吾も賢妻も愛子も共酷一き亡を受ることは疑ひ
 あく目此前より預て一生路をさぐるぬるよあつさればあまを
 てこのことおしを道ることをせんや然まども未ど其路を知らざる
 ありと語るを聞て妻と子ハ大の愕けりその話を真とて聞
 たるよあつ以主人の心癡りと思ひうゆるありこのとき日暮う
 りは身ばかりが睡らんことをぬえりそ心のあちつくこともやあ
 とおもへばあつあつをさういそぎ扶てぬむらむされとその人夜を
 こころ白日のごとく心やまろく寝えはよりのをさうあけさうあ
 涙とあめあへば一て曉はおよへり翌朝おいてきて家内の人ぞ機嫌聞
 子行わすたら又昨日のものを重て告一すた志の一家内の

人は半分も聞うを意れうちに思ふよ何たらあるの病の
 除ふかイツツ不情待つたがよからふかと思ひ譏笑てさう責罵
 てみと利又まこも顧はあおつてみくまをれとも彼の人私
 房ハ入る悲痛すハ其家内の人を哀憐て代祈禱をな一或
 るとそハ孤身よて田間小行き忽然は書を觀め忽は祈禱をな一箇
 様を體よて數日ををく里すた一日彼の人ハまた田間ハあつて書をな
 の免あつ頻り憂へ慘む容子あり一が遠ハ大聲を發て
 マアどふ一たらよのふかやふ一たなう救はるかト彼此をかへり
 奔りうけそ又止停その有様ハ行へた路をさぬゆたと察し
 海を時す一人の傳道といふ人さの里すして彼の人に向ひ傳

我必死希伯來書九章廿七節

以賽亞五十八章六節重負より

提摩太後四章十三節重負より

おまへは何を哀みまはせり「彼人尊駕さんお聞かされ我を手は在つとら此書を読みまはせり我は必死を死に候はなむ死に候は必死を審判を受ることを知りしはたそれゆへ私の心は死ぬことのみを審判が恐ろしく存せまはせり是れを傳道者ハ彼の人よりくこりて「傳世の中ハ多苦であるのふおまへは何ゆへ死ぬのやう「彼我の肩に重任の我を壓して墓より低く地獄に陥れしませぬ尊駕さん我ハ牢獄でさへ恐ろしくひの死んで審判におあはしますものをもて哀しむに居しませぬ「傳それなまはせ此處に居らるる「彼何へ之きて宜しきや之く所を知りしは人からサそこで傳道者が一の皮巻を與りしはた其書を將に至らんとするの怒宜く奔

トアリ
皮卷ト蓋シ
此ヨリ出ル乎
將至馬太三章七節
窄門馬太七章十三節
具眼ノ人非サ
レハ此門ヲ自擊スル能ハカ
光閃々タルホ
夕主ノ恩ノ光昭
ヲ得ガレナリ
彼光詩百十九
篇百五節又
彼得後書一
章十九節

りて之を避よとあるや「た彼の人は傳道者を目注「彼何へ奔りたり宜しきや傳道者郊外を指さして「傳あそこに窄門があるが爾よりへまをか「彼否々「傳そんならあるこ此光耀が見へまはせり彼左様サテ「見へまを「傳あの光を目を注て彼の所においでなされ必と窄門が見へませぬ其處にて爾ら其門を叩いたる必とあるこが行ふべきことを告るものがありませぬ詩子
 斯人悔悟切哀乎
 欲保靈魂脫罪辜
 指明離死入生途
 扱夢不彼の人を見れば斯時とふく奔出して未遠くも行くぬ
 うち其妻撃ハ後から必至と呼うへしはた彼の二人ハ両手まで慍

掩耳ハ背水破
舟ノ策此計策
ニ非レハ天路ニ進
ミ難シ
永生馬太廿五
章四十六生衆
不壞提摩太
後一章十節

耳を掩へ直ぐ小奔なり大聲を揚げて生矣々々永遠の生矣
トいひけし後をも顧ぎて平坦なる間に向ふて走りた時近隣
の人達も共に出でてみてお望ましたる彼の人は疾走をみて譏誚も
のたまはば怒喝者といふ亦は呼ぶるものもあまたたが其うち
此二人の人は何れも呼ぶるを聞きぬと後より追ひけりた此
二人の人は錮執一人ハ易遷といふ名の人あり時彼の人ハも余
程遠くまで奔ていまたゆへ二人とも未追つたを収めてお望まし
彼の二人の追來たるのを見て「彼人隣さへ何為に來なされし
た」二人私共ハ爾を勧つて同歸ふと思つて來ました「彼此萬不
可爾輩の居るを將亡城は私と彼所で生すたが今彼所の必ず

硫磺火黙示録
廿章十節

美酒佳肴美
服美色此諸
樂ヲ棄テサ
レハ天門ニ進ム
一能ハズ

足り餘路加十
五章十七節
たすされたと
思ふて此言甚
夕味アリ
無敵彼得前

亡ひぬらぬことを知りしはた爾と若し長く彼所へ居るるれ
ハ必ぞ死んで地獄に入り硫磺火を燒かまされ賢隣宜く私の言
とを聴て私と同は往なされ「錮執噫何を説やるぞふして此諸の樂を
棄て爾と偕に往くれませふや。彼の人名を基督徒といふ錮執答へて
「基督徒然し爾のおつやる樂ハ私の求むる福に較ぶれば万トツの
つりあひも有りませし夫ゆへ若し爾と私と連立てゆた始終心
如一あれを我の得るところのものは爾もまた得られませぬは
私の往ふと思ふところの一切は足り餘りあるゆへアたまされたと
思ふてこそと偕に往なされ」錮執はまて世の中の物を棄てい
から求めれば何物でもなく「基」これ求める物とは敵たれ玷付た

聖なるところへ癒るそのなほ福あり固天に藏り何人でも勤めて之れを
 求めるものは定期に至らば急度神さなか之を與へませふ其事ハ此書
 子載てありませふこの御覽なさればよく去れませ。錮執之のこを聞
 て基督徒を叱つて曰ふは「錮誰が其よくな物を觀ませふゾ爾はこ
 へて」
 一 僧は歸ませぬのう「基」ハ断して歸ません最早未拒に執か
 りませたのう返顧ことも出来ません此時錮執も易遷に向ふて「錮そ
 れあらハ吾儕ハ此人を捨て歸ませふ丸で狂者で諸の虚想を發て而
 智もあつてサ「易遷そんな罵るあ此人は基督の徒では尙もあ此
 人のいふ事う真あり我れもの求る物よ聖は更に美しく有ませ
 不殊まもこの彼の人ハ吾の隣ではある一吾は僧は行ふと思ひ升

「錮爾も亦狂なりたのあのあうな心癲に導らきて何へ往れる
 ものでその其よくな愚を云はせませアかへません」基夫ハよくあま
 ませんそれあり爾も爾の友達も共子とて往るされとて
 のお話申ことハ實に真のこと此外ハ多し榮が澤山ありませ
 若しこの言の信ぜられませんならせコレ此書を御覽なされ
 此書を作て人ハ自ら血を流して證を立た人でございませ。易遷錮
 執に向ふて「易尊隣今こそ」の心ハ大方決まてた此かして箇様
 善人子伴なハれ共甘苦をいませふ。又基督徒子向ふて「易賢
 伴悦ハひ處に往ら爾は其途を去ぞんドでその「基一人ハ傳道
 者ハ我子示へていひませ」たは前ふハ一つの窄門があるゆへ急いで

彼の所へ往けかへ往む其往べき途は指へてくれるも此の阿
 ると此と「易賢隣さんそんならこそ」は同子ゆきまをかうト。
 これより基督徒易遷と此兩人は同く連たつて往きつたが
 此時錮執を見れども最早己れの家よりへりまうた
 扱基督徒ハ易遷と連立て次第平坦なる所を過ゆた
 の此時基督徒ハ易遷に向ふて「基爾を我のいふことを聴て我
 と同子行ふと思へめまことを實喜こぞ」た事でおざいまうアソ
 錮執さん私も私どものより未だ見ぬ情を悟りたまはる甚た
 懼ろしく覺へて輕に私ともを棄てハソソ「易今汝と
 私との里此處におりますすが之れより往かふといふ所ハ何なところ

おて又如何一たり其處へ行ことが出来まをか請を詳らふ話
 てくされ「基私ハ意ハ能く合點してありますが未だ口へ出
 ていふ事が出来ませんなれども爾が此事を知りたければ此書ハ
 載てあるおとを今共讀んでおきませ申ませふ」易爾は此書ハ
 載てあることを皆まことのこころお考かへなされまをこの「基眞實ま
 ちこそ此書は誠めて偽りのなれた者を作りましたう」易善ひか
 言ておざいまを然一其書ハいふ情が載ておりますをこの「基ツの
 永存國のありませ其處まで我ともが永生を賜い長く其處に居
 ふこの出来ませふ」易善るおまを子一其餘のこころ「基私
 とも小榮冕と光耀衣とを賜されて私とも身は天日のより小耀さま

涙黙示廿一章
四節

是「易」なる事甚と不結構て去へし其餘のことは「基」哀哭んぶ
 憂苦たりはることは終あし夫ハ此處の主が我々の涙を拭ひま
 せゆへ「易」私とも若しも其處に居しただなら何よふ人と為
 伴まはか「基」天の使と共に居し其光ハ人の目を奪ふほどあ
 且「私」も先きは是處に往て居るものは千々萬々爾のそこ
 へ往まはは之れをよく見ることのできやせよお互ひに害を
 ともあくお互ひに愛し衆聖潔きものばかり真の神子謁見主宰
 の得悦て永く主のうちに立ちます總て言は若しも是處に到くなれ
 必白衣を衣金の冕を戴いたる老を見し諸の貞潔人々が
 各々手子金の琴を持てゐるのを見せよ且素て主を愛し其命

白衣黙示廿一章
四節

路知章廿五
節

せし遵ひすものハ世の人より害を受け或は割碎或ハ火焼或ハ
 獸に食させられ或も海に溺めらるるも其人達の今ハ最早康
 強で永生の衣を衣てゐるのを私ともが是處へ到けど必見るこ
 との得られませよ「易」備くおを多しを聞はりやして實に感心い
 たり「天然」其諸の福は急度手に入りませよか且しこと
 の主が曾て此書を載ておられし其略し主ハ喜んで此福を
 我々に下賜れませが惟我々は精だして之を納るよふ願はねは
 りません「易」結構ることを私ハ此ことを聴きしめて誠
 喜はしそんども賢伴急ひて行かせよ「基」私ハ背後に重任

があるやまをうり疾行たのは満心なきとも足るふことを従せん
 其と我の夢平坦なる地にあひどを見せしめれば其所は一つの泥
 所ありまして其名を憂鬱泥と申すを（憂鬱とは心罪の重
 を知りて恐き望きを失ふて殷憂ありと申す人泥の中へ陥り
 よるふも此）扱兩人の咄をいまして丁度此泥所近き意を注て
 行たませんと處かゝ忽ち彼の泥の中へ陥り暫く此あひど乱滾
 惣身泥まぶれとありしが其うちも基督徒も背上の重任の為利益
 その中へ陥りし時不易遷ハ基督徒を謂て「易雨ハ今どふし
 居らまよき」の「基少」も知りやせん是は於て易遷ハ其路を怪
 思ひ艶然腹を立て「易此よりなまるとが雨此おもふ」なされた福て

室トハ四悪の譬
 一曰悪ノ室方ヨ
 リ離レ遠サカリテ
 窄門善道ニ向
 シト冀ヘトモ今
 泥中ニアリテ困苦
 ヲナリ將ニ城ノ
 旧宅ニ居ルヲ省
 誤ルヲ勿レ

ありやまが我等が初の就道から此より難は遭てハ此からさだらん
 なごありませぬの私が生此處より出られるは此さきも美處
 このあふよと雨一人でお往なされといひななり其室の方へ轉向て
 用力跳出ようとして直に諸泥岸は脱出とがてきて其室は
 歸り其後基督徒は復と易遷を見けりせん扱はや基督徒ハ
 泥中ハ獨輾轉していまたの益精をたして其室よりはあま
 窄門に向ふことを誠心から冀ひやされとも兎角背負たる重任
 の邪魔ありて脱れ出ることつてきかせん時よも私か夢の
 に一人の恩助とのふ人を見ましたのやうて基督の徒の側へきて問ま
 せよは「恩雨ハ何ゆへ此に居らまよき」との「基傳道者」の私に示て此

から窄門に往てあされし。たるる將に至るとするの怒が避らざりし。申す。たのうそちで私に往りて。即ち此處に陥りし。た「恩雨はなぜ泥のうちにある石磴を見てそれを履て行であらぬのう」基私をあまり驚懼て急を奔り捷徑を歩む。た故に此に陥りし。た「恩雨手をお伸しなされといひなると其手をとて遂に扶けた。て實地は立せ基督徒に命て復道を往のせり。た。其時私に恩助を問て申す。た。た將亡城の窄門に往ます。たは是非とも此をを通過せしめんとせん。の何ぞ此所を修平て行人の安く往らるあり。はありせん。恩此深泥ををハ實ハ修平おく。ごいゆをそれハ人ご己の罪を悔悟それから發るところ

實地詩四十一節

主の意非ス以賽亞三十五章

の渣滓や垢穢が皆な此處へ落ちり。た故へは憂鬱泥と申す。其譯も罪人の己の亡ぬるぬれを知り心憂て驚くを疑ひ惑ふ者皆此處に結聚それおよめて遂に惡い地とる。た然。たの地の惡いのハ主の意てハおさめせん。夫れゆゑは主の工者が監司の所示に遵て此事を取り。今まぞ一千八百餘年其うち修平た。たもあまも。而て識者の云す。た。此處を修平。た。思ふ。た。福音の教訓を用ゆる。た。た。た。以下且私の此教の箇條を知り。四方の運んで此所を填め。た。其。た。者。皆。解。憂。の。教。訓。を。其。數。ハ。數。萬。擔。亦。千。萬。擔。と。つ。て。も。よ。ろ。し。き。は。ど。あ。り。や。す。然。れ。ど。此。片。地。ハ。泥。所。を。主。の。諸。工。者。の。

各々己の出来たけの骨を折りやうた後矢張之を名づけて憂鬱
 泥といふまう然し其泥の中は主の命に依つて安且固ある石
 の立てありやまが惟天陰雨の降も其穢た泥が四方へ汎れだ
 て夫より石を見るに出来たましく見へても首眩し其
 旁を錯踐石磴があつても反つて己の蒙垢の勝へられません惟窄
 門下入てからハ其地の實でをいすを時不や夢のうち易遷を
 みやれば彼ら己の室へ歸りたりた近隣の人其婦て来たを
 見て智者たといつて稱ものとあり又は夫とこの為ともよひた
 とを自ら危きをまぬく愚な男たといつて誚もある或は又一端
 その途を裁き位いあり小故れことて棄るといふとがあるものか膽

頭もあけえぞ
 耻を知り良心
 あり又故のま
 ごとあり良心
 冷々小人の
 情態よく馬
 出せり
 凡人多愚
 疑々具有徒而
 惑之者不可不

小野郎たとして笑ふ者もいりしや長るやへ易遷ハ眞實に面目
 次第もなく大勢の中子居て暫くも頭もあけえずしていやした
 の其うち小又故の態となす衆も基督徒の道から轉けて背
 後より譏諷を申し居りた
 扱と基督徒ハ隻身寂々行むるち遙う向ふの田野を過つて来る
 一人の人を見りけ丁度いつや里相値りた其人ハ名を世智助
 いつて俗情といふ前子基督徒が出来る處の城子附在たる大なる邑
 小居人より基督徒此事もよく承知して居りたなせるを基
 督徒ら將亡城を奔離たとき其出本をとりてあく其他の所あ
 り其評判を喧しくいふた故のことて今世智助は其状甚

た勞苦る者この嘆息たたいをつきなごら行くのを見て之これハ必かならず基督徒きりすとと違ちがひありらふと思おもひ之これ問とて云いひ云いふに「世智助よこぞ 足下あしもとハ何故なにゆゑ其そのよろし
 勞苦らうくた形容けいようでそして何なにへ之これであされやを「基實きじつハ左様さようでございやは
 我われはと勞苦らうく一ひとて困こまておるも此こゝハあまやまの今いま何なにへ之これとおたつ
 水みづを承うけずたまは慎つつしんで先生せんせいの為ために道みち一ひと申まをませふ實じつハ彼かれの窄せま
 門かど不よ往ゆふと思おもひやを聞きかまはる不よ彼の處ところに行ゆきを此こゝハ何なに
 たら重任おもむが脱ぬぎるといふことを私わたくしに示しして呉くれる人ひとがあるよ
 「世よ爾おんは妻つま孥ななのあまやまをか「基き有ありまをれとも此こゝ重任おもむが私わたくしを
 壓おさへしまたその妻つま孥ななが有ありて故ゆゑのよろし不よ和樂たのしけれやせんから
 有ありても無なしなもれで「世よ我が爾おんにおまめ申まをことがあり

有ありて無なし可べし
 林多はや前書まへ七章

まずを聽ききあさりませふの「基き善よきを勸すすめて下くださるるを聽きき
 ども善よきを以もつて勸すすめられませふとハ乏せましの者もので「世よ今いまおまめ申まをませ
 ハ先ま第一だい一いち其その任にんをおぬぎあさるるのよろし一ひと左右さうのこゝやせんあは
 心こゝろも安やすらむ又また真まことの神かみさまが賜たまはるところ此こゝ諸もろて此こゝ福ふくをる受うける
 ことがでねすをよむ「基き私わたくしの所ところ求もとむ此こゝ重任おもむが脱ぬぎたのであまやまが
 但た自分おのが手て子こ脱ぬぐあとも出来できず亦また私わたくしの本居もとた處ところで誰たれも私わたくしの
 為ために此こゝ任にんを解とれ脱ぬぎて呉くれる人ひとのあまやません夫故それゆゑに今いま此こゝ路みちを行ゆき
 重任おもむの脱ぬぎたので「世よ誰たれも爾おんは此こゝ路みちをゆけバ重任おもむが脱ぬぎと命いのち
 ますた「基き一人ひとりの我われどもおくらべて視みまをれバ遥とほく尊たつ貴ときその名なを
 傳道でん道だうと申まをす人ひとが「世智よこぞ噫あ彼かれの爾おんは此こゝ路みちを行ゆけと勸すすめませふか

世の人の行く道の内で此路を艱難とする故にこれに入るを窄門といふ

信者は此の危難を逢ふ事あり然れと信者必を天祐を得て諸難を凌駕得るあり不信者の凌ぎざる所あり又世智を以て逃れんとせし却て害を招

世の人の行く道のうちでは此路ほと危疑險阻道ハありすはやん
夫で爾爾の私言ことをお聴なさい是は後必成知れませふ
私は曾爾が憂鬱泥おさるをお視かけ申すたづ之れハ
ほんお此路を行行者が初めて遇の苦と申すので年の上の
者の云ことを聴るので爾が此路を行あれは是非とも勤勞と
疲憊と饑と裸と刀と惡獸と幽暗を至死と諸ての禍ひが皆ま
いりませむ確に是のことがあり升多の人の證據だてまいたと
人の言とおを聴くぞ不喜んで自分を棄られませふカ「基
尊
駕乎私の考も私此背上の重任を爾のおはあゝとさる諸情
較れむすう々懼々あり升夫故私ハ此重任が脱ることあり路

く事歴々其證多

此等危言往々多為其所惑

おてこれほどの苦もてあふとも意とハやく「世爾が其重
任を背負て居らるゝおを其初めは何からお知りなされませ
基私の手持つて居りませとこの書を読ませ此事を覺り
申すた「世私もさうであらふと思はれた全體彼の無能之輩の
有てムヤミお過高ことを妄想心の紛亂ことは爾のようあり其
みられた想の狂の如く頼まれもせぬ危きことをなす而て又何
の欲得ののと問は返つて自分が自分の求るもれを知てハおりません
基我が欲得のものを私ハ知てのゆを即ち此重任を脱ぎ心が安心を
よし願ふこととス「世此路ハ危ひありたけでを爾は安心をすることを
願ひるゝ曷又此路はおれなざるカ若し我れ云おを聴ることを

万事意のまじ
とは何事をい
ふや天堂の外
人間世界ハハ
ころのまじ
なる所あり

なれば爾の願の遂らして亦途の危苦も免らざるが我が示てあは
ませよ彼の得救の方を予キに斯に在て速くハあまきせん若し我の
言と相違あるされたならば諸の危ひことこの免れれるハの望でなく
且に安樂こと得られれて日々善人と居る萬事意のまじなるまじ
せよ「基言中の意を徹しおきくせ下され」世にキ此前村にて村の
名は修行といひ一人の恃法といふ人がある外に其為人ハ多智ま
又聲譽もある亦よく人を助けて此重任を脱がせるあそ凡て我を
深く知つておりませそ〜〜〜人ダ彼の任に重く壓きて癪
た時中其療治もよく〜〜〜爾が往ておあひなされたあり
爾も助られませよ其人の室ハ此處より僅に半里ほど若し其人が

留守なりハ其子子習禮といふ美容貌此人があまき〜〜〜父と同
〜〜〜に爾を助〜〜〜爾の其處へおひなされたなりを任ハ
脱て平安あり心故邑に歸りたくハあまきをゆひ亦お勸申さ
ま〜〜〜人を遣て妻孥をおあひよせることこの出来ませ今村中
も空宅も何れ租價ハ公平で食物ハ美〜〜〜價ハ賤く且隣近所
ハいふ善良人にて相不信お相敬ひませ故に爾も其處に居て益々
安樂ありませよ（此等ハ只自己の功能に倚頼ものみちて真に似て
偽るものありハ之が為不遷されざるも此鮮あり）時キ基督徒も此
語なりを聞て猶豫と決り〜〜〜たが自思案を〜〜〜云よ〜〜
若し此人のつふことこの真ありバ之れは従かふ〜〜〜ト乃ち

復問ねていひまをいハ「基尊駕彼の賢人の室ハ何か少往ればよろし
 うさひやまか世智助ハツの西乃山(真神傳十誠山)といふ山を指
 さし「世あの高ひ山を爾ハ五覽なさるカ」基甚明見へまを「世此山
 子由ておつぞなされ首到室が則ち其人の家てを基督徒を是子お
 いて原路をまき助けを恃法子求めんと行て其山子近たたれハ山の
 勢が高麗たるを見て駭き首上子墮下かと思ひ恐れて敢進みも
 せを佇立たすうとふ「たゆるの少」も知れど又肩子あるところ此
 任は原路を行とち子較ぶれハ轉重くるつとつとつ子覺へ山子はち火
 焰(出埃及二十章十八節希伯来十二章廿一節)があつて閃た出づれば基
 督徒は焚きまうかそ懼き戦々慄々慄々慄々慄々身冷汗を流し「た」

詩子云

基督徒從世智言 頓離正道大違天
 雖云脱任得安樂 終是罪奴履禍田
 時に基督徒も世智助の言あつと徒ひたるを後悔し傳道者
 の来るを見て實に赧顔に膝す傳道者も漸々邇たて遂に其
 側子来り「が貌はやそこよ壯嚴して畏ろく基督徒に向ふて
 傳基督徒よ雨も胡為此に在れる。基督徒ハ一たび此言を聞て
 何と對へんよふもろく默然木立たり」かば又いふよう「傳將亡
 城の墻の外で我の一人の哀哭大呼もの不遇ひや」たがあまは爾でハ
 あまも「世なんたの」基左様我でを「傳窄門に往道を爾はまこと示へ

ませあんだる基示へて言まはした傳をれば是雨は遠に是途を捨て錯路を
行くのでせう「基我の鬱憂泥を行過すたと久適一人の人よあ
やたが其人を我示へて此前村にて能我の任を脱せる者がある
と申すた「傳雨の遇た人何なるを尋う「基其容を觀れハ文如
くて私と多くの言を致しやたがらや私其言に従ふより
なり此に来すたの山勢が高く壓りて崩き隕下るばかりゆへ山
は壓つぶされんことを恐きて進まざり立てをります「傳時其人は
何と言すた「基私に何へ往くと問すた故其情を告すた「傳
時其人はどふやあを言すたの「基私に有室家々と問す
たゆへに私はある通のことを告て此重任の壓するゆへ人妻奴子のあ

つても之れと故のゆへに和樂ことの出来せんを申すた「傳時
其人ハ又なんと言すた「基私に急此任を脱といひやた我ハ答
へて此重任を脱きて安心するのを丁度私の所求なれば今窄門に
往ふとして其處へ行ことを願つていまを其處へさへ行は何ふと
て赦るゝの必と人か私に示へて呉ませふ。其時彼の人云には一ツの
途があり爾が示すとすものものに較ぶれば更ふ美しく途も捷くそ
して危きちともたし其途より往は即ち一人の人あつてよく
其任を脱してもらへすをト。故に私其言を信じて原路を捨て此
處へ来り早く此重任が脱たく冀ひやたが此處へ来て見れば若此
情形はあひ懼しと思ふて止まりしやたの今ハ當如何か知せん「傳

爾暫く此におたちなされ我が主宰の言を爾に示へさせし基督教徒
ハ戦慄あがり立てありしに「傳經子曰慎んで汝が語る者を棄るる事
かき若し地にあつて命を傳ふる者之を棄るは猶刑を免かるべし
あともぞ況や天より」と言者我之れを背りは其刑焉んを能道
れん乎（希伯来十二章二十五）經曰義人ハ信よりて生べし羅
馬一章ノ十七知道子背あふ我之を悦ばず傳道者又いふ
や此危き苦の中に入たは爾です爾ハ今主上の諭へを棄て平安
此途を捨てしはたはれおほく沈淪せしむ基督教徒も此言を聞やい
なや其前子驚跌て死だよりとなり大呼して悲しや我ハ亡しむ傳
道者ハ其様子を見て遂に其手を執ていひしは經に曰凡そ罪惡

宜信勿疑約翰
傳十章廿七節

と謗讟も其人赦さるる（馬太十二章卅一）又曰宜しく信て疑
くふあゝるる。基督教徒も是におひて少くも傳道者此前
子立て故のようハ戦慄ておぼしめた
傳道者まゝ曰よう私が爾に道を教へてあげしやつかり宜く専務
て忘ててハありやせん一体爾を盡惑せしものは誰にて亦爾が往て見
たく要つた人は誰だの今おへてあがせしや爾をよハせし人ハ世智
助といふ名の人より丁度其名子稱する人であるなせといふ其好むこと
此世の道にして（約翰一書四章五）眞の神の道でなく其往て拜禮
とちろは修行村にて福音郷でなり且此世の道は人の窘逐を免かざる
といふものか（加拉太六章十二）尤も之れを好みて其心の右の如

此世の道道の
字蓋一馬誤
あや支那誤本
道とあり亦
誤る約翰書の
世事とあり其

誤り明日あり

遂に主の正た道を紛更よるといたしやうた但し此人が爾を勸
 めやうたうち三ツの惡へたことがありしを爾は正路を捨させやうたが
 一ツ爾は正道の辛苦を厭かりせやうたう二ツ爾を引て往らせた途も
 生途であく死の方でありまうたが三ツなり第一の爾を誘ふて正路
 を捨させしことは深く惡はづれおこなせなれば彼の言は從ひたるハ之
 を輕くし主宰此論を棄て却つて世智助の言を重んじたといふも
 ので主の曰く當り力故竭して窄門を進むべしト之をハ我ら爾は往と
 示へた門で何れまうたいかよとなせハ生るよの多るうちハ其門ハ窄く其
 路は狭く之を得るもの少なり(路加十三章廿四馬太七章十三四)
 今此惡人ハ爾を窄門より背らせ正路を舍させそ太方沈淪のけや

又曰父母馬太
傳十章三十七
節以下

大故に爾を誘ふたことハ當り惡む處まこととて爾が彼の言
 と聽くのも又自ら惡むまづのこころでありまう第二の爾は正道
 乃辛苦を厭がらせしも又當り惡むべき苦れこととせしやう此
 道の辛苦ハ世の財寶を見れば更に寶たものとして見なければ
 成ません又栄光の主がまもつて爾に告ぐ云ハ生命を惜む
 のハ反つて之れと喪ふ(馬太十六章廿五)又云人我小就て
 するも父母妻孥兄弟姉妹己の生命を愛しむものハ我徒た
 ると得ず故に私ハ真に神が此路を永生の要路とせられるとや
 まを然るに人が若し之の途と行ものも死ぬといひやうたが此説ハ爾
 が深く惡むべきまづのこころとせしやう第三の爾は死ぬ方へ引をうとん

章十節)時丹基督徒ハ生心持ハカク哭ク甚ク世智助ハ達テ
 輕ク其言ヲ聽ク事ト自呪詛又自の愚カク事ト怨ミ
 且私慾の言ヨリテ世智助ハ迷惑正路ヲ舍テ今モ
 羞耻ハ勝テ遂ニ傳道者ニ向テいふ今尊駕トんカシメ
 ありやせり私ハ尚救マセウリ又今原路ニ返テ窄門ニ往テ
 思マシケ可ラゴシヒマセウリ我ト拒ミテ納メ私ハ羞耻トあり
 テ歸リハ志マセウリ前ニ妄ニ世智助の言ヲ棄テたこと成
 今ハ憂ヒ且悔デアリマセウリ私ノ罪ガ救マレル事ト成リマセ
 今試揣シテいふ事ト傳雨の所行ニ惡キことニッありマ
 今一ッ正路ヲ舍テ一ッ禁地ヲ履タル事ト其罪ハ大キキヤモ

司門者ガ心ニ悲憫ヲ懷テ必雨ヲ納マセ夫故ニ爾ハ當謹慎ニ
 再ビ妄行ヒクハナリマセン誠ニ恐ルコトトイハス主ガ稍怒ラ
 ンコトハ雨ハ途ニ亡ビマセシ時ニ基督徒ハ原路ニ返リマセ
 ンコトハ傳道者ハ方ニ微笑シテ口吻ニ其安ヲ祝ヒマセ基督
 徒ハ即急行シテ途間人ト言ヒイハズ人々問ク何ラモ返辞セ
 ンコト其行ク狀ハ禁地ヲ履ヒ何リカ角ニ未ダ原路ニ及ビぬ
 ルハ凜々トシテ危懼既ニ原路ニ入りテ心ガ少ク安ツル窄門
 ノ事ハ小往ツキマセシ其門首ニ門ヲ扣ケマセ雨ラ開ク
 (馬太七章七八)ト書テありマセ遂ニ再三之ヲ扣ク

詩に云

耶山在猶太京
都上有真神殿
可比天堂
將之怒馬太
三章七節

罪人奔離必亡城 來扣窄門望得生 求主垂憐開活路
鴻恩永頌樂高聲

頃あつて惠慈といふ莊頼かる者ぶ戸口まで來たりて問ひ
ますに外は居るお方何方々何へおらうかきれまはる基
爰小罪の重任と背負たる勞苦たものが將亡城より耶山へ往く
ためふまのりありて將に至らんとするの怒を免れたる
と存じますこれ或る人が此門より往けと教へて呉まはる
やうのことでまが尊駕さん請がおまらせうさいやう私の入る
みとを許さうとせられませうといふを惠慈に答へて私ハ真
心より願ひまはるとして遂に其門を開きまはた詩に

撒但鬼王之名

諺云遷善須急

欲入生門得上天 先當認罪立門前
窄門切扣方能入 主宰恩慈救我愆

時キ基督徒が其門に入らんと致し、まが彼の人ハ急キ基
督徒と門の内へ引をりここりたゆ基督徒ハ不思議なおもつ
何ゆ其うふおまきやと問へを惠慈がゆふハ此門より
直ちく小一の堅寨があつて撒但が之れを守り其處ををる多
くの悪魔が此門に入らんまが守る者と伺ひ寨の上より之を射ま
せゆえ或ハ射殺される者もあつて入り兼まはる。時キ基督
徒ハ且喜び且懼を門の内へ入る司門者のゆふは爾マ爰來ら
と誰がおらうとち「基傳道者が我ハ此門を扣くこととおらえ又

天啓

其のち、為まきこといみか爾、示と受けらるるに、
 爾乃前の門を闢け、たれを最早人、之れを闇ること、
 せん「基、私、先危険と冒す、るれば、今、大い、益をえ、
 慈のい、より、爾、い、独、で、ま、い、は、
 れ、より、に、自、分、の、危、ま、こ、と、知、り、ま、せ、ん、
 と誰ぞが知てあり、た、基、最、初、家、を、奔、出、
 子、も、中、及、む、ず、隣、右、の、人、ま、で、私、と、呼、
 て、耳、と、掩、へ、と、向、ま、ふ、己、れ、道、を、も、
 者、の、う、ち、小、爾、又、跡、も、と、を、勸、め、
 た、其、人、の、錮、執、と、易、遷、の、兩、人、で、も、
 然、し、私、の、從、が、い、ぬ、あ、や、と、知、り

錮執の方、私を罵つて、歸り、獨、易、遷、を、
 同行、い、ま、した、
 人、し、て、憂、鬱、泥、ま、で、は、
 ま、た、が、其、ま、不、因、
 る、こ、と、と、や、め、己、の、家、乃、方、
 時、私、小、向、つ、く、彼、の、美、
 の、路、と、ゆ、ま、私、亦、私、の、路、
 い、り、ま、した、
 と、輕、視、の、で、あ、い、ま、せ、
 で、志、と、喪、く、と、い、ふ、こ、
 天、路、
 廿一

とやうくと申すたが然し私の情とかんがへて見るとそれを易
 遷と何も異つことやもなりやすまひおせといふ彼は自分乃
 家小歸りたるれども私に世智助のいふこと小従つて正路を
 もて死ぬる方へ行きますたうらサ「惠意爾に世智助はあひる
 されまうたの而て特法さんの手をかきて安心しうと思ま
 たる實にあの兩人の人を欺ますや爾にあの人たれいよま
 従ぐひまうらう「基左うらサ私に其言小従ひくけりて特法
 んは遇と思ひ其家立ところの山即ち西乃山のところまで
 まわりやすと其山が私の頭のうへに墮下さうを勢ゆへそれ
 懼て其とありふ止まうら「惠此西乃山で多の人が死にますが

以後もまゝ多く死ませぬ然し爾に壓碎まうらととおのりれ
 かせいまうて幸甚おます「基左うらサ實に其處に人のよう
 におやが出来り知まませぬが私に憂思てある真最中に真の
 神の御恩を傳道者と遣されまうら若し左もや私に今此
 まゐるこゝにいません私のほうの大罪もの山の為は壓死する筈小
 てがうら主ともい言まらざらうではありませぬの今尚私を許
 ら此處に入きてくされまうら「何らお恵であらぬや
 「惠何のようか人でも素何のようか行ひを為さ人でも此に到る者
 は皆之れを納め決して逐うといひたしません（約翰六章三十七）夫
 故ふとぞ私と借す少くお行あさうら爾う行はらぬ路とわく

此路開創馬太
三章三節

てあげませし前より狭路と五覽なき見へし此路の雨の行
 ねむるぬ路でございし此路の諸祖と預言者と基督と使徒と
 の開創たるものより準繩の通りに直ぐか路が爾の行くべき路を
 知りませし「基此路の湾曲がなほさうでも遠人が行謬ませし
 「恵左より此路小畏と岐路がありませし（馬太傳七章十四）
 直ぐも狭路をあれして辨れませし（馬太傳七章十四）
 我又夢ふ基督徒を見まを背上有ある重任の尚元のやうして
 若し之を助る者があらざりしを此任の終り脱ぐてのやう
 ざる情態あり故に恵慈を問ていささう「基私のた免は此任と
 脱ぐてふされませし「恵暫く辛抱がされし救脱場所に

行きてまゝたかすも自然に其任の脱がせし時小基督徒は束身
 て旅仕度と始たり「恵此門より少離きところ小釋示といふ
 者の屋が有りませし其處小行きて門を叩ひて彼より雨も
 善く示へませし。基督徒も恵慈小別と告恵慈も亦道中
 安全と祈て立ち別き基督徒の釋示の屋に至り再三其門を
 叩きあり頃あつて一人が戸口小まで出で来りて外に立者
 と誰人かやといふ「基私に此家の御主人の朋友より此處に來
 まするべきを必き利益をらるであらふと教られてまぬりま
 して旅人でも何卒御主人にお目ご掛りたはらさませし。取
 次は主人小此ことを告げま程かして此宅の主人出で来りて

「美何御用でありますや。私ハ將亡城カシ郇山ノ小キで往ル
 ンとして此處ニ来リマシ。者でも此窄門ト司人ガ私ト
 へて若シ私ガ汝ニ處トお尋ナリます分レバ私ガ旅行中ニ大
 助トナラベキ善カト示シ下サレるであらうや。た
 「衆示カ入リカサレマシ。汝乃為コカノことを教マセトハ
 其家ノ人ニ蠟燭ト燃サセ基督徒ト從テ私房ニ入り家ノ人
 ノ命ケテ一ツノ門ト啓セシ。門ト啓ケモ向フノ壁ニ甚ク正
 カル人ニ圖ガ掛テ何モ其像ハ目ハ天ト仰キ手ニ聖書ト執リ
 唇ニハ真理ノ訓ト書シ。此世ト背メテ人々ニ苦勸ガ如キ。狀
 小ク立ち首上メ金ノ冠ト懸テ。基此ハ何レ意デス。釋

哥林多前本ニ
 重生ノ字ヲ用

加拉太四章十
 九基督之狀成
 於尔馬トアリ
 本書ニ就テ看
 ベシ緊要ノ大
 事ナリ又ニ撒
 羅尼迎ニ章七
 節モ此ノ意ナリ

圖のうちに人ハ千人の上に超テ人々則チ使徒の言キ能語
 「蓋一爾ハ基督ニ在テ一萬の師ト持ト尚爾ハ多くの父ト持ト如何
 小カレバ我基督ニ在テ福音を以テ爾ト生一ケリ(哥林多前
 四章十五)我ガ小子ニ我ハ爾のうちに基督の形造ルマデ爾の
 為小出産の苦トカセ(加拉太四章十九)其目ガ天ト仰キタ
 手ニ聖書ト執リタ。唇の上ニ真理の訓ト書シ。見テ
 いろうち小其意ガ汝ニ顯レサレ則チ彼の職ガ知レ又罪人小
 真道の奥義ト識セラ。故ガ頭キマシ。其立テ
 状ハ苦んで人をキメ。又世間ト其背後小
 其首上小金の冕ト冠タルハ愛心を以テ主事ガ為目

目前の諸物と
軽んじらるる
能くあれし
る子

前まへの諸物しよぶつと軽んかろじらるる賤いやしみすもゆえ來世らいせにおいて、榮はらえある賞しょうを
得うること、必定ひつぜり違ぬこと、汝あなが知しれませよ、爾あやが今天城てんじやう小往ちやうん
とて途中ちゆうちゆう若も疑難ぎなんに遇あつたなら、獨たが此圖中このづの人ひとが王わうの權けんと
受うけて爾にを安やすまき、導みちびたませよ、夫故それゆ小我われの先まへ第一だいいち小この圖づと汝に
見みせよ、ので、この示しめされたること、見みたこと、善よく注意ちゆうい祈いのを
なすません、只ただ恐おそく、途中ちゆうちゆうみ、汝にを岐路かじろ小導みちびき、天路てんろだといひ、もの
ありませよ、其路そのぢハ死しする路ぢで、何なにも、其様そのようか者もの小出逢であひ
た、必かならず防ふせねむりません、其後そのち釋しやく示しハ又また基督きりすと徒たの手てを取とり
そ、一ひとつの大おほき客坐きやくざ敷し小入いり、其坐敷そのざしきハ久ひさく掃除さうじゆせよ、ゆえ
小塵埃ちゆうちやくが澤山たくはん又また充積ちゆうぢやくてあり、釈しやく示しも暫時せんじ客坐きやくざを環視かんし、其

後のち一人ひとりの男おとこと呼よんで掃除さうじゆと初めさせ、さうして、小飛塵ちゆうぢん四起しきて面おもてと撲うつ
口くち小入いるや、息いきとも止とまるほ、の勢いきほひ、此時このとき釈しやく示しハ又また旁わうに立たちたる
下女したむすめと水みづと灑そげ、命いのちけ、か、下女したむすめの命いのち又また從したがひて水みづと灑そぎ、快かよ
く掃淨さうじゆめたり、基もと是こゝハ如何いかんある意いてあり、す、一ひとつ、是こゝは坐敷ざしきハ未なく福ふく
音いんの深ふかき恩おんあ、清きよめ、きぬ人の心こゝろよ、この塵埃ちゆうちやくハ性しやうと染そつ、た、る
罪つみと内うち小腐くさ、こ、た、る諸しよの汚惡おとがでも、最初さいしゆ小掃除さうじゆと始はじめたる人ひとも
律法りつぽうあ、後のち、水みづと灑そぎ、たる女むすめも福音ふくいんでも、汝あなが五覽ごらんの通とり始はじめ、ハ
掃除さうじゆの時とき、塵埃ちゆうちやくが飛起とびて、淨きよまること、出來きませ、ん、ん、の、月つき、丁ぢやう、度た、真ま
神かみの律法りつぽうが人の心こゝろと、滌あひ、人の罪つみを除のく、こ、の、か、ぬ、う、か、もの、
て、律法りつぽうの働はたらひ、心の罪つみと、清淨きやうじゆする、ま、の、代しろ小靈魂れいこん、罪つみと、魁せへ、ら、ま、

羅馬七章傳法ノ論、意味深長ナリ本書ニ就テ考究ス可シ

る者多しを加力なく罪を増しはす蓋律法は人の罪を表し
して之を禁も罪小勝ち罪を滅むの力とありませぬゆへです
(羅馬七章六)次は女の水を灑ぎて塵が悉く掃除の出
来た五覽がされたり此を丁度福音が美甘く尊寶感よく
人の心に入りたるを水が塵埃を沈めて廳が清潔なること
く福音を信するを小入り罪が消滅して靈魂が潔く榮光ある
主の時々任せ玉ふ所となりす(哥林多後書六章十六)
我も夢に釈示の基督徒の手を引て一小房のうち小入ると見
あり其室内に二人の童子が各椅子に坐せり長子の名は情慾と
いひ季子の名は忍耐と云情慾の状は甚だ不満足なれども又待

意甚だ恬然たる基督徒の不満足なるは何故なるか一釈彼の管理者
の彼が受べき幸いと次の年乃始と與へんとされども情慾は之と
今年のうち小得たく欲し夫故不満足の有様ふも然も惟
忍耐は甘んじ之と候故に意安恬なり時々又一人の金寶一袋と
をもつて情慾の足下におきし情慾は之ととり分け玩むひ大々
喜んで忍耐と笑ひし未だ問もかきし其金は之を蕩盡して跡へ
のこるもの惟一の破き衣のとなり。基督徒は釈示も問てしや願
はく此事を釈て我小あしく五へ一釈此二童子は此世の情慾と来世
の忍耐とを示したるものありて爾の見るははり情慾は總ての物
と現時小得んことを要し来世まで待みとてしや猶今世

俗云十鳥在樹
不如一鳥在手

の入り此世は幸を得たと思ひて來世まで待て候と云ふは
如く夫の來世の羨福は真神より多く親證據たゞものなり
世の人々之と略して求めば諺に手ある一ツの鳥は木より二ツの
鳥よりも價まるし如く人々惟目前の福と求む然らば
汝の見るごとく情慾の幸は暫時のうちに全く費して破衣の
なり残りたるものなり此世の福と求るものハ終りの日おし
亦かくのび「基我今忍待は多くの理合は於て無上の智者
なることを知る一ツは彼ハ最も大いなる幸福のため待ち
二ツに他の者ハ破れ衣の外何もかけきとも彼ハ榮ある
幸福を得るはたれハかり「釈但此をとりてハかくまうと他の

故もあるなり來世の榮ある幸福ハ永く存して廢ぬかれども此
世の幸福ハ忽ち消亡するべし夫故に最初情慾が幸と云ふは
忍待と笑ひ「其終りふおし忍待が最も善き幸福を得る
と云ふ手もかく情慾と笑ふは道理ハ始と云ふものハ必終があつ
之に続き終らざれば來らざるも必其來る時があるは然らば
終らざるも終られざるも必其來る時があるは然らば
必先づ一時小用ひ盡せども終り得る所の幸ハ必長久持ちつ
のかり聖書ハ富人と指して曰く汝ハ生前に汝の福とらけラザロハ其
苦と受たり故に彼ハ今慰めらるる汝ハ苦めらるる（路加十六章九
「基而て見よ目前の福ハ貧らぬはづめて來世の幸福ハ必待

登きまゝと知れり「釈汝の言ハ真カク蓋見らるべき物ハ一時
 のあつて見らまざるものハ限りかきもの也（哥林多後四章七事
 斯の如くといへども然りなぐ見へる者即ち此世の事人欲は
 互に近く交るや隣のごとく見さるべきもの即ち未来の事
 と肉欲とは互に遠まきと他國の如く（羅馬七章十五ヨリ廿五故
 小第一の者よおわく其交親睦やまぐ第二のそのふ於てハ其間
 久く疏ま志て親みまぐ。時小我又夢のうちに小釋示が基督徒
 の手と携へて一ツの場所ふ至るを見し其處ハ牆の下より燃
 いづる火なり又其旁ふ一人が立て時々水と以て其火を灌ぎ之
 と消滅せんまればも火ハ益す熾かるがごとく我を見しを故り

基督人
 信者

基督徒ハ釋示ふ問ふて曰く此を何のゆゑなぐ「釈此火ハ心此
 中ふ感化さる恩の働きふて此火を消滅さん為め水と灌の
 人ハ惡魔なり然りなぐ汝が見る如く火ハ水のため小勢を減ま
 るみくお益き熱まるふ之ふつて他小原因あるを知らるべ
 と是ふおいて基督徒ハ牆の他側を轉視バ其處におひ一人
 手ふ油瓶を持ち物陰より常ふ火のうちに油と灌るを見し
 里「基此何の意をや」釈此油瓶を持ち人ハ即ち基督あり
 て常々恩の油を以て心の中と感しなる恩の働と助るものなり
 此助けふつて滅さんまゝ惡魔の尽カも其功をかさび終る基
 督人民の靈魂ハ恩と認めらるものなり（哥林多後十二章九）惡魔

悪魔に惑はる者心中の
思化をさとら
むとありて滅亡
まふまふ理り
ふ猶存する城
外より助る人
の有るゆゑなり

に惑はるる人の恩の働きの霊魂のうへに如何にあらざるに
解し難きゆゑに城外に立ち竊火を助くる人と以て共に
此事を教ふるなり其時小釋示ハ亦基督徒の手と携て一樂
所に入里たりしが中より美麗なる宮殿あり基督徒も之を見
喜ぶこと甚だしく又殿上より全身小金の衣と衣たる人の行遊
まると見しを基督徒の曰く吾儕ハ此内へ入り得るや否やと
しつて釋示ハ彼の手を執り宮殿の方小導きしが見しや大勢
の人々が門前小立ち入らんと欲して敢てせざるが如し又門より
少し離れし處より一人棹の近旁小坐し棹の上には冊書と筆墨
とを載せ凡て此門小入らんとまるともて必き其姓名と録さん

かためかり又甲冑と衣干戈と操りたる衆の人此門を守りし
凡て此内小入らんとまるともて妨害すること小力と尽たり其時
基督徒ハ此有様を見て怪たりし此門小入らんとて来りし
衆人も之を見て大に懼退きたり其後一人の甚だ剛勇なる容貌
の人が入り来ると見しが名と録もの小近ひて曰く我が名と録
る一玉へ彼も其名と録のち劍を抜き蓋と戴た急ぎと
操者小撃てうまむを操者も亦力と奮て之と撃たり然
しも彼の人ハ少しも屈せむ左衛右斬彼此傷とらるるの後
(馬太十一章十二使徒十四章二十二)乃ち一路と劈開き直衝
りしは宮殿小消遙まるともて樂た聲をあげて曰く来り

我限なき榮をうへて其人乃ち入りて亦金の衣を
 基督徒ハ之を見て微笑して思へらく此事の意我之と
 乃ち釈示小向ふて曰く此と離さく復往くことと願くは今
 我許一玉へ一叙未可あらず我汝別の情と示る後則ち行
 是小おひく釈示復基督徒の手となつて一ツの黒房小入りたり
 一其内小一人鏡の籠乃ち小坐したる人其容貌ハ甚憂
 目ハ地とがのめ手束ね心ハも裂るなりりの悽慘す溜息
 とぞわたりた基督徒ハ釈示小向ふて此何ゆゑなりや一叙其
 故の知りたれを爾自ら問之因く基督徒ハ彼問て曰く
 汝如何なる人なるや一彼人我前と大異りたる者なり一基

路加八章ニ云
 フ所ノ者ハ乃
 ナリ
 千暫信ナレテ

絶望帖撒羅尼
 迦四章十三節

汝小ハ何者なり一我ハ曾て羨みき聖徒ありて己の目も人
 此目くも之と稱一(路加八章十三)又自ら天府小ゆくなれは真潔もの
 と思ひ彼地位と到るの想像とつて喜びとなり一基ソレハ然
 一今如何なるや一彼我今ハ望と絶一人小あつて鏡の籠内小あり如く
 其内小閉こめらるる脱出さるるあつて哀哉今ハ實小出
 るあつて何故小此有様に至りや一彼儆醒して謹守
 こゝを忘る私欲の頸上と嚙と置き世の光く真神の恩小負きて
 罪と犯一憂と聖靈小賜く聖靈我と離さる我ハ魔鬼小惑さ
 きて魔鬼我來きて我ハ真神の怒と起して真神我を遠ざかり
 我心ハ自然再固結をりて悔改むること能ハざるなりと

基督徒ハ釈示マ問ヤ曰ク此の如き人々ニテ再び望まざるべしもの
 彼小問ヘ依テ基督徒ハ彼ニ問テ曰ク汝ハ望と絶たる鍊の籠の
 ちに長く居あゝの外ニ望ミハあゝざるヤ「彼全く望ミヤ」基督徒ハ
 左様ニおもはるヤ夫の恩の子ハ憫なきものとおもはるヤ「彼我ハ
 彼の恩の子と十字架小釘」(希伯來六章六)彼の位と慢(路加
 十九章十四)我ハ彼の義と頼リテ彼の血と不聖のものとなり恩の
 靈を御侮たり(希伯來十章廿九)故ニ真の神ガ許まところの
 凡ての約束カ閉ラシメテ今ハ全く與ラズ惟我ニ滅まべき火の
 如ク怒リニ定まりたる判キ即チ死まべきものト外何モ殘
 ラざるヤ「基督徒ハ始め何と求め今此有様ニいづヤ」ヤ「彼

私慾ニ安樂ト此世の利益と貪るこゝニ因テ斯様ニなマナ
 リ然レ其まへハ右此物を得バ甚だ樂カク多ク思ヒ今ハ
 此等の事ナラズ反テ熱キ出グ我心と嚙まらるこゝニ小何ヤ
 「基督徒」ナラズ汝ハあぜク悔改めざるヤ「彼今ハ真の神ガ我ニ悔
 改むるまへ許サズ蓋悔改テ恩と望むの門ニ真神已ホ之と閉
 一竟ニ鍊の籠ニラチ小囚ニたり普世の人トシテ我ニ放チ
 テ出スルカハ哀哉永遠々々の災ヒ我いづんを能ク之ニ
 當らんヤ此時釈示モ基督徒ニ向テ曰ク此人の慘キ災ニ記
 憶シテ永ク汝の鑑トセヨ「基督徒」カウカ此こと懼ベシ真神
 醒メテ謹守此人の難義ニ效ふことナク此慘ト受るナキヤ

我をして祈禱輟さくめよ。又釈示に向ふて曰く君よ今我
道に進むべき時多や。我れ最ふ一ツ汝より示を待ち然
後汝乃道を往けよ。

是うおゝく釈示を復し基督徒の手を携へて一室に連行し
内ふも一人床より起あがり衣服を着かふるブルク戦慄して居
ると見る。基督徒は釈示に問て此人は何故斯く戦慄するやと釈
示は彼男に向つて其故を基督徒に告ふと命たり依て彼男の云
ふり此夜我睡りし時夢に天は甚く黒変り又恐く雷や電ふ
て大に驚りさるる時目とあけて仰き見れば常なるぬ早さあ
雲の飛り大なる喇叭の響とむるを其雲の上は數萬の天

使が侍位たる中お坐する人あり皆炎火より環りれて満天の
火であり其時大なる聲あつて汝死人よ起来て審判を受よと
ありたり其聲もも岩裂け墓開けく死人ハ盡く出来
たり其の中の或者は甚く喜びて上を仰き或者は甚く驚き
て山の下に匿ふことを求む時我雲のうへに坐したる人を見る
に書を展て世の人よ近く來れ命たり然るも彼のまへりして
冲出るところの烈火のため衆ハ稍遠ざかりたる距離に立ち
罪人が白洲ゆく裁判官のまへお立が如し便き距離を得る哥
林多十五章。帖撒羅尼迦四章十六以下。又聲ありて諸天使小宣
諭志て曰く縛と糠とを刈り集めて火の湖中お投し（馬太三章十二）

同十三章(甲)其聲ともも小底のうき坑が我が立つところの傍に
 開けて其坑の口うは烟火と燃たる炭が怪しく怖べき聲に
 て沖り出たり。雲に坐まもものを復天乃使み諭して曰く我
 穀ハ歛をく倉小入り(路加三章十七)其聲ともも多々の人々天
 使み導れて雲の上を昇但余ハ遺されて下にある(帖撒羅尼迦書
 十六)其時我又逃匿れんとせしものども匿ることをせず其故ハ
 雲の上小坐せる人々常み余が上に目と注ぎ余が生涯に作り
 たる罪を一々胸小浮して余の良心も亦四方八方の我を
 非難せし(羅馬二章十四五)と夢をて睡を頼り覚たるあり
 「基此夢の中においしく斯くは汝を驚りせしを何故ぞや」彼男

時常自余其眼
 光可恐怖
 良心四面余
 其苦可想

預備未整而出
 其不意

審判の日が来りし我ハ未だ其預備をせざりしこと又夫
 かりを驚れしをも天の使が多人と天を導りしとき余と
 遺りて下におまきしこと又丁度我立ちたる傍に坑が開きた
 るなり亦我の良心が強く我を非難せしこと且又判の主と
 常み余を目して其面色に賤みを頭ハたる等のこと小なり
 て余も大に懼しかりし。此時叙示ハ基督徒と謂て曰く汝ハ九
 十是等の諸情を思ひ考へたるや「基左様サ此等の諸情ハ
 うりて望と恐を我よりうたり」叙此等の事ハ汝が行べき途に
 おいしくチクく刺すやあらの針あることを心せしむる謹
 べまかりし然して基督徒も帯結ひつけし旅の別を告げし

其顔色ニ我ヲ賤
 且ッ恐ヲ含ミ
 形容人ヲシテ悚
 然タラシム

望ト恐ト二字ハ
 門ノ樞要關ヲ越
 ノ鑰トモ云ヘシ
 金針

を釋示も亦之を祝して善に基督徒を願く天城に至る此途
まのつらみ保惠師の汝と導びき直ふ行んことをと基督徒
も詩と謡ひつゝ行く。詩も

來斯得見七奇情

寶訓諸條時必念

吾策直趨狹路程

聖靈叙示極高明

時我夢のりちふ基督徒の前乃路と見れ、両側より極救と
名づけらるる護牆のありて(以賽亞二十六章)基督徒ハこの道
を奔る然も背上下る重任のため歩行も甚だ難波なるに奔
りて一ツの小高き所に降りて見れば其處ふ上は一ツの十字
架を立て下は一ツの空墓あり。叔我を夢たりちふおわく

保惠師約翰傳
十四章十六節

空墓、宇着眼
下文、仕脱着
取也

基督徒の彼處に近づくとみて、彼が其處に至るや
いかに彼の背上下る重任の肩より脱てころくと轉び彼の空
墓の中へ跳入此後を復と彼の任を見受けざり。時基督徒ハ
身が忽ち輕爽なり心地もよかれを樂した心よていふ、彼ハ
己の憂を以て我に安とあそ彼ハ己の死をもつて我に生命と
あそたりとなほ此處ふ立ちて暫くの居ひ、奇に觀居る
り、何とぞれを一度十字架を見ることふを望みて其任を脱斯
くも安くありたるゆかり故をもつて彼の頭の泉が頬の下ま
で水を送るまゝに再三打觀つたち居たり。(撒加利亞三章)
十此時見よ三ツの光輝なる者、就て其安を祝ひ、第一の者

曰く爾の罪は赦されし馬可二章五節第二の破る衣と脱せ
て白き衣小易へ撒加利亞三章四節第三の破る衣と額に印とを黙
示七章三節又印となしたる巻物一卷を與へて曰く道中と奔ゆべ
之を見て天城に到り後いれと納めよと言訖て三光耀者八歸
り去り惟基督徒は喜び堪む再三踴躍て復往く詩に

今看十架並空瑩
罪任除開我得生
主代余亡身釘架
万年樂頌主之名

衣如雪白此人
翻見旧情悉換新
惟是罪夫蒙主義
華毛鴉揀表華身

時我及夢のうちに基督徒が下地ふ前行をすればその路旁に
桎梏とりて繫れつ熟睡したる三人の人あり一人の名は愚蒙
一人の名は懶惰一人乃名は自恃なり基督徒其打卧したる有
様とみて思ふや若彼等の目と醒しうる事もやあらんくして
之に近づたいひくるを汝等の此處又睡れるは帆檣の上又睡る
かおと一(箴言廿三章三十四)その下は底なき淵の死海あれば
急く目と醒てもに行べ若し吾らいふとを用かば吾その
桎梏と解べし且亦撒但といふ惡者ハ吼へる獅の如くふて各處へも
遍行ゆめ(彼得前書五章八)其者が此處へ來たるあつば汝は
必む彼の餅食となるべといへむ三人の目の目とひらきて基督徒

自恃曰爾為爾
我為我不事

と視^みが「愚^カ吾^ハハ危険^ニ」とあるをみぞ「懶^カ吾^ハハ今暫^クねむらんと欲^スす
 自^レ各自^ノの桶^ヲ其足^ヲ立て立つ物^ヲかりと云^フつ彼^レ等^ハ復^ビ睡^ムつきたる
 き基督^徒己^ノの道^ヲ進^ムが道^ヲまう思^フやう彼^レ人^々は此^ノ危険^ニ
 居^キあつ吾^ガ呼^ビ醒^マして彼^レ等^ヲ勸^メ彼^レ等^ヲ助^ケて彼^レの桎^梏とも
 解^クんとすでおもひに彼^レ等^ハ此^ノ惠^愛と^ウけむして反^テ斯^クも
 輕^カ視^スするものなるりこれら^ノ為^ニ思^慮とめざらしつ行^キと記
 窄^ク門^ノの左^ノ手^ヲを壁^ニと踰^テ入り來^ル二人^ノのひとあり急速^ニ近^ク
 つたひ一人^ノの名^ハ特^儀といひ一人^ノの名^ハ偽^善といふ基督^徒之^レと
 見^テ問^ヒたるを「基^ニ二位^ハ何^レより來^タりて何^レまで往^クんと
 するや」特^儀我^等は虛^榮地^ニに生^レる者^ニふて今^レ聞^クと求^ムる耶^ス

山^ニに往^クんと欲^スするなり「基^ニ途^ノの首^ニ窄^ク門^ノの建^テあるに何^レ故^ニ此^ノ
 門^ヲ由^テきたらざる聖^書其^ノ門^ヲ入り入^ラずして他^ノ里^ニ踰^ルもの
 を竊^ニ盜^シかり盜^賊あるとあると知らざるや「約^翰傳^十章^七節」特^儀
 吾^等郷^ノの人は皆^門より入^ルることを迂^遠おもひて今^レ吾^等が行^キあひ
 如^ク毎^ニ捷^徑より踰^テ入^ルるなり「基^ニ我^等が天^城に往^クため天^上
 の主^宰の己^ヲ明^クり論^レたり然^ルを汝^ガ若^シも右^ノのおくになせ
 一^ハあはは是^レ其^ノ論^ヲとすたといふものありて罪^{アリ}といひひが「特^儀
 汝^ハ斯^ク云^フもそれ憂^ムとまる不足^ニなることあり吾^等が此^ノ事^ヲとぞ
 皆^レ舊^習にふるものありて倘^ニ疑^ハまは千^餘年^ノの慥^ニを證^據を見^ルべし
 基^ニ但^ス様^ニ行^クこと之^レと律^法は按^テて宜^シなものともまは「特^儀

這は千餘年の舊習ふるしゆせにて兼公審司かねこうしんじに遇ふとも必かならず此こゝをもつて
 宜よろしき且かつまゝ人ひとの正路中ただちみちにあると得えは何なにり入りしといふ詮せん
 議ぎだてまい及およぶまゝ路中みちに在あるを足たり觀みよ汝なは窄門さくもんより入りし
 のこの路中みちに在あるのこゝ余われは牆かきを踏ふて入れども亦また此路中みち
 あり爾なんぢと我われと較くらべん何なにの長ながきところあるや「基もと吾われハ主しゆの律りつ」
 遵したがつて行いひ爾なんぢは意いのちよ働けんきとせし此路こゝの主しゆが汝なと賊ぞく
 をまごころよ末路すえといふまれば如何いかで汝なと純民じゆんみんとかなるべき
 汝なハ此諭こゝは遵したがはすといふ妄あやり自みづかり入りたれば後のちハ必かならず其恩そのおんと
 得えむといふ自みづかり空むかしく出でるならん時儀ときぎと偽善ぎぜんは此こゝを聞きて
 何なにと答こたへんやうもなき惟爾ただなんぢは爾なんぢの仕事しごとと理ことわりハ足たりんと言いふべき

是こゝにおいて彼かれら三人さんにん各おの々の路みちを行いき互たがひに多おほくも語合かたがひなりし時儀ときぎと
 偽善ぎぜんハ基督きりすと徒とと謂いつていふ諸しよの律法りつぽうと儀禮ぎれいとハ我われ切實きつじつ小せう之これを
 行いへを我われハ汝なんぢハ似にたること疑うたがふべくもあらず又また初はじめ少せうも異ちがはる
 こととはなけれども惟ただ汝なんぢの上うへ衣はきをうまは同おなじくするがを思おもふ
 其その上うへ衣はきハ汝なんぢの裸體はだかの羞はぢと掩おほふた先まづ隣となりの或ある人ひとより與あへられたるもの
 知るべし「基もと汝なんぢハ窄門さくもんより入いらざるゆへ諸しよの律法りつぽうや禮義れいぎは後のちの
 とも救すくれざらん」(加拉太二章十六)又また我われ背せ上うへにある上うへ衣はきハ我われ行いか
 んとまゐる所の主しゆに賜たまはる物ものなりて汝なんぢがとる如ごとく我われの裸體はだかと掩おほふ
 ふた先まづ我われと與あへられたれば此物こゝを則すなはち愛惠あいきの徴しるしと思おもはる
 かりいらすかきし其その以前いぜんは破衣やぶれえのほり何なにも持もたざるゆへなり

義衣

又路を行くとき自心を慰さめつゝ意ふらう若く天門小到りし
 時此衣と持ててよま主と認れて幸を得らるべし如何小と
 なれば此上衣は主が破き衣を剥たすひ一日賜ふところれ
 衣かるゆへが又我頼まハツの記号あれとも恐く汝の目よ
 見えさるべし此記号は我主の尤も近き傳侶が我の任の肩より
 脱落たる日に印とつけられなき時又印と押さるるツの巻
 物と我小あへて道をわづ之と讀みて心を慰め天の門小入りし
 こと此巻物と納て門に入るの據とをたへしと命せられたる度
 汝の窄門より入らざるがゆへ小此敷物は汝の事欠てあるべしと
 侍儀偽善は此事を聞て黙然として一ツの答もなきを記此時

三人が前行を見、基督徒ハ稍前に進み復二人と話もせど獨自
 ら黙想つあひは謡ひあるひ悦ひ又常に彼の光輝者ら與へ
 られたる巻物と讀み心を慰めつゆなり々其時彼等は艱難
 山の下よまぐりり一ツの泉あり又其道は窄門より
 真直つたたる路のほふ二ツの路あり左右も山此下ふありて一ツは
 左に轉ト一ツは右に曲たるも此れも惟窄き路のこゝ真直ふ山の
 上を通りたる是れ山よのぼるこゝ甚だ難がゆへ小之と名つけて
 艱難山といふを今基督徒ハ此泉よ近づきて以實無書四十九
 篇十泉の水と飲精神も爽ありしつひ詩を吟つて行く

山上艱難我 不辭

因知生路必由斯

行從左道終亡沒

不若經辛獲永禧

斯くて特儀偽善の兩人も後まゝこのころ來たりしが此山の高くて
 峻きふあひ又其旁ふ左右は曲なる二つの路をみて思ふやう此左右
 の二路も轉て山腰を過くは基督徒の上たる正き路と相接な
 らんと遂に意を決めてこの曲路を行んとせし扱この曲道の名
 ハッは危險といひハッは敗亡と名つけたる彼の二人のうち一人は危險
 と名つけたる道とゆへに窮林の中を迷入り他の一人は敗亡といふ路に
 従ひて往たりしが此路は曠野に入りて山悉く幽暗かれ、忽ち失
 足て跌落後再び起るとみず。詩よ

窄門為始福為終

中道踰牆與賊同

偽善時儀私自入

而今竟陷敗亡中

時に吾基督徒か山に登るとみれいづれかの疾く走りて進み
 だれも漸々歩む遅緩あり終る山路の峻きのため匍匐と爰り
 て登りたりさき又此山の中間は、旅人の倦と憩息ため此山の主
 が建設けられたる快い亭あり基督徒が此所不起りしとて
 十分力倦たれば乃ちその内は坐して休息し懐く彼の巻物と
 取出し之を讀て心は慰と得又十字架の旁まで與へられたる上衣
 と復ひ細觀て喜びかを暫時休息していづれかが覺えぬ眠と催
 し終ふに熟睡して日の暮とも知らず此所を留り又此眠りのうち
 にいつの間ふやら彼の巻物とも手から抛落ていづれか時或る

人來りて彼と喚醒つりやう汝懶惰かる人あるかな往て蟻と
 見其働と思ひ考へて智をかきよ(箴言六章六)是は公おひく
 基督徒は起あり急まじ其路をけし最早山の頂に至りし
 と思ふところ向く息せたまへて走來る二人の人あり一名ハ臆病
 左衛門一名は疑の助といふ基督徒ハ彼の兩人不問ふていふやう
 何ゆへ此路と其様又奔り玉ふや「臆吾儕ハ將に郇山を行んと
 して此難儀あるところ來りし行はば益危驚しとに出
 遇われバ今後もと里とをさんとせしかり疑實其ごとく此道
 の先には二匹の獅子が道旁不伏して居るわれハ睡てゐる起て
 なるは知らねども吾儕が之に近づきしをば必も切々に碎

かしくんと思ふやかり「基汝の其言は我を驚懼しむるあり然るこ
 我今何へ行べきや何の所が無難あるとありかりや若しも故郷か
 へらんとせば故郷ハ火と硫黄とて滅亡せりておれを必も供と亡
 ぶべし然も若し又天城にいたりしは必ず安然しりて危き
 こそなりとて見ればかへれば死るの外望なく進め死の懼あれ
 ども後ハ限なき命と得るおしければかへら我ハ意を決て前
 往し孤要まるなりと故に臆病左衛門と疑の助は基督徒は別
 山と下里基督徒ハまゝ前に進みたり
 扱も基督徒ハ復び路を進みつ彼兩人がいひいおくとおもひまれ
 つけても彼の巻物を讀て心かぐさ免とせんものと懐中に手を入

れておまゝに之と索むまでも竟に探りえざるべし。其の基督徒ハ
大にうれへて其おまゝに之と知らず如何とあれを彼の巻物ハ常々
彼小慰とあへ且まて天城よりしりし此の通手形あれを今この
品のあつさるることより躊躇愁立て心の方角と失ひてか後
忽ち山の半に建られたる亭に睡し大に思ひだす其行の愚な
事と認め跪下て赦宥と真神とを免後巻物を尋ねぬ
小跡もくまにたゞ其路をかく心の憂悶は實に口も
も速く或は嘆息あるひは痛哭又自ら怨みて思ふや彼の亭
は我らの勞と一時休息とせんたんに建設られたる亭にて寝の
た免たてられたるものふゆが然ると我に反て其所におし熟睡

旋返復傳律例
二章
定見の中、睡眠
するに幸あり
まて睡を戒むる

せしむるの愚さよとち路傍よりあり彼の巻物のあるやうにと
心をつけて行なりが程を彼亭の見ゆる所まで来りおぼ心愈々
睡たる罪と思ひだし尚も憂とすなまき(帖撒羅尼迦前五章六七八
夫ゆに今又彼にねむり罪と悲しつ路と行ときいひたるに我に昼ね
むりしよと此山の主が旅人の心となくさむらのみふ建設らまた休所
と反て肉慾の安とを慾と恣ひせしめは噫呼れ自ら
難儀とも免たれ無益な歩と重ねたり斯る心苦きまは昔
イスラエル人が罪のた免に紅海ふまで跡をやりさせられし其の
ようある彼等の難儀ふことかたしあつさるべし若しものる
罪あるねむりとせざりしは樂くあゆまん此路と悲みとあり

の二端とまへ

万路歷程

歩^{あひ}こゝと其^{みちのり}道程のい^{とほ}なり遠くかりたる憂^{うれ}きつゝさ一度^{ひと}は
 歩^{あひ}を要^{もち}まれ^らたる道^{みち}を三^{さん}度^どまで行^ゆう^をあ^らぬ^そのうへ
 ふ日^ひもま^ま西^{せい}の^うま^まひ^ひけを夜^よ路^ろふ^ます^すば^かな^らず^いま^ま噫^あ我^{われ}ね^むろ
 さ^ませ^せむ^むる^る艱^{かん}難^{なん}は^あら^らざ^らし^しもの^とし^し言^いつ^つ彼^{かの}の^{てん}亭^{てい}の^う
 ち^ち小^せ坐^ざり^りて^て暫^{しば}の^あひ^ひび^び哭^かた^たの^つ終^{つい}ふ^ま真^ま神^{かみ}の^{めぐ}恩^{めぐ}惠^{めぐ}ま^りり^り
 最^{さい}中^{ちゆう}の^あひ^ひむ^むお^おり^りの^ふ不^ふ斗^と腰^{こし}の^けの^さ下^さま^まお^おい^いて^て彼^{かの}の^ま卷^{まき}物^{もの}を^み見^み
 い^いせ^せく^くは^は戦^{せん}慄^{りつ}な^なが^がる^るも^も急^{きう}ふ^ふ之^のを^と取^とり^りて^て懐^{こころ}中^{ちゆう}に^{かく}藏^{かく}たり^り此^{この}時^{とき}
 基^き督^{とく}徒^との^{よろこ}喜^{よろこ}び^びは^い如^い何^ななる^か實^{じつ}ふ^ふ言^ご語^ごは^は迷^ま尽^{じん}く^くつ^つて^て
 匠^{たけな}と^やる^るべ^い如何^いに^かれ^れば^ば此^{この}卷^{まき}物^{もの}は^は彼^{かの}の^{いの}生^{いの}命^{めい}の^う請^う合^けふ^ふて^て
 又^{また}至^{いた}らん^んと^まる^ると^あら^られ^れ港^{みなと}天^{てん}國^{こく}に^おい^いて^ても^もそ^の入^いる^ると^され^れ證^{しやう}

書^よかれ^れば^ば今^{いま}再^{また}び^び手^てふ^ふい^いて^て事^{こと}ふ^ふり^りて^て殊^{こと}更^{さら}は^は真^ま神^{かみ}の^し指^し示^した^た中^{ちゆう}の^ひ
 一^{ひと}事^{こと}と^し謝^{あや}し^まし^ま喜^{よろこ}び^び涙^{なみだ}と^なが^がつ^つつ^つも^もや^や旅^{たび}路^ろは^は進^{すす}ま^また^た此^{この}時^{とき}基^き督^{とく}
 徒^とは^は山^{やま}を^{むか}向^{むか}つ^つて^て登^{のぼ}り^り速^{すみ}に^{すす}進^{すす}む^むが^がい^いま^ま絶^{ぜつ}頂^{てい}ふ^ふい^いぬ^ぬま^ま日^ひハ^は西^{せい}山^{さん}は^は
 没^{ぼつ}み^みし^した^たれ^れふ^ふつ^つけて^ても^も愈^い々^々ね^ねむ^むり^り事^{こと}の^し思^しひ^ひは^は残^{のこ}り^り思^しひ^ひは^は
 獨^{ひと}り^り哀^{あは}嘆^{なげ}て^てい^いふ^ふや^やは^は罪^{つと}ある^るや^やな^な寝^いて^てあ^あら^らぬ^ぬ之^のが^がた^たた^た夜^よ路^ろ
 と^あら^ら太陽^{たいやう}を^み見^みる^ると^あら^らず^ず暗^{くら}け^けの^と蓋^{かほ}ひ^ひ又^{また}夜^よ獸^{じゆう}の^あ哀^{あは}れ^れの^こ聲^{こゑ}
 を^き聞^きく^くふ^ふい^いま^まは^は皆^{みな}彼^{かの}の^ね寝^ねの^い致^{いた}す^すと^あら^らず^ず而^そして^て又^{また}臆^{おそ}病^{びやう}左^さ衛^{ゑい}門^{もん}
 と^ぎ疑^ぎの^{たす}助^{たす}け^けの^し獅^し子^しを^み見^みて^て驚^{おど}ろ^ろか^かる^る物^{もの}語^ごを^{おも}い^いだ^だて^て又^{また}い^いふ^ふや^や此^{この}等^{らう}の^の
 獸^{けもの}は^は夜^よ々^々なる^ると^あら^らず^ず所^{ところ}々^々と^あら^らず^ず食^たべ^べを^{もと}求^{もと}む^むる^るもの^のな^なれ^れば^ば若^もし^しも^も之^の
 又^{また}出^で遇^あは^ある^るや^や如何^いに^かれ^れば^ば彼^{かの}を^ひ引^ひ引^ひき^き留^{とど}め^める^ること^とを^あら^らず^ず免^まれ^れん^んや^やと^あら^らず^ず思^{おも}ひ^ひ煩^{わづ}ひ

天路歷程

て進すすみしる斯つる不幸ふこうある失策しつさくと悔くひのあつて行く時とき不斗ふと
目めが拳ゆづりれは見みえ其そのまふ甚こぶ立た流りかる宮殿みやだんありて其名なを義ぎ
宮みやといひ大道みちの傍たがひ小建たたまた（黙示録まつかう廿一章にじゅういち節せつ）時とき我われ夢ゆめ又
基督徒きりすとが彼の宮殿みやだんに到いたりて一宿いっしやくせをよとて急いそたて前まへむとみ
しがまま遠とほくも行ゆき一ツの小徑こみちふ入れり即まち其處そのところより殿みやに
外門ぐわいもんまで距離へたること二町ちゆうむりあり基督徒きりすとが此處こゝより遙とほのむらふと
見みれを道みちの甚こだ狭せまきところに二匹ふたひきの獅子ししあると見みつけたり

剛コウ過ゴ艱ケン難ナン今イマ復マタ驚オドロク

聖徒セイト安逸アイ難ナン長久チヤウキウ

山ヤマ雖イハレ得カハ上ノ有ホト獅シ鳴ナク

既イ脱ダツ前ゼン驚キョウ後ゴ又マタ驚オドロク

あのことれ基督徒きりすとは思おもふらう今いま我われがみつける危あやうさは臆病おくがや左衛門

疑うたがひ之の助たすけ速すみし所ところの事ことなると二匹ふたひきの獅子しし鎖くわをもて縛むたあれとも
基督徒きりすとはこの鎖くわを見みつけされを大おほに畏懼おそまふ進すすめ死しまふ外ぐわいは
路みちあつされは彼の兩人ふたりにんを見みえ効きうて跡あと返かへらんと思おもひ暫しばく度たびへい
りしに做醒せいせいと名な付つけたる門もんを守まもり番人ばんにんが基督徒きりすとの退意たいいの
色いろを表あらわし歩あゆむを停とどめ前まへを行ゆき見みつけ大聲おほこゑを揚あげ
る汝なんぢの胆力たんりきは何なにせさやうふ小こあろう馬可四章まかしよ四十節しじふしちせつ）畏おそるも勿なれ
此獅子こゝしし鎖くわをもて縛むたれ所ところの所ところは信者しんじやの信しんを試こし不信者ふしんじやの
不信ふしんを表あらわさんぐた免めんかれは路みちの中央ちゆうじやうを行ゆ汝なんぢは及およぶ事こと
なり時とき我われれ基督徒きりすとのまふゆくとみるは獅子ししの前まへの時とき
身みと戦慄せんりつつ同人どうにんの言葉ことばと固かく守まもりゆれたるが獅子ししの吼聲こゑ

と聞けども害せらるることなれば其前と過ぎしとて手と拍ち
 大に喜び終ふ番人の守り門に至りたり斯て基督徒ら番
 人小問けるはこれは何の宅なる我に今夜は宿せん事と
 願ふあり若し叶ふべき事ならば之とゆへ給へ一番此宅ハ
 山の主の建設たる所にて之と建たる故に道者の乏と濟ひその
 危と救んがためなり又いひたるは汝何きて來りて何れ往
 りんとしたまふや基我に將亡城を來りて郇山に往んといふ所
 あるが日は已暮し一夜の宿りと候し給へ一番汝の名は何を
 申せど基我に以前に從慾といひし者かもの今は改名して
 基督徒と稱あり一番汝は何せ斯うに遅くきたりや日は已

暮たるあり「基我早くもあにきたる可れと哀れたふは山に
 脇小建たる亭にて居睡とあり且此事のそは疾より早く來る
 可きと此居睡となつたると我が證據とあはべき品と思はむも
 取や山に巔まで登りてのち始めて之と失ひし事又心付き
 余儀なく寝所まで跡戻りありたるは幸ひ其處にて復び
 之と得たりし事なりて遅れかりと一「番若し然らば此
 所の聖民の一人と呼出さん彼若し汝の言と好とせば此家の法
 に從て家内中汝と導んて斯て番人鐘を敲けば勅慎と名付
 たる甚だ莊美き一童女鐘のこゑとまゝ門を出て何の用事お
 るやと問ふ「番答たるは此人は將亡城より郇山に往んとす

旅人から旅よりつて疲倦日已暮し一宿せんことを欲
 して其可否をこれまたつねを我れをあへて汝と叫出して
 此ことと語り後家の法に従て汝がうとあまふびと取らる
 んと彼告たり其とき勅慎ハ基督徒又何より何(往く
 やと問へ基督徒ハ前の如く答へり又此の路へは何より入
 中と問ふ彼まよと有り事と告ぐ途申ふ如何なる物
 あひやと問へ彼又一々之と告ぐ後又彼の名とを彼に
 即ち基督徒かり我が聞く所なればみ宮殿ハ山の主道者の
 之と濟ひその危を救ふたを建て設けらるるを今夜此
 所に一宿せん事と殊更に欲まる處なりと

此時勅慎から童女ハ基督徒のい事と聞て感哀の喜つ
 たり一の轡くしていやう我の家に入りて最ふ三人呼出
 と疾く入り門入り賢智敬虔仁愛の三人とひ出たり三人ハ
 出て基督徒ハあひ略すの談もみり家内の人々に引合せけれ
 多勢戸口よいで迎ひ彼接していやう汝ハ主より恩と得たるものあり
 サ入れ此宅は汝のおと死道者と待請んがた免山の主が建もう
 けたるものなればなりと基督徒ハ頭をゆめて禮とて彼らに随ふ
 て席につけまかそち飲物とゆえながそと晚餐の仕度
 のみで虚又時間を送らるる免心と令て基督徒に談語とせ
 んと思ひ遂に敬虔賢智仁愛とあふびを三人ハ代々対

語とちめたり第一敬虔のいふう基督の善徒よ我ら親愛もて
 今夜の宅に汝と止めしことわれ路中であひ諸情につき或は
 人々の益とあはまきことば語をたまへ基督より願ふ處を汝
 の志も甚だ喜びてあはくあり敬汝何のゆゑあつて始天路の道
 者と成たるや「基われ故郷に居るあり」とは常く耳のかたふ
 懼ろしき聲がありてこの處に任ぢるがやむる敗亡を免まじ
 たり我は告ぐゆゑわが本國と捨て出奔したるなり「敬汝本國と
 離ま如何ありこの路に來りや「基これ乃ち神の御意なりん
 何せわれを敗亡ことの恐を知りしむきへ避まきとあは哭き哀しみ
 ていり」は其名傳道といふ者遇然たりて吾に窄門と往し

告られたり若しあはくは吾のいふ其門に入りての宅にまき事あり
 ざりしなん「敬汝あふ來るふい釈示の宅よりまきりや「基然し其
 宅の來りし其處にて見し諸情は生涯忘るる其うちも三ツの
 このふおしし殊更なはけしこのまき乃ち第一「惡魔の働もめ
 げも基督が恩化ともつて人心を保たまふあり第二「或る人
 神の恩とくくべき望の絶てなきやどまてふ罪を犯したること
 第三「或る人が睡のうち審判の日をきでふ來たりて諸の有
 様と夢みるあり敬その人の夢みし事と汝述るるや
 「基聞たり其夢も甚だ懼るべき夢みし彼が其物語とせしとき
 ハ吾は心と痛めし之を聞しこのでまきし甚だ幸かり「敬汝

叙示の宅ふく此外に見うけし事ハあまや「基其外ふ見受」
事ハ叙示が吾とつれて偉宮と視せたりし其内の人々ハ皆金の
衣と着たり門前ハ戈と取るものが立ち入りんとする者と阻
居たりしに忽一人の壯胆あるもの來り刀と以て其中ふ向ひ一の
路と劈開て宮の内に入りしに内なるものが入りて永に栄を
得よと命したる多ぞ我之等のこゝを見て大の心と喜ばせり故
に彼の宅に久し居らん事と欲せしかども我は遠く行べき路
あれは止むとかなさざりしに敬此は途中より何ぞ見しこと
はらや「基吾未だ遠くも行ぬと十字架の上は血と流て懸りたる
者より吾一度之と見れば任いたちうち肩より脱吾が昔此重任

と背負てし中此時や嘆息哀哭なりしに任が脱て吾と離れ
は實ふ異なりて吾曾て是のむねと見たりし故に立とて
視むる居られむ視る時に三ツの光耀吾ふ近づきて其一ハ吾が罪
の赦されしと證し其二は我破れ衣と脱てて繡衣と我とあへ其三
は我が為し頼の上は此號と印たり此時は基督徒ハ懐中より
巻物と取出していひるは此印たる巻物も亦彼が我にあへし
志なり「敬汝此ことの外は必む見し事何ん「基今汝は速くハ
その大なるものと拳たるのこ固より此外は見しものあり即ち我
來るとは路の傍に偃睡たる三人の者より即愚癡と懶惰と
自恃とかり各錢具をもて足と繫たり汝度べし此輩ハ我力め

て之と喚ぶまをとりども其のこゝを聴はふそ又侍儀と偽善
 としものご妄りた墻と踰て來り空く郁山に往んとし
 未だ幾もや亡没たり我々の之を告て其禍はあはれ是れ
 如くあんとしむらうども彼はかろく我を信ぜし且吾此山
 登るとた甚だ艱難しして獅子の口先と過るとた若し門と
 守る人の我を呼ばざりしなれば恐くハ然にまゝ退返したる
 べき今吾爰に至りたるを得又汝らに納られし實に神
 小感謝せるとあらかり

時ふ賢智はかぬ許多の問をき事われは基督徒が一々答へん
 ぶくを欲して賢汝ハ故郷ををわけてより時々念ひとのふ事

敬虔か問ふ外
 賢智が問ふ所
 深淺アル筆者
 用意処者官
 必見取ラズ

ありしや基然り折々思ひしごとくも耻べき嫌ふべき事まで決
 して歸りたく思はざりしや出づ國と戀し念がくハ歸るべき
 機時もある今いたる天はる樂しき國と慕ふあり希伯來十章
 十五節十六節「賢汝いぜんお熟習たる惡た事は唯今でも悉く絶
 ぶるや」基然りその意はわがわが反きて其情をまふあはれ
 殊に私慾の念おほしそけさたお我郷人をもに樂しことなり
 りし今これらの事が悲しことなり最るを樂しみてハせざる
 ども善きこととせんと思ふしきお惡のつれと共居る事と
 覚ゆるなり(羅馬書七章十五ヨリ世)「賢汝と擾せる惡たは
 時とて亡びたるより思ひしや」基或とたはし事われども甚だ

罕かりあり此處に遇し時と吾ハ金玉のよりに寶とあり
かり賢汝の心とみざる惡れもの時々亡びざるに思
はる故ハ何んであるかとくひりや基固よりいひ能ら
る前十字架と見しこの諸情とおもひ出せしとき自ら
惡きことの亡びたるよりに覺へ又赤の繡衣と見しと抱中志
たる巻物と取出して見る時又我ゆのんとする所の一切念
ふときなど惡きもの亡びたるよりに覺ゆるなり賢汝が邯山
へ往んしと要むる何の故で有るや基前よりわき見受し十字
架にあり死たる者とそよ行きて其活たる貌と見又わき
と擾せし惡の絶んんと其た免又そよ行けたる永く死せし

聖哉黙示
五卷三出ツ

仁愛なる者
所ハ亦別ナリ

書名知々旅
礼人可レケリ
ロレ区情慈母
常斯ク如キ
多シ然亦ク續
編ノ女徒ヲ胎
リ

と聞たるも先黙示録廿一章四又わの最も樂むとあるの伴と
住まんしと望むためなり蓋しわれ誠ニ語らん吾が任と脱せし主
と吾ハ甚ぶ愛し又わが心の疾も甚ぶ厭たれば永世の地とい
ふまで常々大聲ふて聖なる哉聖なる哉聖なる哉と讃る
群衆と伍たらんことを欲せられたるなり時仁愛基督徒に向て
いふや汝は妻孥ありや「基吾に妻と四人の幼子あり仁何
せ彼らと連て一所に來らざるや此にた基督徒ハ目小涕と流し
いふや哀しやわれ之と欲せられども妻や子供は我ゆく天路
の旅と甚ぶ好まざるなり」と仁彼が此の所居ハ其危
きは若何ぞや汝ハこの事と告て彼等と連來るべきと「基

創世記ニ羅得妻ヲ疑テ未言ヲ戯言トセルコト

吾夫の事と告たり且ま吾が故郷の將亡おとと真神の告玉ひ
おと彼等ふつけいば彼ら反て我がいふおとと戯言とかりて吾
と信せざるなり(創世記十九章十四)「仁汝が此ことと告ると此言
を信まざるに真神が彼らの心と化し玉ふことと求はざりや
「基然と吾祈禱して小わが心において切りに願へ蓋し吾の妻
撃と最も愛するおとと汝の知るところなり「仁おとと滅亡の
畏ハ汝がの深く憂るおととを此ことと告げたると思ふ
に滅亡の情は汝が詳らに知りたるべし「基吾再三これと
告げたるなり且將小來らんとする怒と畏れし身は戦慄
て哀しみの餘り涕と流し居と彼を見て居るがう吾が勸め

従ふて共來らむに彼ら來らむとて自の何とひいや「基
吾妻ハこの世と戀ひ吾子供愚なる遊びごとと樂みとしてわれを
捨たるおとと仁汝左うに彼らと勸むるとも或ひは行ふといふ
善からむとて空言となりてにあらざるや「基實に吾おほくの過
ちあれむわが行の善くは敢ていひざる固くは善とて
人に勧るとも言と行と合はざるは益なきこととはよく知所か
りありし吾敢ていふべきことと吾の不善ふつて彼らの天路へ
行と阻るおとと何んやと深く謹み恐れたりが反て吾が謹
慎とて吾と拘執とあり罪なきのことと吾も行ひえぬと
いふ故に吾が行ふつて彼が天路へ行べきと阻たるは真神

罪と獲かつ隣人に害と貽んことと兢々として恐れたるふも
かゝる仁人は固くを加様のおくはる昔一該隠惡と行ひ弟
は善人なり一が遂小其弟と惡きた里(約翰前書三章十三汝
も斯のおく行ふて其妻孥の厭ひはこれあまううふ善敵
まるとこれむ彼の靈魂救はれざるも一は爾が罪小あ
がるあま

時小彼らは是のて物語していたるうち晚餐の仕度もい
のひけまは皆々席まつれ美味き飲食を一つ豆に山の主れ
事又つき即ち主の行かひ一あや行ふ所につき又い何故あ
美宮と建て給ひ一なと物語たりあが此時我竊く衆

人のいふあくと聞けを主ハ素と武勇とて世の魔鬼と戦ふて
勝と得たり一(希伯來二章十四五)血を流まへま危を受ると
あれども其民と愛してあまを行ひ給ふ事かれをその恩は實
極りかゝ愛まへく慕ふべしとかり且又彼ら中よいふものあ
まいひるは主ハ十字架死志復生り後又彼らに逢ひ一
とれ主の親しい給ふと聞て知る主は天路と行者と最も
愛し玉ふ事四海の内よあま者あ観ふ主は天の榮と舎
て罪人を救ふた免り此世に來り玉ふはこれ其二事より又人
と愛まるとの切あまくと證まると不足り又主は郇山においで
衆と同一く樂と享んことと要して決して獨り居るあくと

旧約書中過半
歴史あり又先知
預言ナリ

天路歷程

恩ともて之と納れ玉ふあゝ此外おわく此奇らゝた事と
載るゝたる曆史あり其中古より今ふりゝるまて
先知の預言ふ應驗て敵と駭懼を聖徒の欣慰めを受
けしゝ何里基督徒ハ悉く之と見たるま又明日ハ兵
庫ふつれゆまゝの其中に藏免たる神戰の器は神の劔
信の盾胸と護る義器救とのをむ免切禱の器福音の履
ハ久々踏て壞れむ此らの器ハ主天路と行者のたえ
ふ設けたるとありにて且主に事るもの天の星の數
やどあれども之は供へて足さるまとあゝ又さまに主
の僕が諸の奇らゝた事とおまかひゝゝた用ひたる器

劍盾靴履並
所六章十五六七
節

摩西、出埃
及四章二節

雅里西洗拉士師
四章二節

其田士師記七八
章

山伽士師記三章
三十五節

參孫士師記十
三章以下

大碑珂利亞
撒母耳七章四
節及四十節

と見せけるが其中は摩西が異ある能とおかひたる棍雅里氏
の西洗拉と殺したる鋌おび釘其田が米田の軍勢と逐
とれ用ひたる瓶燈號筒山伽が六百人を殺したる牛杖參
孫が千人と撃死したる驢の牙骨大闘が加得の人珂利押
と殺したる石と發石繩おび主の後震怒して起たまふ
日ふ惡人と殺まゝた用ひ玉ふ劍これ外多くれ羨しき物と
ことおゝ基督徒に見せけれを甚喜ぶ諸物と見おそ
て後復ひ寢ま就まけり我ま夢ふ基督徒ハ翌日寢り
起遂々出立せんせゝくば人々ハおれと留めゝいゝり明日
すで僕若し晴れ天氣なれば爾と率ゆれて樂山と頭さん

天路歷程

若し此山と見ば爾の欣慰いやすまをば何ぞあれば彼山
 この處に較ぶれば更ふ天國に近けれをかりと基督徒は彼
 等の留み従ひて明日の晨よりせり志ぐ人々の基督徒と
 ひた屋根の上より南に向て一つの樂地と望み見れも山多
 林茂り其中に葡萄園あり百の菓や各種の奇らき花
 あり又清き泉の湧いで其景色いと目と悦むたり
 (以賽亞三十三章十六七)その時基督徒はこの地の名を問け
 ばは彼らのいふに此地は以馬内利(耶蘇の別名)に
 神我と偕するとの意也と申志く此山と此處と共天路
 と行者の公用をそかりられたる汝もやあに至らざる

そこ小住む牧者が天國の門をかんぢし示して望まむ
 かりんと其のち基督徒は出立して前小進んと思ひ
 この衆人いれとゆきて乃ちひたるる兵庫に入り
 堅甲勁器ととり出さんと彼ら入り具足を取り出し基督徒
 が途中より出遇敵と防がんとたえ首から足まで遍體と
 護免たり

聖徒受益衆徒中

飽道沐恩時復往

幸遇途間教會宮

得天甲胃護全躬

基督徒は具足と衣をかりて諸友と共に門外に出で門番に
 問ていふに或道者ぐるを過はせざりやと門番答て

いよいよ過だたるものあり「基爾」の一人と識るや「番我」彼の
 名と詢しに「れは盡忠」と告げし「基」我も亦れと識れ彼
 はわが隣人なりかまは必むその村より来りしなれば何れ
 遠く行しと思ふ「番」今けのやうに山の下ふ至り「基」善
 のか賢き番人「爾」れと待もるふ前後おほくの愛情とあり
 へたす願くは至つぬ「爾」と共いまりて「爾」におほくは福を
 増たまはんこととさきて「基」督徒「前」又進むと「勒慎」敬虔「仁
 愛」賢智「彼」山の下まで見送らんと欲して彼ともに行
 と「前」又談しむと復語りつ山の阪ふまで至り山と下らん
 とまると「基」督徒いよいよ「前」又我此山と上るも甚艱難

居謙難夫
 足セサルモ少也

かりし「今」下るも亦危険なり「賢」知りし「誠」志をなす
 此山と下り居謙の谷へ入ると「踏」まづぬあつ實に「か
 我」らも来つて山の下に「雨」と送らんと欲するなり「斯
 基」督徒も漸々下り行くと甚だ「謹」慎しれども「一」二度
 もふみまひたり

亞波倫黙示録
 九章十一節

時「我」夢ふ「基」督徒のまでに山と下ると「勒」慎「敬」虔「等」ハ
 餅葡萄酒一瓶葡萄酒一房とみて彼「與」へたと見たる「基」督徒ハ
 山と下り「前」又進み居謙の谷を行くと甚だ「窘」みに出逢たり
 とけいし遠くも行かして忽ち「亞波倫」その「魔」鬼の野辺
 り近く来るを見つけ甚だ「驚」た心の内は思ふや「跡」は歸ら

ふの或はこふ立止つて待たうと又思ひ久せを我が脊と護り
 たる武器のつらさを若しや身と轉じて退まればわれと害
 まるこそ益易のうん志うげ生命を保たんは堅く立ちて
 退のまゝに如くあるまじと意を決めて漸々と前よりみ
 うは亞波淪も彼に近より来りしが此化け者ハ實不憎むべく
 懼るべき貌りて偏體に魚のおどく鱗皮あり彼ハこれをもて反て
 榮となりたり翼ハ龍のごとく足ハ熊のおどく腹よりハ火と煙りを
 吹いし口は獅子の口ハ似たるを彼ハ近づけり基督教徒と賤
 み見ていひ多は「亞爾は何れより来り何へ往んとすや」基我
 ハ將亡城といふ衆惡の所より来り今耶山ハ往んとするところあり

栄ト奇キヲ味
 セテ栄トカニカ
 フ栄トスルセ世
 多ク徒カラテ世
 独此ノ怪物ノナ
 ラシヤ

「亞爾が言ふことを聞けば爾ハ必我民がことと知る其地ハ
 皆わが地ありてわれハ即ち其地の王其民の主なり爾何ゆゑわれ
 背きて出奔するや若し復びわれハ事あることと冀われハわが
 撃ハ爾と打ち地に伏さしめん」基われハ爾の國ハ生さし一が
 爾ハ事あること甚だ難く工資もせず生と養ふ足らば蓋爾
 事あること皆罪のおとされハ其報ハ死多し（羅馬六章廿三）故ハ
 これ長大とありし時ハ智者に效て他の途と求められハ益増
 あることひねがふ「亞王」て其民の去ることを輕々ハ聽者ハ
 未だ曾てあることなりわれも亦断て爾去と聽さん若しわが
 事の難く傭資の少きを怨とをせむといわの勧めハ從て返る

べーわの國にある凡の物と爾と與ゆることを許さん「基われ已
 他の主即ち諸て君長の主と事へんことを許せしむれを若
 公義に依らば馬んぞ主と背れ爾と從ふを得ん「亞汝は惡き不
 向つて惡と變むるといふ諺の如くかたなるなり然し人々此の主の
 僕と稱しつゝ未だ幾かゝるむしく陰ふ之と背きわきて歸るも
 常かれは爾も是の如くせば害あるあかざるべし「基われ主と
 約と立く忠と盡さん」と誓ひたり今も一之は背にば主と背
 の刑免さう「亞若し然らば爾何ぞ我とむむれたるを去る
 かく爾と我と從て返るならんばわとはは爾と答むることわ
 「基前と我若き時少く安んず汝と事と許せしむるも今とら

未幾復背魔
鬼語甚妙す
門徒金針ト
云ハシ

事と所の者ハ全能の主なり縦ひ爾と罪に能ふもの主必
 之と解さん且わき前と爾と續て惡と行ふとも主と必むわれ
 と赦し玉ふかり嗚呼生と壞るれ亞波淪らわき誠ふ爾と告げん
 此の主と事へん彼の工資臣僕國政朋友やび其地は爾の物と
 較すれば殊更に幸福なり爾復び言ふと勿れわきハ乃ち主の僕
 つかさず之に從ふこと欲まるなり其時魔鬼の曰く爾此路と行
 ね何かも難に出遇んともや心と靜にして思ひ見よ彼の僕は
 我と背きわの法と犯きに因て非命の死と得るもの甚だ多し其
 中と辱べき死と受るもの曾く幾人なるや爾思ひ見よ彼に事ハ
 我と事より賢りしことかなや彼はその所と離きて我と手より

其僕と救ひ出し得むと云ふも我事不忠かるとまは彼やすは
 其僕のためと擧ぐあるも我力を盡し謀と施して之と救ひ出せ
 して普く世の人れ知るところなれば左様不今すも爾と救ひ出さん
 「基彼其僕と即今救ひ出さん」を其愛心と失なひまじ
 終不至るまじく彼不従ふや否やと試さんた危あり非命の死に
 出遇して、其僕より之と視まひ反て榮とせしむなれば、目前の
 苦と救はまんとは専ら望とまほ所あるむ惟々望とあまハ
 後の福に其時より主其榮と乗り天の使に榮と共に来り
 僕もす必ぎ榮と得べき日あれむかり「亞爾其主に事へん
 已不忠かれ馬を其賞と受べきや」基我何ふつて不忠汝

かあること有りや「亞爾初て道と就く」と此憂鬱の泥中に溺
 して幾んど死せんとも時志と喪ひしと又んぢ背任し主の脱し
 玉ふのと待べき不爾、妄ふ悪き法にて之と解んと試みしと爾罪
 かる睡とがして大切なる巻物を失ひしと二ツの獅子を見て退
 れ返らんと思ひしと又汝が天路を行く及び見ること
 聞て不就ても虚き榮と求めんとまほまは爾が言と為ま
 ことの間不現またたれあり「基今んぢの言へることとは眞實なり
 且その上爾の言ひ残りし悪れどもありしもの今も今も
 崇めて事なる主は慈悲ふしと罪の赦しと喜び玉ふか
 且つ諸て此らの悪きまじく、普く爾の國に住しと行ゆる

手を持つ盾と
は前よむ信
の盾あり

事あり其の悪と嗜むこと美食のごとく我れらの罪あり
任物あれば自ら怨む自ら嘆いて今主の赦宥と蒙りたるなり
此の如く亞波倫は大き怒りしより我れ即ち主の敵おれは痛く
彼れ彼の法と恨み又其民と恨みたり今これ處より来て雨と
阻ぐべしと要むるなり「基爾行くと謹めよ今我れ主は
大路をかもち聖善の路に在れい爾自り用意せよ時小亞
波倫は其路と横截りしより我れ何を懼んや爾の死を顧みよ
我れ諸の冥巢に誓ふく爾が復び行くと免さざる必む此所小
要て爾の靈魂と滅さんと乃ち火矢ともて基督徒の胸と射を
い基督徒は手を持つ盾を之と禦れ其危きと免れたり基督

徒は事已小逼りと知り立て視るへまふりくされい乃ち劍と抜き
前を進めを亞波倫も烈しく進めて之を攻め矢と發つこと雨
の如く基督徒は力と盡して之と禦ぐと雖も手足も頭目も傷
と受け之は因て稍退かむ亞波倫は益々逼りしよ復び力と盡
敵と戦ひ苦戦もこと約そ半日氣力も盡たりと如何
となれい基督徒は多く傷と蒙りしよ漸々力の衰るは知るべき
ことありさて亞波倫は其勢小乘りて急は逼りて組まんことを
き基督徒は思はず其劍と取り落せば亞波倫は喜びつしよ
爾の命今亡びたりし強く壓せば基督徒は復び生る望みなり
小真の神は恩かちや亞波倫が手と擧て此の善徒と擊斃さんと

不復見之雅各
四章七節

まゝもさき基督徒ハ手と急ニ伸テ復ビ其劍を得てヨキヨキ喜
ぶこと勿レ我ニ倒るるも雖も復生たるガリ(米迦七章八)是よ
つゝ劍ともて彼と刺せば遂ニ亞波淪は疾ク退テ重キ傷と
受けたる様子かれバ基督徒ハ復ビ進みて之と撃ちあひあ
我と愛する者と頼ミ我ハ勝能ふガリ(羅馬八章三十七)亞波
淪ハ翼と振ビ疾ク飛び去りうハ基督徒ハ復ビ彼を見さ
カキ詩に曰ク

今見諸情實可奇

聖徒頼主提神劍

聖徒魔鬼力相持

却使邪魔敗疾馳

此の戦の有様ハ親ク見き^ミ者にあ^ルされハ想像^ゾガ^クけ^ス

ども亞波倫は怪^キ大聲と震^ルりて其發言^ク龍の如^ク基督
徒ハ惟々呻吟嘆息^シ絶^テ喜びの容^チか^クり^テ劍ともて亞波倫^ヲ
傷と蒙^ラせ^テ天と視^テ微^ク笑^ミたり噫々斯^ク懼^ル
ま^シこ^トは未^ダ曾^ツ見^ルこ^トあ^ラま^シ戦の後基督徒の^シ
今^レれと故^キ獅子の口^ヲ出^シ我^ヲ助^テ亞波倫^ヲ勝^セ者^ノ謝^ス
奉^ラん^ト及^ビ讚^美の詩^ヲう^タひ^けり

鬼王謀害我靈魂

怒若火燃情可懼

辛蒙主宰聖靈助

一路我當依救主

狀似龍來啓禍門

矢如雨下命難存

力用天刀魔鬼奔

萬年頌讚主之恩

死蔭馬太四章
十六節、暗き
し、神の光明さ
けぬ、死の光
とつけて、死
人の居る、死
耶利米二章九
節

是時忽ち一ツの手ありて生命樹の葉と執り基督徒は近く伸さ
まゝを基督徒は之を取りて傷所敷其傷遂にいゑりて
爰に其處に坐りて前より得る處の酒と餅とを飲食し氣力強り
小増しこれバ復び前より行きたる然ども尙他の敵ありて又もや來り
近づくかと思ふもの、劍を執り恐懼し進まざるが此谷を過るの間
ハ幸ありて何者も出遇さず。扱此谷の外は又一ツの谷ありて
其名を死蔭谷といふ此處ハ天國への要路なれば是非も此路小
由ねにかゝぬあり谷を甚だ空寂して預言者耶利米の言れり
ごご、曠野深坑の所尤早く死蔭の地中行旅なく亦居人な
し。時は基督徒ハ此谷に差掛りし其情態と前に亞波論

小出遇たる時に較べれば尤も困憊を加へたり而して基督徒ハ
死蔭谷の思ひ至りし疾く奔くる二人の人に適して出
遇たり此人ハ迦南の地を傍設もの乃後裔なり基督徒之に詢さ
曰く「基子は何處に行かん」ともや。時又其人は急後退せし
呼ばりて曰く「汝も生命を要くを我らと共に返るべし」基
何故と二人然らば是れ此路のことなり我ら此路を前行し小幾の
へるこの出來るに最ふニ足三足進みたる今此處あり
爾に此情態と告ぐることは出來まざる者と基爾ハ何のよふなること
に出遇しや二人我儕ハモウ少のことで死蔭谷に入るべきと幸あり
て其危殆と細く見始め走り避るべきことを覺りたるなり

「基爾實何と見しや」云此谷の中ハ幽暗ありて深淵あり諸の
 鬼怪竊跽蛇龍あり又何やき聲ありて四方より起り時々は呼號
 その聲は酷利とてける者極めて慘き鎖鏈の中坐りて如
 上劣紛昏雲有て人の心と悴し又茫茫たる死蔭ありて其上
 と覆へり統て之を言は其谷ハ混々沌々極危ておろろ「基汝
 左様いふも天國の路が往きたれ一人して往て我儕ハ決
 ちのかり「云汝この路が往きたれ一人して往て我儕ハ決
 て往まきかり是はおいしく別まきしる基督徒ハ復前より行
 手は劍を執りて誠敵に出遇んおとと恐れたり我夢は此谷と
 見るに首より尾よりさす左は深淵あり替の相替と曆代

死蔭混沌約
百十章廿節

昔相替者馬
太十五章十四節

昔大辟詩本
九篇五節三出
タリ

より悉く此に陥りて慘まき没といふ事かや右は爛泥のり
 て極めて險く善と為きものふても若し其うち陥りし時を亦
 足を立べき地なり昔大闢王曾て此處に陥りたり若し全
 能者の手ともつて之と接ひば小非れは必き其中に溺死ま
 而して此處の徑は甚く狭く基督徒はみ於て益々困憊さ
 りかき情をいへせり如何にわれを谷の中ハ極めて幽暗され
 る左の深き溝と避けんとされば又右の爛泥に陥らん右の
 爛泥と避けんとされば又左の深溝に陥らん此のまきわれ
 或は歩む或は驚常哀嘆の聲と發しつ且徑も既ハ幽暗され
 る足をあらる度ごとく其踏處を知らず我まき此谷の半間と見る

小地獄の深坑が近く路旁より炎火と黒烟と怪愕を
 する聲の時あつて沖ちり出でり基督徒が其處小來りしと記
 自つ思ふより我今いふを極まや斯うりける事我が前より出
 あひ一處の亞波倫の比よりわらぬ神劍有とてども今其用なり
 とて乃ち其劍と藏め他の器即ち切禱とて用ひし時
 我その大いなる聲に禱を聞くと曰く吾の主願く我靈魂
 と救ひ玉へと而して基督徒も前行おと既久しく尚炎火あり
 て時は其まを拂ひ又悲哀聲ありて跣々奔騰れを基督徒は
 夫らの為に蹂躙て身も骨も粉砕よらんことを恐る此懼ろ
 しき情を見此懼ろしき聲を聞くは凡そ十里余の間ありて

比鬼馬太四章
 十節ノ意

其後小聞おのものの鬼の如きものが隊とらんて來りたることを
 基督徒は停歩獨思案とめぐるまを今より後へ返らん
 いや我此路と行くふ當つて危険に向ひて幸に脱ると得今
 この谷を過るもまを半途もなりたる可きは此うへ退後して引
 返さば其危険は前よりまを或ひ甚しうんと遂に
 意を決して前行しうは鬼も亦漸く之に近づき此時基督徒は
 聲を励し呼で曰く吾は上主宰神の力に依て行くに鬼此聲を
 聞く退縮し敢て稍之に近づけず

谷中雖見路全冥
 活路原從陰府過
 救主之徒必此經
 直行方得到天廷

耳詰事家
気家心往々此
病ヲ受レテ
カラス
初會ニ家ヲ出
シト交セリ

又一ツの事あれを我特に之と言まべ。扱ハ恨なる基督徒を
見る小此時心驚ひて憎し自くら其聲を辨まへりた如何とな
きは其適く火の焼たる坑に近づき頃一ツの悪鬼あやそ私と
其後ふつき神の言と重讀せんそ其耳よりたゞ語まされ其
語彼の心入り小彼誤つて己の心を發るものとされたり
此一事を以て前出遇しとて諸れ情小較ふれを基督徒
ハイヨ困愴と益たそ依て謂ふより主は前我深く愛
する所なる今を反つて褻讀たる乎ト頻り小之を免れた
思へも辨獨能く一が蓋此時基督徒の心が驚惜其耳
と掩ふこと知らむ此重讀の語何れを來りや知さるふり

是より感々として行なむが其後前又行もの有ると思
て聲の有と聞たり其言は「我を死蔭谷と行ども主が我と偕な
る小よりて反て究と畏まむト(詩篇廿三四)基督徒は之と聞て大
いふ喜んで謂ふ此谷も亦真の神と敬畏ものが有ると見
り(約百九章ノ十一)左まれも獨己の之に非むト又思ふより
前々行ものハ幽愁の中にあても真の神と之と偕み行く様
子なきは豈で彼の之と偕めて我之と偕なうらんや我
是處にあつて自其事小心つらざるもせし此人は追上は伴
なきと患ふるふたう以故基督徒ハ且行且之を呼ども但其人
ハ終小應ふることなけは以為この處ハ獨己あるの事なりト其中

中もなく天が曙しう、基督徒は大に喜んで曰く主は死陰を
 轉て晨の光となせりト（亞摩士五章八）天も既又明ぬま、基督
 徒は乃來路を廻視たり其意は旋返を祈らざるは非也、惟日の光
 小藉て夜の間は歴たること、諸の危殆と視んと欲せし
 かり是をおひて左の深溝右の爛泥一時ふたりにて現はせしるを且
 左の溝と右の泥との間は實小甚だ狭く又深淵や諸の鬼怪蛇
 龍等は此時遠く離たると見ゆり蓋天已に明たれば彼らは最
 早近づめざるなり然るに敢て近づらざるも猶あまきらの之を
 見るが如くなり聖書に云が如く暗間深奥の事主あはれり、小
 之と示し死陰の地主之を昭明にせト（約百紀十ニ世）基督徒ハ

寂くも此路と行た諸の危ふきを免ることを得て心甚だ感
 激せし蓋し此諸の危きまを先く甚だ之と懼しものも但日
 の光昭明之を示さふをて此時之を見ること益明かり且
 此時日出しは此則ち真神の恩なり。扱死陰の谷は前の半路
 も危険なれども後の半路の危険きまを益甚しく基督徒が
 立ちこらり谷の口外ふたて途ふ沿て羅網陷阱等諸て人
 を陥れるの機關あり故ふ今も此行路と前の如く黑暗と
 せしあむを、や千の命のあまはて必死亡びむるは居るが
 たりなり時日既又外りくは基督徒ハ乃ち曰く今主の燭我
 首上と燭し主の光と得て暗中を行べト（約百九章三）基督徒

此光中とゆき谷の口の外はゆるるを得たり。時我夢、此谷の
 出口は血や骨や焚のの骸や屍があるを見り之を皆前の日
 此路を行く者此所より害せらるるなり。時我夫、何故かやと
 考へ居し忍ち前より一ツの穴洞を見たり。昔二人の長あまて之を
 居し下りの名は該撒(昔羅馬國君号)下りの名は霸伯(羅馬
 教王号即天主教)とて此二人の勢と特て忍びぐさたことを行な
 ひ多くの聖徒を害ひ死せし此處ある血や骨や残の骸、則
 其害せらるる者なり。基督徒は此處を經るに甚だ危懼さ
 るゆへ我、頗る之と奇を居りしが後、方其故を知り
 如何とされば該撒もはや死て去りて年久く霸伯は尙存

撰者卓識
 止モ猶尚天主
 教ヲ敵視スル
 コトヲ免レサル
 口吻アリ惜哉

されし年まぐ小老且其少壯の時多くの苦戦と経れば今気が
 衰頽手足強呆行走小使あはば僅小洞の口は坐りて一たび天路入
 此のころを過ると見れば輒ち怒色や憤視立て之を提む能はざ
 るゆへ咬牙齧齒せり。時小基督徒は此老人を見り心おほひ
 驚惶蓋し此老人之を害かふこと能はざれども時々之を嚇して曰く若
 雨草と焚らざれば終に改めざらば。基督徒は黙然として答へて悠然と
 去り過ぎ卒に其害と被ひつゝをた。時欣然として吟りて曰く
 千奇万異我高呼 死陰谷中得活途 四面幽陰多惡鬼
 周圍地獄衆羅韋 愆尤羅網纏愚足 罪惡深坑陷弱軀
 今脱諸危當謝主 吾生端賴一耶蘇

盡忠致死
示二章十節
ニ出タリ

我逃命而奔
切不可延緩
云々其單身
勇往殊快人
意

基督徒の前に進まて小高處こたかふいりり此處このところの旅人たびが己おれの前路まへを望のぞむ事ことのなるところなれば基督徒きりすとも此處このところに登りて前まへの方ほうを眺ながむるに己おれの先まきに立て盡忠じんちゆうといふ者ものが直すまぐに進まむと見み大聲おほいに呼よびていり「基きはホウく待まちれよ吾われは汝なんぢと俱とも小ゆべし其そのた盡忠じんちゆうに廻顧くわんて彼かれと見みるはまじいなり」基き吾われが汝なんぢに近ちかづくまで待まちたまへく「免われ吾われは命いのちと逃のれて奔まるゝところなれば待まちておりが」基督徒きりすと之これを聞きて心こころ之これが危あやしき激げ励れき遂つひに力ちからを盡つくして奔まるゝは忽たちまち尽忠じんちゆうに追おひ且かつそれをも行ゆまがて後あとの者ものの先まきにたり(馬太十九章卅)此時このとき基督徒きりすとは自慢こゝろの氣味きみを微笑あはれと云いふ足元あしもとを慎つまざりりのは忽たちまち跌つつひく倒たれ盡じん

自慢こゝろの氣味きみを
微笑あはれと云いふ
足元あしもとを慎つま
ざりり

忠ちゆうが來きて助たすかるゝは獨ひとり起た得えずりり時とき吾われ夢ゆめに此この二人ふたりを見みる小甚こゝろ親か疎く路ぢとゆき旅たび中ちゆうに出遇であひ事ことを語りあひつゝの基督徒きりすとは尽忠じんちゆうに向むかふて「基き賢けん兄にいよ今いま吾われ心こころも汝なんぢと供ともあること甚こゝろ喜よろこぶ且かつ真神まことが汝なんぢと吾われの心こころと斯かくのぞく小陶成たうせい供とも此この福ふくの路ぢと同伴どうはんせることことのから實じつに喜よろこぶことこともや尽つく吾われ將亡城しやうじやうぢやうと出でる時とき愛兄あいにいと同道どうだういへ度たびおとひ小汝なんぢに先まきだちて出でるゆゆ奈何なにもまゝに依よりて吾われ只獨ただりて道みちを行ゆかり「基き吾われ將亡城しやうじやうぢやうと出でて後何程のちのつひに汝なんぢの處ところに留とどまりや尽つく吾われハ彼かれの處ところに久ひさし留とどまり蓋しかし汝なんぢが彼處あのところと奔ま出でてのう人の話はなし小此邑このむらハ天火てんかの為ために焚や毀やすべしと云いへり基き邑むらの人は誠まこと小其そのうに

いひ「の」然る人み此言を唱へたり「基若」左様よりあつ
て皆其危と避多く奔出べき何故あんぢのみ逃まじや「尽多くの
人」斯く口は言ふも諒深く信ぜま適あんぢと譏誚者の言
ことと聞ふ此路と九死一生の路とあせり。但わまは吾邑の天火
焚るること固く信ざるが故に則ち出奔しるあり「基吾
隣」の易遷の話を聞らるりや「尽聞」しある彼は憂鬱泥す
汝に従ふて行き其中に陥たりわの度ふ其時必泥の為
に偏身中と汚らるるべしなれども彼美等のこと人知らま
しと欲せまらう「基邑人」彼の帰ると見如何様と待や「尽
彼」が歸るのち誰彼の別ちを多く彼と藐視人の彼は貿易

もせぬやどく彼の城と出て復歸りし出ぬ方が余程愈りし
か「基邑人」素く此路と藐視のふ今易遷と此路と舎た
斯まで之を譏誚とは如何なる譯かや「尽人の言」は其言葉
と行の違ふこと反覆定なく甚く賤むるまきゆはなま
然るに吾考がへは彼が此正しき路と舎たる罰は真神の
斯仕向らまて其悪を報ひらまじならん（耶利米廿九の十九）
「基汝」がまむ村と出ぬま此人と談せや「尽わま」度途中
彼に出逢ふが彼は愧耻して身と隠したるゆ（其はつて未だ
言ひし事か）「基此人」既此道に従う後復び悪く帰
し「聖書」小犬の吐くところと轉食し豕既浴して復泥の中

に淳ま(彼得後書二章二十二節)「あるが如くわき初めに邑と出
 る時此人の善と為まことと冀ひしが今は彼が其城と供と亡び
 んて我恐るなり「尽我もまゝ恐るるなり但此ううふなりてか
 らい最早之が為小能く改易ものあるあむなり」
 基督徒いふら最ふ易遷の事と言ひ止めたり今うう汝と
 我のこと言へし思ふに汝途中におい出あひしと且つ珍ら
 したるべし汝我た免ふ也と速く盡忠答て曰我の前ふ汝
 の陥りし所の憂鬱泥を避れて窄門に往まに其間ふは
 別小難儀も遇ふるも只志人の淫婦といふ者に出合幾ど
 彼小害せまんと為たりま基汝が其網を脱れしこと実

幸なり約瑟が彼の淫婦の為に逼られ其網を脱れたるも
 幾ど其命を危くしたる(創世記卅九章)然れ彼汝何と為
 せや「尽微く此情を知つ者でかけさば想やまは出来難ん
 が彼の婦の甘言と言て我と強小ま免借は往て諸の樂とを
 為さんと言たり「基否々彼何れに真の樂と許まばまや
 「尽兄い固り我が言の意を知り玉らん彼の樂といふ肉慾
 の樂を指して言し事々の事なり「基汝が其淫嬖を離脱こ
 と得し多く真の神恩と蒙りあり聖書に曰く若も主は
 悪むところの者あれば必むその溝中に陥いんとあるが如く(箴言
 廿二章十四)「尽然れなぐら少も彼の悪は汚されぬは言難ん

意恐恐

目ヲ執ルモ地獄
陥勿

「基何しける。汝が彼の女の言ふ従ひに為まると思ふかり。固より
彼の言はは従ひに少くも彼の悪く汚されずは言ふ如何
とかれを其時我ハ聖書ハ淫婦の路ハ直ぐに地獄ニ通むる（約真
一章）とあると憶ひ目を閉て深く彼の貌に惑はされんと恐し一か
は是ハおしく彼我と訕り我ハ彼ハ遠くまで前ニ進みたり」基
汝来し復た他ハ出遇しとあるや。及我艱難山の下より来
り時一人の老人ハ出合が彼我に向て君ハ如何ある人し何處
ニ往んと思ふや。問へり我答て我ハ天路を行く者にて天國に
ゆつんとするものなり。ト老人の曰く我汝の貌を見るに必む誠
實なり。トと思ふれ我汝ハ傭資とゆへて汝我同所よと

らん。と願ふや。ト時我彼の宿所姓名を問ぬるに彼のいふ
我ハせい老亜當といふれ名ハ舊性と呼ぶ者あり。惜迷の郷ハ
住り我又問ふ君の言ふ仕事とは何なり。又如何ある傭資と我
ハ給むるや。といふ彼のいふ其仕事は諸の樂ありて傭資も
後其業と承べきなり。我も問ふ其家ハ如何ある家にて如何
多くの下僕と持つや。といふ彼答て世界の凡ての珍饈ものハ皆
其家の為ハ用らる。其下僕ハ皆己の生るところなり。といふ我
も彼に向て其子の幾人あるや。問へば彼のいふ三人の女あり
即ち世慾世貪世驕なり（約翰二書二章十六）若し彼が娶りた
く其願を許さへ。我も彼より其同處するの時ハ何れ

間あるや彼答て以生涯はいたるべし基汝此老人よおいて畢竟如何かせや尽我初に其言葉と聞て善もの如く思れし盗竊に之と與て往ん欲たまも後彼談ぶる不斗彼の額と見よる聖書にあるが如く人の舊人と其行ひひ於て之と脱棄下とあると見たる基夫ら如何に尽時我忽ち悟也彼老人の言葉も甚く我心に響ひる甘口なれども若も彼と共其家歸らば必我と賣り奴隷とならんと思ひ故彼の語を止めて最早言たまふを我の汝の門に近づく言切たまは是ふおのり老人の惡口と言だ我が行く路を妨たげ我と悪く苦める為小志人と送らんと言り故我自身と轉

旧言ヲ去世世世會ノ悲情ヲ解脱スル一内體ヲ裂カシカカキマ覺フ

て往んせ其時我の肉體も共老人の爲引返さるる如き心地して心苦しく覺へし大痛呼りて曰く困苦人よ羅馬七章廿四後山を上らんとて半分ほども行たる時回顧て後を見れば我を追て後より来るものあり其疾しく風の如く丁度山亭のある傍まで我に追付たり此話の時基督徒ハ突然曰く我が坐りて睡る其所なり其時我の懐中より巻物を脱失して心付さりて「尽マテ我が話を聴あるまで待たせ」諸彼人ハ我を追來り未だ一語も交へざるに遂に我を撃て地を仆り幾と死なん斗りたるしが稍甦へり後彼に向て何故我をうつやと問は彼のいふ汝ハ旧性よ秘く小從

秘カ從妙ナリ親歴スル有モ

ぐふ者なりとて復重祓て我胸と撃ち仰面ふ倒以前の如
 彼の足下ふ僵偃幾んど死せんをのりなりしが復び稍甦りた
 る心地を持ちしと大いと呼で憐憫を乞ふと彼の云ふ如何で
 恵と顕さるべきとて亦も我を撃倒たり若しも此時ふ於て
 救者が無りせば必ず撃死さるべしと幸よ人ありて彼の撃人
 と諭止たり「基其諭止人何人ぞ」と我は始め何人あると知らざり
 志が適々彼が過ると知ふ彼の手と脇に孔のあると見つけたり
 故に彼、我の主なるて決定なり。儲我、其後山に登りたり。基
 汝に追つき人、摩西あり彼、誰をも慰めえど若しも彼の法
 小背者、決て之を憫ますぬかり「兄の言もあとい誠

約翰十章廿四
ヨリニ六

かり我も此事と熟知れ我が彼ふ出逢しことを初にあらむ
 蓋我が安心して家居と知彼、我の處に來りて曰は汝が其
 處に止りて出でざるを後ふ、必む汝も室も悉く火とて
 焚滅さるべし此人を即ち摩西あり「基汝山脇ふおひ摩西
 小出あひしあれ、其山上に建たる一ツの家を見しや、見し且
 其家、往くもふニツの獅子あると見しけり來りて邪魔も
 為さざりしと思ふ小其時が丁度正午にかり、故に獅子、大方
 瞎り志あへん儲我、思ひの外に道ももろきり日が長きされハ門番
 の所ふし、のこあて直し山を下りしなり「基門番、汝の經
 過を見しとて我が為し言せしが但我、汝が彼の家に入らん

おとを願ひたる如何とされば汝の生涯忘る程の多く此珍奇異
 物を汝に示さるべかり。基督徒ハ盡忠ニ向ふて汝が居謙
 の谷と行時ハ如何ある人ニ出遇へば「尽名を難足と呼ぶ一人の者
 の私ニ同道してお返りやされと勸めて此谷ハ甚く卑賤谷なる
 と若も此處を行つを驕傲。自高世榮などとの他我が尊び親
 しくむくく逆ふるとよかるるなり然るも倘自ら屈んで此谷を踏
 んとせば彼人等ハ大ひに悦びませしむと云へば「基時小君ハ何と
 言て應へば「尽私答へば「は。や。る。や。ど。汝のいさ。驕傲。自高
 等の人々の前に我が骨肉の親なり。りとも我が天路を旅せ
 る。りハ彼我を認む我ハ彼と絶て親せねハ奚で彼らに

悦ぶ事と願はんや又言へば汝の此谷を卑賤といふは
 實ニ當りぬと云ふなり如何されば先ニ能く謙る者ハ後必も尊
 貴先小驕傲者ハ後必も傾覆ものなり夫故に我此谷を過ん
 と願ふて則ち智者が尚ふ所の尊貴を願ふものに「汝が云へ
 る虚栄を之と求めたくハ有らざるなりと答へせり「基此谷の中
 て爾ハ他は出あひし者ある乎「尽耻善といふ名の人ニ遇
 ぐ我が途中より出逢し者のうち此人こそを實ニ耻と知らぬ
 者あり我他の人と言ひし時道を以て拒けバ遂に言止なれ
 ばも唯その耻善をうりハ實ニ耻と知らぬ我聴ても居ぬ
 小彼ハ猶ベキヤクキヤと多言くして已む「基それハ何といひや

敬事半十餘句
哥林多前二章廿
六又三章十八約翰
七章四十八見
我輩最宜醒
三所ナリ片時ニ
目倦ニ體弱ナル
ベカラズ

及主宰と敬事ハ善くかひだの心と用て真神と奉ずるハ鄙むべき
事だのといひ。又心と小さくして悪を戒むる者ハ多くハ懦人の
みして絶えず英勇なく言や行と謹慎ニ毎も自ら拘守て自由
かぬ者ハ能く豪傑の所爲子効ふおとく返つて人々笑と
取る者あり且古より今まで世の中は能者富者智者やど
て此道は後ふ者甚と鮮く間々あるも其ハ輕々しく人の
言とを聽て自らく愚とあつ渺茫情と求め忍んで此世の物と
棄たり又歴代つて天路と行者多くハ庸賤の鄙陋やて致知
格物まなく其他迷つて難きやど澤山の事あり即ち人ガ
道と聽て或ハ自らく嘆き自ら悔れハ彼のいふ之ハ耻うけ

事かりと歸り後自らく惱み自らく恨めば彼ハ耻うけたと
云ひ。少く憐の人ハ罪と得たる事ありて自ら其失と認め
彼ハ耻うけと云ひ。私に不義ぬ財と得たる後其不義を知つて
之と返さんとまれば彼ハ耻うきといひ。も富で貴た者なりと
も若く此道に従ふぬ者なれば我ハ毎も疏んとして之と遠ざけ負く
且賤た者も若く此道に従ふ者なれば我ハ必之と敬む
之と友とまといへば彼のいふは之何と耻うく無らん乎といへり
「基君ハ何とつて答へや」答は我對する小言葉なく彼
ハ次第と通うけらと終に満面紅とそそ幾んど彼の口辨に
壓付らと一う後聖書の語と思ひ出せり。そそ人の高とむ

所のものハ神のまふ悪きものなり(路加十六十五)又思ふに耻善の
 目よこし世の人々意に循ふ者ありて真神の道にゆれば然し審判
 の日は生る者と死者とを判くハ人意は循ふるに必ず主
 乃智と主宰の律とに依ものかれハ假令舉世の非を受るも
 神の道に從ふべきこと思ひ且此路を行もの心と小くして悪と
 戒むるハ真神の特ニ義とせらる所又天國を求る者ハ外
 見よハ愚のさうでも其實ハ智あるなり又貧しくして耶穌と
 愛するト耶穌と愛せむハ巨富にあもトハ貧乏して耶穌に近
 づく方何程の富の譬る小物なりト思ひ乃ち曰く耻善ヨ急に退け
 汝ハ我ニ敵なし我ガ救はぬらうに我ニ邪魔するものなり我ハ

外教如愚

馬太四章十節
曰撒但退

主再臨黙示
二十章四五

魔皇耳語
惡心之目暮
其低声ヲ聞

いふや主は背きて爾の言を聴くべきや主の復び來りたまふ時我
 何の面目のつて主に見へん若しも其道を耻其民たると耻馬
 が其福と望まざるべき此耻善ハ實ニ耻と知らざる者なりト之と
 擴くまじも猶去らず時々相纏ふ其耳につきて低語くハ
 神の道に從がら多くの耻うた事あり後我ハ之につけて汝何程
 言葉と勞まざるも無益なりを汝の耻るところの者ハ我栄と
 かし所ありト是に於て耻善ハ去り我は進きたる
 蒙天寵召此群人 遭惑多端曰々新 種々邪情循血氣
 般々惡欲害心身 謀將肉體為魔僕 卒使靈魂陷苦淪
 路上諸徒當儆醒 全披義甲作忠臣

其時基督徒曰く汝の彼の悪者と力制したるごとく實に吾を
 く又彼のしと耻知らばたゞそれハ實其如く彼ハ毎も我を纏ひ
 主と主の道と耻まをばは夫れ其彼の耻と知らぬと、明かなる今
 この耻善が有は我等力めて此者と制する苦の事蓋し主のい
 まに我と我ををと耻するものハ人の子も清き使とも不
 其父の光明ともつゝ來る時おは者と耻す一馬可八章三八「
 吾人の此世は居る勇往直前主の道不働くわハ主の望ま
 しくなるを今耻善のた先不阻けりもを當り主の相
 我らが彼を制し得るよりに願ふべきなり「基然居謙谷
 少く其他ハ何小出遇ま「や「尽餘ハ何小も遇ま「や

幸小一路日の光有り「に「難か「此谷ハ通り越「が又死陰
 谷といふを行遇たる「基それ「誠小結構か「我遇「と大
 違ひなり「蓋「我居謙谷入り「時「亞波淪「とる名の悪魔
 小出あひ彼と戦「が實小危懼「とく彼「大カ「我を壓
 幾んど我身と壓碎をりぬるに我ハ手ヲ持つ「とるの劍と
 脱失せ「かを彼ハ大聲「て必む我命と斃さんといひ我も
 此時死ぬる「思ひた「が惟真神に願ふ「此危難と救
 たり後死陰谷小入り「に路「悉く幽暗「て死なんとせ
 こ「數々かり「「幸小谷の半「と天「が曙たれ「夫「り日の光
 して稍安「りた「時「我夢「基督徒と盡忠の兩人「が前「進

んで行と見るに盡忠ハ偶々傍と顧り之唇徒といふ名の者が稍
 隔てて歩と見かけ蓋し是處ハ地廣ハ衆の人ガ並び進
 むを得るなり儲彼の唇徒ハものハ身丈高くして遠觀
 に其貌ガ羨しけれども近らて之を視ると其美しきこと
 時小盡忠ハ彼唇徒に問て曰く先生ハ今何處へ往んとするや
 天國へ往んとするか唇然と固より彼處へ往んとするなり
 夫ハ誠ニ善しきこと然らば我も共ニ伴おはん唇子と尚伴
 ハ我願ふ所なりト然らば互ハの益ハなることハ行かざら論
 ふく此日を送る小若く唇若し善事なら誰とでも之と論
 ること固く吾樂しむるわれ今君小遇せしむる我甚

喜なりと思ふなりか且ても善事といふ人多くハ間務談と好む
 我之を見て憂と免さず尽それ誠とありむまことなり
 蓋し善事ハ人の言べき苦むく其中真神の道を談すに越もの
 唇子のいふことハ至極結構我甚た子を悦ぶなり夫真神の
 道之と談するハ大ニ益あることあり人の心を悦ませ且心を悦ませ
 事ハ來歴理の奥妙或ハ奇事神蹟異兆等何れも
 人ハ之をいふと樂しむ聖書ありて悉く載られたり其文詞の
 結構なる更ニ何の書も之に比ぶべきものなり「尽實ハ左様す我
 ら事と論するハ益と得んことあり唇我ハ所も其通ハ蓋し
 此事と談まれ甚だ裨益なり其大略ハ必ず能く見聞と廣く

今世復生約
翰傳十二章十
七節復生論
約書中校筆
暇アラス

世界の繁華天國の利益を知ると得べく若し逐一之と言ふ人の
更生するも一人己の功を恃むの義とせしむす必基督の功に頼
る者ハ義とせしむるも知れ罪と悔主と信し慶難祈禱ヲ知
るべく又聖書ヲ載るとその諸の福と許す詞ハ人々之を常の
談とせば能く之を知り得心と安慰且異端を闘き真道を明
かす無知なる者に教ゆると得べし尽汝のいさむるも皆一
れ我心の甚く喜ぶあり一唇哀しむるに人々多く真の道を談
さるゆへ小基督を信ぎべきと知らぬ且心ハ聖靈の感化を被
ふるを永生を得ることを知らぬ故に己の功を恃とせり然ま
ども己の功を恃者ハ終つて天國に入りがごとく一唇思ふる人ハ

雅各一章十七
節

此情と知るのハ全く真神の賜なり若し左もなき時ハ何ほど
勤學討論と為すとも之を悟るといなるま一唇子のいさむる
我ハ知れ我ハ知れ如何とわれハ聖書曰く天授に
しる小非われハ人受る所なり又曰く此皆恩賜人の功小く非
也ト聖書小多く之を載たれ我ハ悉れを引べし今君と
我ハ互の論ハ何事一つひて談して如何一唇君のお心ま
のせなり天のこゝとよふお地のこゝれいさむるか或ハ律法福音
聖事俗情往古來今異邦本國或ハ本或ハ末皆之と言ふべ
し只要するところハ益を求むべきなるト時ハ盡忠ハ右の言を
と聞く之と奇かりし一乃ち趨て基督徒の處ら近づきたり

天路聖程

聖道ヲ詞場
ナス學者ノ通
患ナリ

も真神と敬事うやまつありて唯ただ口舌くちしにて敬事うやまつ（馬太廿三章三節）
聖道と詞場ことばとやうたを「若も其その如ごとくは我われの大おほい此
人ひとつひて目利めき違ちがひをなせり「基もと君きみ果たまく誤あやりたり彼のかのあて
行いむとい語ことばと能よく思おもひたまふ夫それ神かみの國くにハ言ことハあはれ
能よくあり（哥林多前四章廿）此人能よく口くちハ祈いのち禱とら罪つみと悔あが主しゅと信まん
更生よみが等らのことといへども實じつハ口くちハ祈いのち禱とら罪つみと悔あが主しゅと信まん
細こまく其その有あり様さまと見みれば我われが言ことばハ違ちがひ違ちがひなるなり如何いかにとわれを
祈いのち禱とら悔あが罪つみ真ま神かみと敬うやまつ等らのこゝ悉しつく之これを丁とう度ど屈くつ白はくれ味あじ
かまご如ごとく斯この人ひとの真ま神かみ小こ事ことへるこゝは實じつハ禽とり獸けものも及およ
さるなり彼かれハ聖せい道だうと汚けが辱らて其その隣となり里り小こ此この道みちを誅とらら

馬太廿三章十五
外羊内狼ナリ

せたり（羅馬二章廿五）凡みなて之これを識してあるものハ皆みなハ彼かれハ外うへ面めんハ聖せい
徒たども内うち實じつハ惡あく魔まなり此この事ことハ其その家いえ人ひとも熟じやく知ちとるなり且かつ
まゝ刻き薄はく傭やう人にんと何なにらひ常じょうハ非ひ理りとを以もて之これに任まかせ向むかへ故ゆゑ
もかたふ怒いり罵ののり傭やう人にんと使つか役やくとせり又また之これと貿まう易いするもの
ハ皆みな斯このとり此人この人ひとと貿まう易いせんりハ道みちを信まかせぬ者ものと商しやう賣ばい
る方かたが遙とほくふ増あなり蓋しかし之これを唇くちべ徒たと較くらべ其その事ことを為なすや
遙とほく乘のりて忽たちち人ひとと愚おろしかせり又また之これに養やし子こありて
能よく其その行いふ效きやくハ直ちやく良りやう者ものハあへば其その愚おろし者ものありと責せめたり我われ
度あやふ此人この人ひとの惡あく言ことば惡あく行いハ多おほくの人ひとと罪つみと陷おちしるれハ若も

天各各二星

も真神が之を防閑なれば後必む人と害する事益々衆
もん「兄の言ふ事我が固きを信むべき事なり如何に
とかれバ兄の素言を能く彼に識てあり且汝は基督の属の人
なれば必む妄人を罪せし度や彼に其おとあるならん
「基我も若し君の如くに唇徒の如くと識らざりしや亦同
しく彼の目利違ひと為まべし而して又聖道に背く者彼の
ことと斯の如くに言はざらん我も亦之を疑ふ誹謗もの
と為まらん如何とかれバ義人の言行は毎も悪人の謗る事
ろとある故なり然し今我は此の事の事皆我親しく知らる
みて且善人が皆此人と耻し之と友たる事と屑し」と

馬大士章苗
口耳學者世三

せむ若し唇徒の名といふ者われは之が為し報顔とせむは
この事なり「兄の言ふ事我が固きを信むべき事なり如何に
今正に辨別すべき事なり「基言と行との實は二ツの事なり言
て行はぬ時其言は死せり了度身なりて魂かけば其身
死する事同し夫真神不敬事なるは實行と以て貴しとせ
る聖書に曰く孤寡と患難の間不眷顧せし處て自守し
玷なきは是誠也父即ち真神の前に織垢なき事なり「雅
各一章廿七」此の唇徒の知らぬ所ありて彼は聖道と識
耳不聞ひく口はまへしは則ち基督の善徒ありし意はとも
此み自ら欺かり夫れ人の道と聞くは猶種と播が如き

のこかれを唯口ともつて道と傳へば之誠其心行又道葉
 と結びたる證據と顯まらざるに足らざるなり審判日小遣らむ各の
 行よりて定めらるん是日小は聖道を知り聖道と言ひや
 して我に問ふ事必ず聖道と信ト之又遵行しやと我に問ひ
 之よりて我と定むべし。夫世の末ハ之と收獲時又譬へらむた
 る人の收獲時又おいて貴ふ所の者ハ汝も知れる如く實の成る
 ことあり之によりて見まは昏徒の妄又聖徒なりといふとも
 亦曰ハ必ず主小棄てらるべし「凡兄の言ると聞て我ハ摩西の
 云ひて憶ひ出せり（利未十一章）獸の潔き者ハ跛蹄ありて反
 嚼するものなり跛蹄あるもろりでも反嚼するもろりでも片方

馬太十章五章

摩西申命十五

ふてハ惡し必ず跛蹄ありて反嚼するものなり猶兎ハ反嚼あれ
 ども跛蹄あれハ則ち潔といふを得ざるが如く昏徒も常に聖
 道と嚼といふも恒小惡し途と同行し其足分まされハ
 豈で潔といふを得んや基督のいもろ所ハ殆ど此の謂かり我
 試し小進んや之といえん小保羅も亦云るあり（哥林多前十
 三二三）唇徒の輩は金の鳴る鐘の響くが如く其言ハ聲あつて
 心なきの物小属すト蓋し其道と傳へて聲ハ天使の如くあり
 とも但篤く福音を信むることあり未だ真神の恩に沾はハ
 されを終り死物に属して神の小供と並び立こととえざる
 かなと「凡我始見ハ甚だ彼乃人を樂しむが今其甚だ

各天路

之と厭ふなり但し如何うも彼と遠離くべき也「基我此
 事と言ふより若しも真神の彼の心と感させぬかれ彼は
 必も汝を厭ふて去るべし」
 兄は我が如何小彼と處ふを
 思ふもや「基真神の事するの實徳も君先彼又此事と語
 るべし其の彼が汝の言と許さば又彼が心行家庭と
 細う小詢ぬべし」是又おいて盡忠を復たび唇徒の所不道づ
 たり。此時盡忠の唇徒に近づきて先生に今五機嫌あるやと
 唇徒は之を挨拶となりて「唇安し君は何故來るここの遅の
 里や今日も小は多く乃論が出來たらふもの小「左様か
 らを今も何う一仕事ついで談しとまらむを然し先

其事と我は擇ませたまふ夫真神の恩化人の心中は有るの
 無きもの何よりして知るや唇ア結構ある問様うか之下
 ちと皆實徳といふ物も吾も甚だ君と言ふとを樂むや夫
 真神の恩化人の心中はありあはれ必も能く聲々惡と疾
 むも其一かりとて再たび其二を語らんとき時盡忠ハ之と
 推して免て「尽まづ」此一事つひく明らふ小論をべし此事小
 つひく我は斯く謂んとき人々能く其罪と惡むより小なり
 是まの「真神の恩化」れる者あんと度ふ君のいふ
 言より我言葉れ方と當まりせん「唇汝の言に我が言は
 ニツよむい如何で同くわさるるはらんや「實も同くわさ

天路歷程

凡人の目に見
「暗人の」を
ハ明ナリ成ハサレ
ヘケンヤ

夫人ハ他人の故の爲にも能く大聲に惡を疾むものなれども
但能く己の罪を惡む人あり其心必き清潔して誠小惡乃
敵たるあり我曾て人々道と傳ふるの時と見るに大聲にて惡と
疾めども但其心行家庭にいたして尚其惡を包容たり昔
約瑟の主人の婦が其大聲にて疾呼ありまほ如何も貞潔者
のよりなれども但其意は之と亂を行まんせしなり(創世記卅
九章十七分)且人の大聲ふる惡を疾むまは丁度母親が其子
と叱るに同ト口より其惡と言ふも又之を吻之を抱くを爲せり
「啓汝ハ我ヲ失と求めんと欲まらや」非然我ハ特此道と正
さんと欲まら耳のこころありまは再び之をいひたまへ「啓人能く

深く福音の奧義と知るる真神の恩必ら其人の心
に留るべし「尽汝のいも」所いも當らるるあり如何よとな
まば未だ真神の恩化ふ沾ほまは福音の奧義人々
深く知るるを得るなり聖書曰く能く奧と探り理と識る
も愛かけまば則ち益なり(哥林多前十三章二)豈で真神の民
なることを得んや救主が嘗て其徒と道と論ぜし時之は語て曰く汝
若し之を知つて之を行ふまは福あり其時主は之を知れば則ち
福なりといまづ之を行へば則ち福なりといひ玉へり蓋し空知りて
實の行なき者あり聖書云へるが如く「僕主の意と知りぬが
ら之小遵えずと(路加十二章四十七)人々知るる天使の深たか

天路行程
天路行程

おとと雖もいまだ必き真神の民に属せんと為し一ごころ
 然るに汝が所^{ところ}の二つとも又當らざるなり夫空知^{そら}のものは
 虚誕^{うそ}矜誇^{こごり}者の樂^{たのしみ}とまる所ありて實行^{じやうぎん}ハ則ち真神の悦^{よろこ}ぶ所
 かり但し我言^{わがこと}ところも知恵^{ちゑ}なきものごとく善^{ぜん}と為しつゝは
 あらむ蓋し聖道^{せいだう}と知らざれば其心^{そのこころ}かたむくや悪^{あく}く而して之
 と知るに亦二致^{ふたぢ}あり一ハ思ひよめて徒知^{たごち}をいたし一ハ信
 と愛^{あい}とを以て其知^{そのち}と行^{おこな}ふあり信^{しん}と愛^{あい}とを以て其知^{そのち}と行
 なふに必らば能く一心^{いっしん}に真神の旨^{しよ}に遵^{したが}ふをかり夫虚
 誕者^{たんとしや}ハ皆徒知^{たごち}を以て足^{たれ}りとせられとも聖徒^{せいと}の輩^{たぐひ}ハ徒知^{たごち}と
 以て足^{たれ}りとせざるは非^{たが}む惟大辟^{たいへき}王^{わう}の云^いふ主知恵^{しゆちゑ}ともつゝ

我^{われ}賜^{たま}ふ我將^{われまさ}其法^{そのほう}を守^{まも}り心^{こころ}を専^{せん}らみて之^{これ}を行^{おこな}はん
 (詩^し二百十九篇^{にひやくじゅうきゅうへん}三十四^{さんじゅうよん}) 祈^{いの}りふ效^{かう}ふが唇^{くちびる}君^{きみ}ハ又^{また}吾^{わが}痲^ま所^{ところ}と求^{もと}
 免^{まな}んともるや若^{わか}し其^{その}うのこころを互^{たが}ひ論^{ろん}するとも益^{えき}あり
 「真神^{まごみ}の恩化^{おんくわ}の人の心^{こころ}は有^ある無^なくハ何^{なに}より知るべきの請^{こぼ}
 を復^{また}いひ玉^{たま}へ「唇^{くちびる}我^{われ}ハもつゝ汝^{なんぢ}の意^いハ必^{かな}らむ我^{われ}と合^あひ
 汝^{なんぢ}もいはずは我^{われ}ハもつゝ玉^{たま}へ「唇^{くちびる}君^{きみ}の自^{みづか}言^ごはすのす
 べ「心^{こころ}が真神^{まごみ}の恩化^{おんくわ}を得^えれば自^{みづか}己^{みづか}ハも能^よく之^{これ}と知^しり勞^{らう}觀^{くわん}
 あり亦^{また}知^しりざらばいふ譯^{わけ}で自^{みづか}己^{みづか}ハも能^よく知^しり蓋^{ふた}し心^{こころ}
 に恩化^{おんくわ}を得^えれば其人^{そのひと}かたむくや深く己^{みづか}の罪^{つみ}と知^しり其本性^{そのほんせい}悪^{あく}ま
 深^{ふか}し心^{こころ}主宰^{しゆざい}は遠^{とほ}きより身^みは天^{てん}の律^{りつ}と犯^かせることを知^しり此^{こゝ}

罪あれを終つひに沉淪しんりんベキこと以おぼ覺おぼへて自みづから悔く自みづから耻はべし且かつ心こころを
 恩おん化くわがゆれを亦また救すく主しゅと識しり救すく主しゅと信しんむる小ちひ非ひされば罪つみ
 が救すくされて永生えいせいを得えべううぐぐることを知しり乃すなはち心こころを信しんじて之これ
 小ちひ向むかふありてう饑渴きかくもの飲の食じと慕まふがごとく心こころをこふおひや安樂やすみと
 得え諸しよ聖せい潔けつのこを好このみ真ま神しんと知しるここ日ひ不ふ深あく真ま神しん小ちひ事じ
 ろろここ日ひ小ちひ謹じんししまんとと欲ほむる等らう此こ則すなはち心こころを恩おん化くわありて已おれ
 自みづから知しるところを然しかるまじきも或あるは旧惡きうあくがまじく萌もじ私わがの念ねんが
 偶々たまたま蔽おほふことをふをて心こころを恩おん化くわあれども時ときとては或あるは
 自みづから知しるがむるここのゆるかり扱ま旁わう觀くわんは如何いかありて知しやといへ
 む蓋はいし其人そのひとが誠まことに救すく主しゅと兼あ知しり其その行ことふ所ところとみまは皆みな聖せい

潔けつして其その言ことふ所ところは符あ合ひ即すなはち心こころを居かた家いえと治おさめせ小ちひ處ちよする
 皆みな聖せい潔けつなる之これを要まむる小ちひ其その心こころを察さされらば必かなず能よく己おれの惡あくと
 痛いた惡あく而して自みづから憂うれ悔くわい又また能よく一家いっかの惡あくと閑あた諸しよの善ぜんとしつつせ
 と助たすけ惟ただ信しん仰やうと愛あいを以もて聖せい道だう小ちひ遵すんひ守まもり偽いつはり善ぜん者しやの徒たごらに
 口くちを以もて語ごるが如ごとく非ひざるなり今いま我われハ略りやくきき此この恩おん化くわはつひて
 言ことはたれば若わかくも當あたらざる所ところありて汝なんぢ明あららず小ちひ辨べんべし左
 なく我われも汝なんぢも問とんとするなり唇くちべ我われハ汝なんぢと辨べんせせ汝なんぢ何なにを問と
 ここああんやん尽つ我われハ人ひとの心こころが右みぎに迷まるるおおかれれ乃すなはち心こころを
 ここの言ことを汝なんぢもて是この若わかくああるや汝なんぢの言ことを行おここす行ことは
 據たたたべべきとあるや又また汝なんぢ真ま神しん小ちひ事じなるる徒たごはは女にの本ほんにに

良心ハ人ヲ正テ
ク報顔ナラントル
云ハ問モテテ撤
ニヒカレテ故態ト
スル

まゐる。若し我小答へんとあらずも真神の前において汝の本心
をばり而して此善而は彼も善あるべし按ず汝の行
ふ所も他人の証據たる所と云ふか之なり之實は大悪なり唇徒
ハ此言を聞く時報顔となりし暫くして故の態となり答へ
ていふより唇汝の如く論を立れども我初めより其事を
意せず其うな問よりわれ我汝はあへま汝擅まらば
考問をかきとも我亦汝の考問を受ざるべし汝はま何故
此の如く問を我に為さや尽汝の好んで聖道と談ぢれども
此外は汝の長所あるを見む我曾て汝が真神小事を
聞ふ僅小口のことと以てして其い所を行ひし大に相違せり

豈因ニヤ信候モ
亦聖會中ニ入
ナラシメ因テ想
世上ノ聖會中モ
此類ノ人ナラズ
蓋シテテ誦諫ス
トモヤ

人のいふ處は汝の悪言と悪行は實に聖會を玷汚
人々を聖道と誹謗しめ又人を罪に陥れ幾く死亡んを
爾ハ真神小事をいへども醉酒貪心淫行呪詛謊等の諸
悪ハ毎も汝と同居せり斯の如くして諸の徒を辱しむるは度
諺に娼婦と辱しむるは同ト唇爾は軽くして他人の
と聴く妄し我を責たり度ふも爾は苛刻輩より世間も
爾の意に合ものなりん然らば爾と互ひ論むるも何の益あ
らんやとて遂に盡忠と辞して去れり其時基督徒ハ盡忠
近づきて「基彼の今此かかりし吾のまめり君のいひ
處のまめりて爾の忠言ハ彼の私慾と相ひ契せず彼ハ悔改

馬太四章十七節
悔改

たくと爲を更さら爾なんぢと交まじと絶たてしと樂たのしき彼かれ去さらば其その去さる
 小こまのせよ是これは彼かれの不幸ふしやうなり我われ等らの不幸ふしやうは若もし彼かれ
 が我われは遠とほざりぬれ我われ等ら必かならずに彼かれは遠とほざるべし如何いかんと
 せば彼かれ尙なほ悪あくと改あらむるこそありて我われは交まじわることをせば必かならず
 らば夫それが爲ために玷けが辱まじべけきなり保羅パウロも亦またとるあり此このの如ごとくもの
 爾なんぢ當あたふ之これと遠とほざりてト然あらざるも右みぎの如ごとく略ある彼かれと論ろんむ
 ること亦また善よききり後のちに或あるひ吾われが言ことを思おもひて自みづから悔改かへめ
 ともやあらんや然あらざるも我われ忠告ちゆうこくと爲なる彼の沉淪ちんりんに至いたる
 我が罪つみありきるなり基せい兄あにの斯かく忠告ちゆうこくされし甚すこぶ善よきこと
 かな然あらざる今いまの人の諂へつら諛いもの多おほく忠告ちゆうこくする者もの少すくなり故ゆに

提摩太前書 五章

人多おほくハ聖道せいだうにおり真物まものと悪あくむお如ごとく有あり様さまなれり蓋けし此これ
 等らの虚談者うそつきは徒むづらふ口くちと以もつて真神まがみの事ことへり而しからば聖徒せいとが之これを往ゆ
 來きするに實まことに人と疑うたへせりといふものなり彼かれの行なふ處ところは皆みな放肆ふしな
 して聖道せいだうと玷辱けが辱まじたれは虔誠者けんじやうは深ふかく之これを為なす憂うれいせし我われは人々ひと
 が斯かくの如ごとく輩たいの人ひとと待まちふことこの爾なんぢは效かたせんといふと欲ほむるなり此このの如ごとく
 して彼かれ尙なほ悔改かへめまば必かならずに聖會せいかいと視みる熱地あつちの如ごとく馬うまんぞ能よく
 久ひさしく立たち去さらざらんや詩曰しいう

唇徒始遇盡忠兄
 詔々能言陳世事
 心誠是否時查出

狀似佳禽振彩翎
 便々善說樂天情
 菓實有無且問明

此更生ハ復
活ノニ非テ
二入ルコナリ

忽見唇徒翻塞レ口

可知彼必未更生

基督徒。盡忠の兩人ハ前々進々路上下て遇々々々もと
語あひ旅の倦々ば慰め々々時々曠野小差々々路々々々々々
て行難きと覚へたり。此時盡忠ハ偶廻顧りて一人の來ると見
心小其誰人たると識り遂々基督徒と呼で々々々々此來る者
ハ誰々々基督徒ハ此と視て「基此人ハ傳道者々々吾の賢師な
り」亦吾為亦も賢師あり吾母窄門又往々々々示へたるハ即ち
此人なり。以時傳道者ハ來り近づて二徒小向ひ「傳雨と雨
と助る者と安を得ん」と願ふか々々基督徒ハ傳道小向つて「基
爾ハ々々來れ々々昔爾ハ吾と愛々々吾が救を得んと欲々々時

約翰傳士章
三十三節
トアリ

吾が為々勸勞一が今再び雨の面と見ると得ハ實喜む
一々小堪るなり。盡忠も亦傳道又むつて「尽雨ハ々々來り
一吾ハ困苦旅人あり何々を爾と同行去々と冀がふ「傳吾が友
一別の後今又々々安ん其あひ々如何あると云々々遇ひ々々
如何あると云々行ひ々や請ぐ吾ため々々之と云々々是々々々
二徒ハ路々々遇々所の諸情と一々速て々々諸の艱難と歴て此
處々々來り々々なり「傳汝の言々々々を聞て吾ハ甚々喜ぶ
かり夫ハ汝が艱難ハあひ々々を喜ぶ々々非々汝が能く諸艱々
制一と喜ぶなり汝今々々々思々々過失あり々々今尚此
道を歩行ハ實々吾心と喜ぶ々々めたり此事ハ但汝の益と受け

天路逐逐

一のこころを即ち吾も亦與れり如何とされば播者の吾なり
 獲者ハ汝あり其日々いりて播者と獲者と同く樂むん(約
 翰四章三十六)之と要する小惟爾曹の終りまで變ぬこと願ふ
 かり蓋善と行ふ中較されを期至りてかゝるす獲べ(加
 拉太六章九)茲に爾の前は榮冕あり此冕ハ永終壞まざるもの
 かり汝當先と争ふて行方にあの冕と得べ(哥林多前九
 章廿四以下)毎も此冕と求めんと欲する者が力めて奔り遠く
 行といへども忽ち或者之先だちて其冕と奪ふあり故に
 汝が持つ所の者ハ力て之を持ち汝の冕と人々奪ふる勿し
 (黙示録三章十)汝は惡魔の箭の射及ぶ處ふあり且惡と戦ふ

て未だ血と流すに至らざりし汝永生の國と汝の目前に置く
 べ無形の有様におゐる汝ハ信を以て之と形づくるべ。天上の物
 非されば一ツも汝の心に入らざるべ。當に心して諸の欲と謹慎べ
 蓋心と諸物比較するは詭譎更甚しく惡を極めて改免
 難けきを汝當志と立ること石乃堅きが如く汝の顔と天國
 向くべ蓋諸天地の權と操者常爾と助らん。時ハ基督
 徒ハ深く其言を謝し且己が未だ経ざる所の途をも其指示を
 んとすを求めり蓋傳道者ハ預め能く事を知吾輩將遇
 んとするの事何を以て能く制して之ハ勝や必相告むはかり
 時に尽忠も亦此の如くし傳道者ハ二徒は向て言様傳

黙示録二章十
節 尽忠致死
アリ

汝曹ハ福音ニおいて真言と聴て知るらん多ク艱難と歴て
方に天國入るしと得ると亦各邑小鍊鍊やり危難があつて
爾と俟たれバ爾ち今此路を行たて豈で久く遇所なりんや
是より前ニ爾があつ所の事略ニ証據たつること得べし茲ニ
幾時あつて遇所あらん爾此曠野とまわれしあつて
必も一ツの都ニ至るべし爾も是處においでし諸々の敵が四方ニ逼
り力を尽しし爾を害せんとして遇人時は爾二人の内必も能
身と殺しし道を証し果して忠と尽しし死するしと為し主必
も永生の冕を以て之ニ賜はん是處にあつて死するもの常と
異ひて慘痛特ニ甚ししといども其同伴ニ較ぶると更ニ福あ

傳道第一章
二節曰吾等事
ヲ觀ん空ニ空
ニ空ニ空ニ空
ニ空ニ空ニ空

ましくおも然のこころは最早天國ニ至りし復び前途に
おいて諸の難ニあつてあるべし汝が彼處ニ到らば必も吾言葉
の如くあるべし汝當ニ吾のひしと追憶果敢力行靈魂をもつ
て主に托まべし主ハ創えし汝を造り玉ひし者あつて真誠ニ偽
りかたれを必も常に爾を佑するなり
時ニ我夢ニ基督徒盡忠の二徒が曠野と出ると見ると忽ち前
一ツの都府ありて其名と虚華といひ内ニまた一ツの大いなる市あり
て其名と虚華市と名づけたり。備何故此市と虚華と名づけし
やといふ此都ハ諸て虚無にして此市ニあつて賣買する物悉々
虚華の物なれば夫故之を虚華市と名づけしなり而して

此市ハ近世ニ出来シ者ニハナク上古五千餘年の前よりあり
 たり。則ち基督徒盡忠の二善徒の如き天路人あつて天國
 往んとされバ撒但と其魔との仲間ガ天路人ハ必り此處
 由て過るものと見乃ち此處ニ市と設けて時々諸くの虚華と
 賣買して息をかり其賣所の賃ハ家藏田畑百工技藝各
 等事業尊貴爵祿品級勲名土地邦國私慾宴樂其他娼
 妓役者の如き各般の樂夫婦兒女主人僕婢人命人血身体
 靈魂金帛珠玉寶物として備らぬハナク其中まゝ變弄
 幻術欺勝負遊雜戲痴人假獸棍徒盜賊等何時でも見ら
 べく又偷竊凶殺奸淫背誓ふや此等の諸々の悪ハ人々其心ま

かせつみよとていへ。其大都府の中ハ多くの街衢あり
 即ち支那印度英吉利亞米利加佛蘭西荷蘭等の如き
 ありて各虚華の物と賣出まことなるが其うち其處々小おいて
 重々售しよものり支那や儒教を最かる者や歐羅巴の
 或る街衢少くハ羅馬教を最とまるが如し。但し天國は往んと
 欲する者ハ必之より過るなり若し天國ハ往んと欲する
 者ハ此道ニ由られ心を世の外に出るなり（哥林多前五章）
 夫王の王が其世小あり時將て其本國ニ歸らんと欲し亦此
 市小して過らきたる其日丁度市の日なり。一は市長
 撒但ハ主と邀へて其虚貨と賣んとして此處とまき

必^{かならず}此^{この}物^{もの}と尊^{たつと}び拜^{まが}り市長^{しちやう}となり玉^{たま}と^し且^{かつ}主^{しゆ}ハ極^{たつと}めて尊^{たつと}貴^{たつと}
たれバ何^{なに}が分^{わか}之^のと惑^{まど}ハまんとおまひ又^{また}之^のと携^{たづ}て一^{いつ}の街^{まち}ヲ行^ゆ万国^{ばんこく}
の榮^{さか}華^えと以^{もつ}て之^の示^{しめ}一^{いつ}主^{しゆ}の虚^{きよ}貨^かと買^かんふと欲^{ほつ}まれども主^{しゆ}
ハ絶^{たつと}て此^{この}と好^{この}心^{こころ}を^{もつ}此^{この}市^しと離^{はな}て去^さるふまを一^{いつ}厘^{りん}一^{いつ}毛^{もう}も之^のと買^かぶ
また(馬^ま太^た四^し章^{ちやう}八^{はち}路^ろ加^か四^し章^{ちやう}五^ご)由^{よし}て稽^かふるふ此^{この}市^しハ上^{じやう}古^こ一^{いつ}設置^{ていし}
らる代^{たひ}々^々何^{なに}の處^{ところ}に^ありて市^しハ極^{たつと}て大^{おほ}いなり時^{とき}々^々其^{その}時^{とき}徒^と盡^{じん}忠^{ちゆう}
の二^{ふた}徒^とハ此^{この}市^しハ往^ゆん^んと其^{その}中^{ちゆう}に^あり一^{いつ}小^{せう}疎^そ
動^{どう}たり何^{なに}と^あれ^れ天^{てん}路^ろを^ゆ行^く者^{もの}ハ其^{その}衣^いが市^し人^{にん}と異^{こと}あり
たま^{たま}ハ人^{ひと}々^々皆^{みな}之^のと目^めて異^{こと}一^{いつ}者^{もの}ハ之^のと見^みて痴^ち人^{にん}なりし
い^いひ或^{ある}者^{もの}ハ之^のと見^みて狂^{きやう}人^{にん}なりしといひ或^{ある}者^{もの}ハ之^のと見^みて異^{こと}撰^{せん}たり

いへり且^{かつ}又^{また}其^{その}言^{ごん}語^ごも異^{こと}なり^{なり}たれハ人^{ひと}々^々能^よく其^{その}話^わを聞^き分^わるものか
一^{いつ}如^い何^なと^あれ^れ二^{ふた}徒^との言^{ごん}語^ごハ皆^{みな}天^{てん}國^{こく}の音^{おん}なるに此^{この}市^しの^{ひと}人^{びと}皆^{みな}
此^{この}世^よの俗^{ぞく}人^{にん}な^らば夫^{それ}故^{ゆゑ}互^{たが}ひ^ひ相^あ視^みる^{なり}他^た國^{こく}の者^{もの}ハ如^{ごと}く(哥
林^こ多^た前^{ぜん}二^{ふた}章^{ちやう}七^{しち})衆^{しゆ}ハ又^{また}此^{この}二^{ふた}徒^とが彼^{かの}貨^かと輕^{かろ}視^{しん}する^{なり}と見^みて皆^{みな}大^{おほ}い
に之^のと不^ふ思^し議^ぎとせり其^{その}訳^{わけ}ハ右^{みぎ}の二^{ふた}徒^とハ其^{その}貨^かをもて樂^{たの}し^むとせむ或^{ある}
ひ^ひ之^のと呼^よび^よりて貨^かを^か買^かふ者^{もの}あ^らば二^{ふた}徒^とハ其^{その}手^てを^か耳^{みみ}と
掩^{おほ}へ呼^よんでい^いふ^{なり}「我^{われ}目^めと轉^まじて諸^{しよ}の虚^{きよ}貨^か物^{ぶつ}と視^みざる^{なり}と
と。時^{とき}としてハ又^{また}天^{てん}を仰^{あや}みて其^{その}心^{こころ}ハ天^{てん}國^{こく}と好^{この}め^ることと示^{しめ}たり
爰^{こゝ}に或^{ある}一^{いつ}人^{ひと}二^{ふた}徒^との有^あ様^{さま}と見^みて之^の戯^{たふ}して曰^{いは}く汝^{なんぢ}の買^かん^{なり}とす
る物^{もの}ハ如^{ごと}く何^{なに}なる物^{もの}ぞや二^{ふた}徒^とハ真^{まこと}顔^{かほ}を^かつて彼^{かの}に答^{こた}へる^{なり}と

天路各三程

「吾儕が買ふ所の者ハ真理なり」と之をいふとより益々衆人
ノ顔視せられ或者ハ譏誚或者ハ嘲弄ノ又或者ハ之と打殺せ
と呼ぶたり是を聞いて市人も漸く紛々騒ぎたり市も之が
為ニ罷しつば此事市長の聞達し遂ニ自來りて彼が
最も腹心ある者ノ命を吟味せし免乃ち二徒と詰て曰く
汝ハ何れより来り何處へ往ん」と且何故其異りたる
衣を服して此来りや二徒ハ之を答へて曰く我ハ此世と
過る者なり（希伯來十章十三）將ニ本の邑即ち天上の耶
路撒冷ニ往んと欲するものなり人ガ我ニ問て何と買ん
とと要するやといひしより我ハ真理を買んとするといひ

なり其外ハ何事とも未だ行はざる小邑人ノ賣買する者ハ
何故我と凌辱め我行路と阻げんとするや是をいひ吟味
する者心ヲ思ふより此二徒ハ心ヲ癡狂し或は此市と擾動
来りしかなと度り鞭と取て之と扑ち土を以て之と汚し之と籠
の中ニ囚て市人示したり二徒ハ籠の内ニありて人の戲辱を受
けて居たりしを市長ハ之をみて大ニ笑へり二徒ハ惟辛抱の
なくなく人ノ詬罵るれを之が為ニ祝し悪言を加へらるれば之
善言とあた人ノ害せられんとすれバ轉つて之を親切ニ言
ふ故小市人ハある一人二人の識者ハ二徒ノ斯のごとく人ノ凌辱
らるを見乃ち責て之と止し小市人ハ大ニ怒り轉つてやう

此人と語り二徒と同類なりといひ並み之を罪せんとせしむる彼
 の識者の曰く此二徒と觀し諒し理し順ふの平民にして其意人
 と害いど之と諸ての賣買する者より較べば諸ての賣買ま
 る者より籠の中囚へ重刑を加ふべきなりと是よりおひく
 給々と爭論互に闘ふ傷を致せし二徒もまた衆に曳き
 再び吟味されて其市人と擾動闘せしとより重て打た
 れ鐵の鏈をもつて其身に加へて之と曳周行て衆人より示し
 此者の同類となり且之と是と為さしめむ。
 時に基督徒盡忠の二徒は益々智慧をもつて自ら代守り人
 から凌辱をうくるといくども惟溫柔小忍耐で居たりしかば

此市におも或る人が之を見て感ト之と輔けんとして為したる衆
 は此小囚て益々怒り二徒と害死せしと決し遂に嚇ていひくは
 籠と鏈との刑あり尚不足なり汝を舉邑と擾動市人を愚
 惑たれば其罪死すべきなり獄におひく罪の擬と俟べしと
 て乃ち二徒と獄屋に下し桎をもつて其足と束ねたり二徒は
 牢の中にいつて前より傳道者といひてあつて思ひまもく信
 と堅くして強忍び互ひ相慰めしといへるなり我二人の内若
 し一人害を受るるといつても更なる福なりト各是願と有るつ真
 神は全能全智なりて萬物と主宰たしと知れば惟一心
 真神に依り安んじて主の命に聽せたり扱二徒は審と受へま

の期いそしうは法度ふおいて罪を定めらんと為り出でたり
 審司の名ハ悪善といへる人みく二徒と鞠の詞ハ大約左の如し。
 市中と擾開貿易の邪魔と為り邑人を唆て互に争え、
 せ又或者と誘惑て邪道に從ふる者斯の如き所業ハ實
 小王の法を犯すものなりト其時尽忠訴て曰く吾攻は所の
 ハ彼れ真神に敵する者なりて我等素より理を守れ、市を
 擾開といふが如た小至つて決して此情を視て我理は循ふ
 罪なきふら我を輔けんとする者あり我ハ惟人々が悪と去
 て善に從はん事を欲するの且汝が稱して王と為るハ此即ち
 撒但なり吾主の仇なり此王と此王の衆僕と我之を畏れ

ざるかりト時又審司衆は論して曰く此人の悪を知ものありを
 速やのに來つて國の為に証據せよト是におい三人出で証
 據を立て其人の名ハ嫉妬事鬼市營なり審司此三人
 問て曰く爾等此犯人と識りま彼の罪ハ如何にぞや嫉妬進
 と出て誓言を癸し其言を實して曰く我ハ久しく此人と識り
 其名ハ善とせしども實ハ此世の巨悪なり彼ハ君も民も
 國法も習俗も一切棄て顧り見ず惟力を盡して人と誘ハ君も
 なく長もあまの説に從がせ然るを反つて信じて要理を行ふ
 と稱へ我又親しく彼の言を聞は此虚華邑の俗習と真神の
 道と較ぶに大い小相反まれハ兩なり並立むと彼がゆる所と

もつと見まは明く小彼ハ吾儕が行ふ所の義事と以て皆忠
 といひ且吾儕の是の如く勿は皆主宰に逆するなり審司
 又彼の罪と証據たつ座を為め如何なる言あるや「我の
 くと言を用ひしは恐く諸君の体屈とあるべければ他人之
 と証據たつ後若しも彼と死に致まに足ざれば其時より我
 復言べきなりト是又おひく事鬼と召きて盡忠と指示し汝
 此犯人と視るる彼ハ如何なる悪ある乎時事鬼ハ誓書を
 發し其言と實とて曰く余ハ向此人と識らず且此人を識
 と肩よりせざるなり然るに數日前小彼と言ハトあるを
 乃ち彼ハ實小民と惑も先の徒ありと知むり如何とわれ

彼のいへるは吾儕が鬼神に事へ諸の佛は奉まは皆善
 かり且主の怒りを受へと彼ハ此言にわれは吾儕の佛事
 一鬼事なることハ皆益なきこと害あり且我の罪赦さるる
 終ハ必も沉淪といへる此即ち我証まるところなり時市
 と召て其知る所といひ其罪証據たせり依り市答の曰く審司
 列位と我ハ久しく此匹夫と見識たるが彼ハ實といひく程の
 妄言と咄いたり夫ハ何となれば常々我君別西ト悪魔の長
 と訛罵且吾君の貴妃朋友ハ淫樂驕奢貪華放蕩利慾其他
 諸老と諸尊長等も常小彼に賤しまれたり又いへる若しも
 衆として彼盡忠等の心と同くかゝるめは我輩ハ少も是邑

ありがごとく且彼擅まに爾ちと語りて天に逆の悪人なりと云
 又種々の悪名と爾と此邑の諸長に加へり速おられ審司ハ
 盡忠に向ふて曰く奸賊邪徒ヨ今茲に列せられる賢士が証據
 たつる所を聞しや「尽我衷情と許ふると容れたまへ審司叱つ
 ていひたるに「審下郎ヨ汝ハ今立どもあり殺すべき者にて再
 び生まべりし者も但衆に吾が柔のまを以て示さん
 とままば姑く汝がいふこと許さん」第一まづ嫉妬の証據立
 ぬ答へんに彼のいへる所斯の如くといへども但我のいへる所ハ國
 の法でも俗習でも何事でも皆真神の道に違ふれば即ち
 是の如くむと若し此言にこれに依り宜くかぬ所はば

何れぞ我と教たまへ我其悪と知らば之と改むる第一事鬼
 が証據たつる所は答ふべし我のいへる所ハ人の敬事へき者ハ惟真神
 しか又之事かは其論に依り従ふべし若しも人意の俗習に依りて
 真神の諭ふ遵ははせられ則ち徒らふ事なるとも何の益なく終る永
 生を得ざるあり第三事答の証據たつる事ハ我誠く斯くいへり此市
 の長とその諸の友達とハ當小地獄もあるべく此邑小居るべからむ我ハ
 此のむく直陳惟神の我を佑たまえんことを冀かりて今此時審司
 ハ此案を擬した免旁らに列せらるる處の郷乃老人等小向つて曰
 吾邑と擾る者ハ即ち此人なり皆の衆ハ既衆人の証據たりる
 所を聞け且其自ら訴へ語を聞かむ彼を生まと死まると爾ら

法老出埃及一章

尼布甲尼撒但以理書三章

獅穴但以理六章十三

の擬に任せん然る小但律の中載る所のことももつて爾に示すべし昔一法老の時曾て一ツの法と立たり夫ハ異教の人ヲ蕃滋て其國人ヲ勝んことを恐む凡そ異教中の男と生るものハ命トて之を河に棄させ「尼布甲尼撒」の時又一ツの法とたて凡そ王の像を拜せぬものハ即ち之を火爐に投入又「大流士」の時亦一ツの法を立王を拜するの外神でも人でも何よりす之を拜し求むる者あれを即ち諸と獅子の穴に投じられたり右に述る三ツの王ハ悉吾君の臣みして其遺せし法ハ我應ま之を遵ふべきなり今此奸徒が其法と干せし初より意あつて偶犯せしめありを實に固より之を犯したれば彼の罪ハ容れがく且又我教

の敵と知りて自ら其罪と認めてあるが故に彼を死刑に定むべきなり是れ即ち郷の老人達ハ退ひて是事を評議せり其人々此名ハ即ち誓者絶善怨恨嗜慾恣肆急悍驕傲怨妒説謊残忍惡光恒怨等あり各其意とのべたり「誓此人ハ實に異端なること我々明らり之を見しに絶此等の人ハ當て世外にありてべかり」怨恨彼の面目と見ても憎しきなり「嗜我ハ一向に此人と容れ」「恣彼を常に我道と非しむれば我も亦容れず」「急殺す」驕此等の下郎ハ實に人として厭惡せしむるなり「怨妒」下は此人と見れば我ハ直に恨めし思ふなり「説此人ハ棍徒なり」殘之と死をも彼の罪も尚あまりあり「惡速」之を滅すべし「恒世

聖間接徑到天
門筆力妙甚

畏の物ともつて我々あたふとも我々彼と和睦一がく速く
 彼と死に定むべし。諸の年寄達ハ此言と然りて乃ち出
 其死を定めり故に審司ハ令と下し曰く盡忠と曳死地に至
 りて惨れ辱しめの死を受しめ。是時衆ハ盡忠と曳出して
 法の如く行ひ始り之を鞭うち。継りハ手より亂打をせり。刀を乱
 割後石より之を撃ち剣より之を刺し。竟ハ盡忠と木の柱に
 縛りて火を以て之を焼て灰とせり。其時我夢に群衆の後
 車や馬がわたりて盡忠と僕と見し。其時我ハ身既ハ害せしめて
 遂に彼の車より昇り雲間の捷徑を直り。天門に到り音楽乃
 聲一路和地鳴り。基督徒ハ復び曳れ獄中に入り他日此

定擬とすちたす。但万物の主宰者ハ彼の力とありて
 基督徒の害を受る者と脱せしは是れは是れは基督徒は
 進む事と得きり

不須痛哭盡忠兄
 死既盡忠主賜榮
 謀害聖徒皆自害
 人雖殺爾爾猶生

我夢ハ基督徒の害と脱して復前を行とみる。伴もハ獨りの
 旅をと思ひの外一人ありて之と交り與り伴とならりて欲して互ひ
 結んで兄弟とかり。其譯ハ前ハ基督徒盡忠の二徒ハ虚華市
 して吾を行かひ却つて辱を受けたり。此ハ見て之ハ感遂
 羨り。其徒とあり者あり。由て其名と美徒と名づけり。此由て

徳カキテ

考ふる小人が果して能く身と殺して道と証據たる時、即ち能く
 他人と感激し、慰めで、聖徒とせしめて此天路を行もの也。時、美徒
 の基督徒ふ向つて曰ふ市間、尚多くの人を其時、至たれば必ぎ
 我、随うて来る者あんとし、行つて遠らるべし。前
 一人の利徒と名つくる人がゆくを見て、二徒へ之を問ひ、君、何方の人
 して何方に往んとするや。彼人の云ふ、我、巧言の郷より来り、將て天
 城に往んとする者ありとて、初め其名をいさざり、我、基督徒之を
 聞て大いに駭ひ、曰く、巧言郷に豈で善人のあるべき。利徒有る
 我も亦有ることと証むべし。基子の名は何と呼んで宜しきや。利
 と我、素より識らぬかりかれ。今汝、此道と往らるべし。

我、汝と與て行くと喜び、若し左なり、我、自身の行ね
 かくぬかり。基、我曾て此巧言郷の事と聞て居たり。人の言ふ
 此郷、甚だ富りといふ。利然、彼郷に固より甚だ富む。且、富者の
 中多く、我親属なり。基、爾の親類、何人あるや。何卒、兼たまはり
 たり。利、一郷の中大半、皆我が親類なり。其最も尊た者、巧言
 機變、附時、等ふして夫の巧言の先祖、即ち此郷の先祖より、又今
 色、而向、悉可。等、あや皆我が親類、且、郷中、教と傳ふる者
 両舌の師あり。彼、我母と兄弟なり。吾實、汝、小語るべし。我、今
 尊貴れども、吾が先祖、素招渡とて、活計とて、舟を倒し行
 めたま、已、東、向つ、舟、西、行、我の家財、多く、此業、

つて得し所あり「基子に妻ありや」利有り吾妻は甚だ賢く乃ち
 賢婦の女あり其母は伴儀といひ吾妻は幼くを其礼に習へ上り事
 へ下に接等その宜しと得る又我等真神の事をおこし
 て固より厳しく道と守る者といふ二ツの小なる殊あり一ツは順風順
 水に非ざれば我等舟を行む二ツは聖教金の履と履時ハ我等益々
 楽しんで之に従ひ且天氣が閑晴して世皆美聖徒と稱るが如き時ハ
 我等更々楽しんで之を行かり。基督徒此と聞て美徒又近づ
 けて曰く巧言郷に利徒ありと聞く度ふま必む此人をん若
 然らんよ彼の彼の處ふても最も狡猾なるの徒あり「美兄ハ蓋
 其名と問はざりや彼は羞て言はるるが是れか」基督徒ハ

「ま」利徒近づけ「基」汝の以所は據ればなれど庸碌の人ハ
 思はざれば若し我がいふごとく謬はば爾ハ誰であるり知て居るなり
 則ち爾ハ彼の巧言郷の利徒ととる人かあらずや「利」エ此ハ吾名
 あらず我を怨む者ありて遂に斯の如き名と我を號しなり我を
 之と受て如何ともあることなり「蓋」諸善小效ふの人ハ毎も悪人の
 為に誹らる者なれば惟忍んで之を受るのこ「基」故も知らば豈で人
 が此名と爾小加ふること何んや「利」決して無し但時の相場はあつて
 ひ我意も同く之と遷變りて利する所あるが故に人此名をむつて
 付たる也夫斯の如く利の我を就ハ實に我の福なり彼の悪心
 者ハ豈で此よりして妄に悪名を我に加ふ可らん「基」我兼てより

利徒といふ名を聞て居たりし夫、即ち君でありしこと我推
 量の如く謬るなり然るに君の行ふとあるが實小此名又稱す
 甚く恐るる處まこと我の思ふなり「利爾も亦斯思ふか。我
 も仕方なり若同行と許さるれば後必らば我の善伴なる
 ことと知るべし」基若我儕と同行せらるれば順風順水や
 亦當小前再行べしと此固より爾の意と合せ又聖教金の
 履を穿ても破衣を衣るも皆當之と從ふべく聖徒に至つて
 人々の之を稱羨するも窘逐むるも其等みかちるも當之
 と友たるべきなり「利爾志あるなれ我が自由小任をべし我今
 爾と偕へ行ん」基若も吾言に依らぬならん一歩も同行は断

かり「利我の旧道は益あつて害かけきを我に決して棄ちかり汝
 も我と偕小行され、我も汝も追つれぬらうか我喜ばり死
 友達の後を來るまじく我自身のとゆべきなり」
 時小我夢のうち小基督徒と羨徒の兩人の利徒又遠ざかりて
 前小ゆきつゝ面顧てあゝと見まを三人のも乃らりて利徒と云ふ
 之、近づくまじく挨拶と為し打連だちて進みし三人は固財嗜
 金珍物をいふ名の人より素くを利徒の識人なり如何と云れを
 皆子供の時小同し学校あり学びしゆえなり其先生は漁利や
 しひ教場北の方小あり貪心縣の好利郡めてそのうちの市場
 小設けられ其所あり門人たち小力取局騙献媚。謊言假聖徒

右の四人は深く彼の先生乃学筋を得亦各々自身に学校と建
 て先生となすものあり其時嗜金利徒を問ていふも前
 行人は誰人あるや此も基督徒と美徒が先りまう見へしゆ
 へかり「利前も行人も遠方の人あり之も亦己の意に天國
 へ行んとするものなり」嗜アなせし我等を俟合せ「齊に行
 ざるや彼も我等も皆天路と行者あるに」利固より俱に天路と
 行者かれども但前も行人は矯々孤介しつも己の意と執り他人
 と藐視り甚だしく信者ふても己の意に合ぬ時直に擯棄て
 去りたり「珍それ實に美つるものなり此等の人乃如きは
 聖書にいふ如く義は過る者ありて自と是として無暗に他人を

罪せるの徒なり然し汝の彼の意に如何なることが合きりか我
 為に語りたまへ「利彼の人の審は事々とも考へど何時でもかま
 へど輒に前を行んとする」と我の時の相場を見て動りんと彼を
 真神小事ふる為に何もかも棄てりて危と恐まねども我の
 力と竭して命を保ち業を保存せんとなり彼は人指摘されども
 意を固く變て我の聖道不従りし時の安んじ危まると審らり
 して動静とせり彼の謂に「聖教が破れ衣とまて人あり賤
 するの時でも之に従ふべし」と云ひ我も聖教に従ふ金の履を
 穿て起霽日遊ぶのと知且人あり美と稱らるの時之に役がせん
 と欲するあり「固君の意に固く是けきを必らぶ永く其意を守

此の引を
引かす固先生
説アヤマリ

るべきことあり全人己の所有と保たざりて自ら
失ふものハ吾之と不智といはん聖書も蛇の如く智くといふ
あゝまや(馬太十章十六)農夫が刈獲せんと欲するも地は必
天氣の晴とすべし彼蜂まらもつゝ歳の寒きと地は深く藏
まらざるを得ず樂むべきの時もやんで四方に飛出ると
知らあゝまや我等まらも彼不效ふべきなり夫天ハ雨天と
晴天あり彼の愚る連中も雨やうもかまらざる行ども我等が
行んと欲する時に必す天のまらと待べし真神小事(兼て
諸の物を保い我が欲する所なき蓋し真神が萬の物を以て人々
賜ひかれを如何で人々其物を保たざらざるの愚る答ゆべらんや

約百紀ヲ講解
セルモノナリ

道理を言ても之を棄べきの理なりむし亜伯拉罕と所羅門ハ
真神小事へて皆至つゝ富たりと約百のといふ善人も堆金
その多たし塵のごとくと約百廿章然れば則ち前を行く人
り果して君のいふ如くあらば大い約伯の云ふ所異なるなり
「珍吾儕の所見ハ皆同」この様思ふれを最早重ねての議論
小い及ぶまら「嗜此事」つひつゝ最ふ大丈夫なり我々の所見は是
とは聖書小照しても道理合せても間違なり人のも聖書を
信ぜむ理論も依らざるなり地は自由の道も安きを求むる方も
皆憤然して知れざるなり「利君たちの知る通る我輩が今此路と
行かれを何ぞ一ツの談とまらけり互論して如何假令二人の人あ

天路逐程
天路逐程

此論と讀むと
まは人ともれ
しきとてのや
めいも自身乃
行ふ所手
てい之とをこ
ふ者世の
まのいひ

てて教を傳ふるも商賣のこころをふまも尚活計の利ふかること
が前よりりて之が為は專ら真道を務むこと、丁度適當なる
事よりりまや「嗜君のいにも所の意は我と洞識り兄弟は事
小つひの我解明」と聞たまへ。今あらみふ教を傳ふる者付
ていせん一人の傳教師あり其人物は固く美はうたれも金と
得ること甚少なり。ま他の所少く教を傳ふる者を見れば金を
得ること甚だ多し。時々金を得んが為に聖書を探索ふと益々
勸め聖道をつたふるに益々勵む説教はまも上手に且ま
く己の所見を曲て諸徒の意に循るの類斯のおびりて行ふ
ものを忠誠の人といふなり如何にとわれを金を得ることの多

かゝんと欲するは何の不可あるあるべき其上金が目前にありて
強々求めむとも得らるると之を得たれをて何のともあり云
ふおと何んや夫故に得らるべきもの之を得る可ことなり此のお
とわれは彼は金を得るが為に道と學ぶて益々深く教を傳ふる
事益々勸め所謂徳日々進む。事日々成るものまも固く
真神の意にかかるとのなり。ま己の本心を曲て諸徒に循るこ
と、此己を捨て人に従ふ謙遜して人善誘ものありて傳教
の職にかゝるもれなり此小よつて觀るも教を傳ふるもの小の
月給を以て大易し、豈で之を貪るといふべき此のいりて行ふ者
は智慧と力をつくりて善事を行ふといふべきなり。若し商

賣人又付て之をいそ其人生計小利益のつぎる折柄聖教
あつひ公會に入らむ之より己が商賣の為筋より或ひ
貴客が買物ふ來り或ひ富家の妻を娶らるる等のふと知て
其様へ行なむ如何で善らざるこ阿ん乎如何とをれを真道
從ひ真神の敬事の誠善とされ何の為之を為か
以本心の聲を聞き及む且富る妻をめり貴客の多く
來る等此事は何も不可おにけむ且皆我真道に從う
に因て得る善利ありて妻も富客の貴く財は多く真道に從
ふて得る此四の善あれを此のおくして行ふ豈善くぞ
て益あらざらんや。嗜金と斯のこく速て利徒の意をひ

本心の声云カ妙甚

けを衆に深く其言と然とて謂ふ是くのまゝ行ふを誠
小善より益あり絶て議論まき瑕隙なく互ひ深意と語
りあひぬ

扱固財嗜金珍物利徒かゝり四人の者互ひ志を合せて何
も基督徒と羨徒の兩人を窮らせく前利徒が閉口させく
たる敵と打んもの看むを彼の兩人未遠くも行祿をオシ
ト呼のけたり。兩人を此聲を聞き暫らく足を止れ四人は之追
つらん。往あつ相談して固財の嗜金の言分を以て兩人に
まんまれば利徒の其事と不可し其譯の前兩人讀責
らまし。何となく兩人の山が荒きらふ覺へ又も御意に

觸んことを恐まかり然し意を固財ハ其うちも年老の人
なれハ此人ハ重いのがちも一番チカんと。時ハ四人ハ基督徒
美徒ハ近づきて挨拶と為しおたり。固財ハ嗜金の言と以て二
徒ハ速ハ何とぞ辨むべきや之を辨したるは其時基
督徒のいへるより斯うなる言葉何程沢山あらんも是等
のおくは聖道の初學者の能く辨むることなり聖書の言と
ころハ據る小人ハ餅と魚と食まんが為め基督と尋ぬるハ
固より不可。まて基督と假り真道を假りて己ハ利益を求む
るの道具とあすハ更ハ悪むべきことなり聖書ハ載る所と稽
ふる異族あり偽善あり魔徒あり丁度爾も同一蓋ハ異

聖書云々始輪
傳六章廿六節

哈抹示劍ハ創
世記二十四章
二十節

族の人とはむりハ抹示劍といふ者雅各の女ハ六畜を我物ハせ
んと思へり然るハ割禮を受ふあはれを此物手ハ入るがごと
乃ち其族人ハ向ひて我衆もハ彼割禮ハ效まらば雅各の家業と
六畜と悉我物とあるべしといへり夫彼が圖んとするものハ女子と
六畜ハ之を圖の仕方ハ真神の民ハ效ひて割禮を受たるなり。
まハ偽善者ハ善と假るの法利實人の如き者にて其意ハ汝
よハ何とぞかれを寡婦の家業を吞んとて長に祈禱と謀
の道具とせり但彼ハ其報ひて真神の重刑罰を免つるか
べのらむ。まハ魔徒ハ即ち主と賣の猶太が如きものあり其意
ハ汝とあはれ何とぞかれハ彼が救主ハ從ひたるハ特威中の銀

寡婦路加二十
章四十七節

猶太職案約翰
傳七章六節

天路歷程

と得んとてなり然るに此人終に敗亡て主宰に棄られたり聖
書に彼ハ沈淪の子たることあり如し我ハ思ふ人若し世利
の爲に真道に從ひてなれば亦たかく世の利に爲は真道と
棄るものなり誠し猶太の如きは利の爲に救主に從ひたるの
故に亦利のため救主を賣るなり今汝の如き所の如きは則ち
彼の異族偽善魔徒に效ふ者なり後報ハ亦たかく彼に如
くからべし是又おしよ四人の者ハ互ひ顔見あせして一言の答もな
折らる美徒も傍らる基督徒の言を助るを彼の四人の者ハま
ちく以て辭なく供に立て居れれば少くも歩を緩めて兩
人前を往くことを譲りたり其時基督徒を美徒といふより

我等ハ皆肉軀の人なり我ハ正言を彼等ハ受るをあくはす口を
緘て敢て對へ得ざれば若し真神の審判に遇ひ其嚴かりたる
烈火の如くわく此輩ハ將に如何かを言ふやとひつ二徒前へ進
一ツの平坦なる錦地に差かりし此處ハ安逸といふ所なり二徒が此
處と行あひむ甚だ樂し覺へり然れども惜まむ此處に格
別な大まきくねい未だ何れも行かぬうち最早思外に近づき
此處にまゝ一ツの小山ありて其名を財山といひ中に金礦あり故に此
所と過る者を毎も此山と奇りし思ひ遂に正路を舍て之を探ら
ん彼の礦は近辺に近づけむ其所乃土ハ下が虚廓であるゆ
に忽ち其中におちりて死するもあねば又此處に傷を受けて生

天路逐程

底馬提摩太
後書四章五節

涯全た、愈々ぬる者あり。其時我夢の中に見て居れば、此路より
離れて稍遠き所、底馬といへる人立派なる様體あり、礦の前
に立ち、毎も此處より天路を行人と招き、其處を視せしめたり。則ち
今二徒を見かけし、之を呼て曰く、「爾來たゞ、此ハ一事の
邊に爾まゝして觀たまへ」といふ。基我々ハ正路を捨て、其所より
往くべき程の如何あるに、其處よりありや。底馬此所よりハ一ツの金
礦ありて、其中に金と堀てある者あり。汝も此より來りて、少くも
汝の力を働かし、之のこゝつて巨富となさん。之を聞て、我徒ハ基
督徒に向ひ、「義何故往て觀ざるや。」基我ハ決して往し、兼て
聞及ぶ。彼の處に人の多く死する所なるより、且財寶を得んと

底馬、靈魂モ
永死せず、時々
信者ノ耳ニ就テ
耳語スルアリ

欲する者ハ毎も財寶の爲に、陥りしれり。其天路を行くことと
得ざるものか、遂に底馬が呼するより、其所ハ甚だ危険にて
多くの天路人を阻たぐるの地なり。汝も或は「底此處若くも、自謹慎
をばするの危うきこと有べきや」といへり。然れども、此時底馬の容
貌ハ少くも愧色あり。基督徒ハ美徒に向ひて、「基吾儕ハ一歩
小ても往て觀るべし。當に正路を直し、行べきなり。」美我ハ
且利徒が此處に來り、時彼が若く之を招き、なすを必ぶ。其の
に應じ、「基誠然らん如何とぞれを彼の志ハ本之に向ふゆへ
か、然れども果して彼所より、何れも但九死一生の危難なり。ト
話を折柄、底馬復び呼するより、爾のこゝハ何故來りて觀ざるや。

天路逐逐

列王下五章三
節其言要命
得願

基督徒直ち其言を存けて曰く底馬ヨ爾ハ今主の正道と
紊亂主と敵たりなり爾ハ先づ此世と戀ふて正道と舍たれ主の
司道者ヨ己に爾の罪を定めたり何ぞや我と誘ふて爾ハ效
もせんともさるや若しも少く正道を離るるは主ハ必ず聞
知て至の前より立のて我とて羞耻むべし我ハ是を懼からん
去るを欲するなり「底余ももも爾輩のこころたものなれば若
我ため小片時候たまひを我ももも同道いたすべし」基爾の名ハ
何とてや我先と呼びたるものハ爾の名ハ非ざりしが「然る我
名ハ即ち底馬といひて亞伯拉罕の後裔なり」基我ハ爾とて
識まり爾の祖ハ基哈洗爾の父も猶太爾ハ其跡と踐て行き我

猶太馬六章
十四節即同世章
三節

輩と誘惑たり是魔鬼の爲るこころ小效ふかり夫爾の父ハ主
にぞむき既身と掛て死なれば爾の罰も豈下之と異るらんや
我若し主の前小到らば必ま汝の所業を以て告げまかりと言ま
二徒ハ前より進みたり其後より利徒の輩財山に近づき頃下た
び底馬の招をひり遂に往て之を就け其後或者ハ金礦小陥て
死し或者ハ金礦に入て金を掘りて金礦の毒あさりて死する
等其委細ハ知らされども惟天路おいて復たび此四人を見りけ
ざり也。

利徒底馬志相同
此輩可憐貧世利

他一言金彼立從
却遺天業死途中

天路行程

所多馬事割
前記十九卷其

時に我夢のりち小基督徒と美徒の二徒が平坦ある路の外に至ると見まは路旁小一の古柱ありて其かち甚奇しければ二徒ハ之を見て大いに驚異尚も之をみる小婦人寢て塩柱と為りしが如し二徒ハ此柱の何物とて又何故この所にあるや一向に解せざれば暫し打眺て居たりしが其うち羨徒ハ柱の首小字のある處と見出たを然しなごの其文字ハ古くあり且己の学力ハ淺くして讀くべきを遂に基督徒と呼びて之を觀せ兄ハ能く解るや否やと問ふ之よりつて基督徒ハ仰ぬまみる小其字畫羅得の妻を憶ふ當といふ五字かれ之と美徒の為め小叙き初て知る此柱ハ羅得の妻が所多馬城を出る時貪りの心ろ消へやらび回

顧て見たる小より遂に寢て塩柱となりし者あると今二徒が此を見しハ實小奇とまべく懼べきあり此事又つひて二徒ハ互小論をもちめたり「基督兄ハ先底馬の招きを受けて今此物を見しハ實外事なりと思ふがかり底馬が財山をみよといひ時雨ハ其方往らんとせしが其時我もまた雨小同意して雨のおもふ如く為真神ハ必我を罰して此婦人のおの後の鑑とすわやと計られし美我先小妄想を懐きし今甚憂ひ悔たり然る小真神が羅得の妻に如く我を罰したまはざりしハ實不思議なることかり如何とわれを我と羅得の妻と較ぶる其罪も亦いて少も異ふことなり彼はた回顧たるのとわれども我ハ往ら

觀んとももへり然るを真神の我を寛めたまひ御恩ハ如何
 大いあるとかなるや我が妄想を起せしことハ永く愧べきことかり
 「基今我等が見ることふより能く思索して後の戒めを為す
 也。夫前の危きことを免るは後尚あやうた有りて遇げ
 まば固より慎まねばやぬ苦即ち羅得の妻の如く其邑を逃
 れ出ることをかりて邑人と與ふ亡びさりし事も後つひ天
 の為小滅せられて身を柱とかりしをみ「美然と此婦人
 誠ニ鑑とあきふ足る一ツハ我を警めて其惡を效ふこと勿一ツハ
 人に示して若し之を以て鑑とせされ必を殃とあひ哥喇。大
 單の亞比蘭。及び同ト罪の會長二百五十人が地裂のた免る陷

して以色列の鑑と為しが如きことらん(民數紀略十六章二十二
 今底馬と其同ト人ハ何故小是どころふ在りて財を得んと欲
 安立にありて懼る心なれや之吾解せざる所あり。夫の羅得の
 妻ハ聖書より所據彼の身いま正路をまても只其心貪
 りの念を生下回顧のこころ遂に寢て鹽柱とかり且此
 前鑑が底馬の處より目を舉れを見らる程の近きあるに胡不
 ち々妄又此の若き所あせや「基此まことに解りかまわと
 ぬれども但此のごとくたを觀ふつけても人が利を懐ふ心まで深け
 きを溺れて返ると忘るものあり人が官府にありて盜賊の刑罰
 さをを見る時盜見が人の物を取り法場にて賊の斬首ある

と見る時盗兒が私竊を行ふがごとく、聖書小所多馬の人の大悪を語り彼、真神の前、處て諸々の悪を行ひたると夫、真神の恩を受け、沃土に居り、埃田の樂乃如きあり、なから、惡を行ひ、ひよ、益々、真神の怒をむく、烈火の為、滅なされ、なり、若し、理申、あつ、論、む、も、前、刑、を、う、る、者、あり、と、裁、鑑、と、か、る、我、之、を、知、り、つ、尚、惡、を、行、ふ、後、の、刑、罰、に、必、ら、ん、更、に、甚、だ、し、き、こ、と、あ、る、べ、し、美、兄、の、い、ま、を、こ、し、誠、と、し、今、我、死、を、免、ぶ、る、を、得、て、後、乃、鑑、と、為、り、し、こ、し、實、申、神、の、大、恩、あり、此、事、一、つ、は、當、り、真、神、を、頌、美、べ、く、一、つ、は、當、り、真、神、を、畏、る、べ、く、又、此、羅、得、の、妻、の、こ、し、水、を、當、り、念、ふ、る、ま、た、し、か、り、と、

時、小、我、夢、小、基、督、徒、と、美、徒、の、二、徒、が、前、に、進、ん、で、一、つ、の、美、び、き、河、の、處、に、到、る、を、見、た、と、大、辟、王、は、此、河、を、名、づ、け、て、耶、和、華、の、川、と、い、ひ、約、翰、は、之、を、名、づ、け、て、生、命、水、の、河、と、名、づ、け、り、今、彼、等、の、天、路、が、丁、度、此、河、に、添、る、が、故、に、二、徒、は、此、處、に、至、る、時、行、こ、し、甚、だ、樂、し、其、川、の、水、を、飲、み、清、く、し、て、甘、く、人、の、氣、力、を、壯、ん、と、せ、る、ま、た、河、の、兩、旁、に、樹、を、植、り、て、其、色、は、青、く、多、く、の、葉、を、結、び、葉、は、藥、と、か、る、ゆ、へ、に、行、人、の、病、を、治、む、べ、く、ま、た、川、の、兩、旁、に、皆、草、原、に、し、て、中、に、八、種、々、乃、奇、花、あ、り、て、四、季、も、小、草、は、緑、花、は、開、き、る、時、小、二、徒、は、草、原、の、中、に、小、偃、卧、て、睡、り、し、此、處、に、安、く、卧、ら、ま、て、危、こ、し、か、け、る、に、二、徒、は、此、處、に、あ、つ、て、卧、たり、起、り、し、彼、の、葉、を、摘、り、て、食、ひ、復、す、の、水、を、

天路歷程

飲而して復睡るなど數昼夜の何ひも此のおくありき

路旁生命水清流

天路行人喜暫留

百菓奇花供悦樂

吾儕幸得此埔遊

二徒ハ今此處ハ至ると雖も尚も前ハ行べき路あれは乃ち復菓と食ひ水を飲て進たなり。其時我夢のらち見て居るを彼の二徒ハ前ハむつて未だ遠くも行ぬらち其路ハ次第ハ川をまかれ遠ざるるふも二徒ハ之を見て大いに憂悶をいふなり。然れども此時ハ未だ正路を離れハ非ざるごとく。扱川を離るの所ハ路ハ甚だ難波ふて殊ハ己の足ハ勞たれば二徒ハ之ヲ為し意を喪失して何卒一ツの平坦なる路を得たまものと思ひ進

むらち適く其まへに一ツの芝原ありて其名を旁徑といハ天路の左ハ傍ハ柵門ありて入るへたれを二徒此所より一時間基督徒ハ美徒ハ向ふく「基此芝原路ハ本路と同く並びたる様なればこの路より一進む若し若し其門に至りて窺ひ見まば旁徑ありて天路と同途ハ似たれば遂も美徒ハむらち此路ハ丁度我意ハかへて行き易けまば同行ヨ此路より一往ハ若し若し「美此路より往て路を失ハままどまや「基決ち雨試之を見まば前乃路と同ト向ハ何れもやと美徒ハ乃ち其言ハ從ハ基督徒の後ハつま柵門を入共是處を行まハ此徑ハ固より平坦にして行やまハ亦一人の自是といへる人前ハ立て進みしを二徒ハ

呼々けり問ていやう「徒此より往何れの所に至きや」自是
 此徑即ち天路に達くものなり其時基督徒ハ羨徒といふより
 「基我の前はいひ言ハ誠ニ是レ也なり哉」少くも謬らざるを
 知るべし是ハおおいに漸く進み自是ニ從ふに往く間もかく日
 落て黑暗となす前途が少くも見へざる故に前に立て進んだる自
 是ハ忽ち深坑のうちに陥りたり但し此坑を是所の主の
 設けおくれしもれあく右の自是の如き自衛ものと擲ふせんといふ
 時ハ彼の自是ある人ハ其中に陥りて身悉く粉碎たり「徒ハ
 其音を聞き大聲ニ呼んで何故や」と問ふも答ふる者ナシ
 惟長嘆息のこゑとまきのこゑなり「美此所ハいこのある所ぞ」基

督徒ハ黙然として何も答へず如何にわれば己が手引して此徑にい
 たり今その非を知りゆかり時ハ雷雨大に作り水も
 漸く高漲をけき美徒嘆息して曰るより哀しひうか斯々
 行おは誤りしこと「基此徑に從ひて斯の如きの事ハ出
 遇し誰も夫と知りざりた」羨我先々斯ること有んと慮ひ
 故少く其言をなせりやう若し君が我より長むるあはれに
 我を必らず詳し其非を言へまものを「基君怒ることわかれ
 爾を手引して此艱難の所ハ我心に甚く憂ふる所なり然れども
 固意はあまされ惟祈して我を恕せよ」羨兄心を寛やふ持たま
 へ我ハ雨と責むる也夫この苦は雨ハ怒り益を獲るこゝあらん雨之

と信ぎべし「基^{さい}幸^{さい}」兄^{あに}のおどき寛^{かん}宏^{こう}ある同行^{どうぎょう}者^{しや}を得^えし我^{わが}
 心の甚^{こころ}ぶ喜^{よろこ}慶^{げい}なり但^{たゞ}吾^{われ}儕^{せい}切^{せき}此^{この}所^{ところ}立^たてし急^{いそ}ぎ轉^ま回^わをなす
 然^{しか}るに美^み若^{わく}然^{ぜん}我^{われ}まことに先^まづ行^いく「基^{さい}不^ふ可^か我^{われ}當^{あた}る先^まづ
 行^い諸^{しよ}々の危^{あや}あつて逢^あはれし我^{われ}先^まづ之^{これ}を受^うべし如何^{いか}とわれ我^{われ}
 路^{みち}と失^うはれし我^{われ}等^らの罪^{つみ}ふれむなり「美^み今^{いま}雨^{あめ}の心^{こころ}憂^{うれ}たれは
 或^{ある}ひ重^{おも}ねし路^{みち}を失^うはれし計^{はかり}りし雨^{あめ}先^まづの心^{こころ}憂^{うれ}たれは其^{その}時^{とき}
 聲^{こゑ}ありて曰^いふ雨^{あめ}當^{あた}る轉^まじて往^{むか}ひ大路^{おほみち}にむくべし即^{すなは}ち雨^{あめ}前^{まへ}行^い
 乃^{すなは}ち路^{みち}なりし二^{ふた}徒^た此^{この}と聞^きて益^{ますます}轉^ま回^わせんと欲^{ほつ}されし此時^{このとき}水^{みづ}
 漲^{あつ}ち深^あく深^あく大^{おほ}い歸^{かへ}路^{みち}に險^{あや}み多^{おほ}し
 時^{とき}に我^{われ}夢^{ゆめ}にちち基^{さい}督^{とく}徒^たと美^み徒^たの正^{せい}途^とに出^いかぬ様^{よう}と見^み

心向大路耶利米
 三章廿五節

て自^{みづか}らもふし何^な故^{ゆゑ}正^{せい}途^とと離^{はな}れし易^{やす}く迷^まひの途^{みち}に出^い
 出^いるこゝハ斯^かく難^{がた}たや其^{その}時^{とき}二^{ふた}徒^たハ險^{あや}しきと冒^ありて返^{かへ}りしこと
 要^{もと}めんとす様^{よう}なれども但^{たゞ}その路^{みち}甚^ころ黒^{くろ}暗^{あん}く水^{みづ}まき高く
 漲^{あつ}ち之^{これ}のため溺^{おぼ}れて死^しせんとも数^{かず}次^じ力^{ちから}と盡^つく智^ち恵^ゑと
 つくまるとも此^{この}夜^よ尚^{なほ}柵^{さく}門^{もん}にまゐり至^{いた}るこゝかかす其^{その}後^{あと}一^{ひと}つの
 稍^{すこ}休^{やす}息^{やす}まへた場^ば所^{しよ}と見^みし暫^{しば}し此^{この}所^{ところ}に坐^まりて夜^よの明^あると
 待^{まち}いたるも兼^かての疲^{つか}倦^{けん}ふり忽^{たち}ち睡^ねむを催^{もよ}むたり扱^あつ
 この所^{ところ}より遠^{とほ}くをぬれ所^{ところ}に一^{ひと}つの寨^{さや}ありて其^{その}名^なを疑^ぎ寨^{さや}とい
 ひ其^{その}主^{しゆ}人^{にん}ハ絶^{ぜつ}望^{ぼう}といふ甚^ころ強^{きやう}兇^{けう}人^{にん}なり時^{とき}に二^{ふた}徒^たが睡^ねむなる所^{ところ}
 丁^{てい}度^ど彼^かの界^{かい}内^{ない}なりし此^{この}朝^{あさ}寨^{さや}の主^{しゆ}ハ早^{はや}起^おきて其^{その}境^{けい}内^{ない}を

絶望二字帖
 羅尼迦四章十
 三節又タ
 箴言九章廿
 五節

獄内暗且臭ナ
歴筆者親
歴スル所ノ情
憐ベシ

散歩して不圖二人己の境内に睡れりと見て大喝ふ之を呼
醒し何の所より來り又何ゆへ我領地に睡るやと問ふ「二徒我等
兵天路を行ものなもが路に踏はるる此處に至りしかり
「絶望汝ハ夜分我領分を侵し我の境内に睡し以ての外不
埒かりいざ我と共來るべし」といふ絶望の身の丈たかく力大か
とを二徒ハ如何とも為べきとて之を隨ひて往き自其
過ちと知しいへども亦何といへべきの言もなく絶望し追たくら
まて進みしやがやが疑塞の内より引れ獄のうち囚われり
獄の内暗く且臭くして甚だ二人の心を樂しめざり死
路澁斯徒痛足酸 旁行草徑樂身安

因而失路遭危苦

離正方知返正難

粵小禮拜三より六の日の日數あたまへて四日二徒ハ是處に囚われ
て一滴の飲べき水もなかり一粒の食ふべき食物もなかり日の光と見む一
人も來て安きを問ふものなかり其親戚故舊ハ皆遠くへたかり
ら二徒ハ情益々愴ましく此事のおありハ皆基督徒の過
ちより出てもつゝ基督徒ハ羨徒よりも一倍まさりて憂苦たり
扱て絶望し二人の弗信と名ぶ妻ありし日の暮るる絶
望の妻もむらひて二人の者ハ我の境を侵したるゆへ我のあれと獄
囚へおぼるるが今何ともつゝ之と處べきやといふ其妻ハあへて其
者ハ何人かてまゝ何より何へ往く者や絶望の悉くその情とつけ

志るを其妻まゝいふより明日の早起して重く彼と打決して憐
憫たまふ事いふ之より絶望の平坦おきるや否や獄より
て二徒を鞭し狗の如く二人の忍であれと受黙つて語ね
やも彼らも重打を身へ地へ伏て動きえぬ其後絶
望の其所を去り二徒の獄中よりありて其苦惨を悲し惟嘆
息と哀慟をもつて其日とわづらぬ然るに其夜彼の妻なる弗信
無二徒乃いままゝ死なざること知りて其夫曰く汝彼等
自殺を命ぢなす故に絶望の夜明に復び二徒の處に近づき
怒まる色も昨日鞭たる傷所の痛しげなるを見やりて遂に
之を謂るより雨の氷く此を出ることかか入まらぬ刀あるは

約百七章十五節
曰願棄此軀而
就死地已無樂生
之心不作永存之
想畢生遭難母

繩を以ひまゝハ毒と服して急は自殺まべり又いも汝斯く苦
惨ふあひながる何ゆへ生て死せざるを欲するがごとくかや時小二徒
ハ釈放なすへて求めし彼ハすあく怒りて其前小突逼て斃
んとせり此時若しも彼に急病が起りて四肢がつかぬ非ん
む必らぎ為り斃さるべきなり如何にとぞれハ絶望ハ天晴日
朗は何へハ昏痼疾をもてばかり故に此時二徒を離して去り
兩人各自度て従ふことと決めさせしは是れおひく二徒を絶
望おひくる處の事を互ひに語りあひぬ「基我儕ハ如何なる
まや今斯のどく地の惨苦ぞれハ生るがもうり死するがもうりか知
るべしぞ且我が此の獄にあるは墓よりるるも惨しけれハイツ

死して絶望の言ふ従ふがまゝせん「美今の苦しみ情は誠は畏
るべく我も若く永く此のおくなくを生てあるよりも死する方
がまゝならん然れども今我く天國に往んとするものなり
天國の主がいへる言ふ小人と殺すことなりをきと人でも殺し
て悪きなり況てや人の言を聴て自殺ものなり且人を殺すハ
其身と殺すまゝでふして其靈魂を殺すこと能そねども自殺
のてたれ其身と殺し並びに靈魂をも殺すなり兄の言ふ獄
のる墓もも惨しひと云ふなれども能く思ひたまへ死するの
後亦かろく地獄あり此所ハ即ち人と殺す者のいへる處蓋
し聖書云曰く人と殺す者ハかまゝなりあま永生を得むト絶

望の力大いかりとも必も全たき權なり彼小捉まらるるも度
ふく亦彼の手と脱るるありあるべし且眞神ハ能くせざることな
かれバ或ハ將此絶望を滅びたまふべし且まゝ此獄門時とて
ハ守りをうへ或ひいま彼絶望我が前とあつて疾復び
おあり四肢の力をいざると何れやも計ごとく若く果して斯のじと
まふあはれ我ら力とつとて彼の手を脱し得るや否やと試
んと欲するあり前ハ彼が病のむこりし時我これを行為はさり
し誠は不知ありしことあり但し如何様のこと何れも自
殺するること甚だありやうも當り自く強く忍ぶべきあり
一時の苦しみを忍へば或ひハ脱るるの時もやあらん美徒ハ

六の言をのべし稍基督徒の心を安んじたり故小此日二徒ハ暗
 乃中毎有りて其情ハ實ニ憐むべく哀むる也
 諸も基督徒ト美徒ハ兩人ハ獄ニはなせられた寂々日も既に
 暮んとする折なり絶望復び獄中ニ入里來りて二徒ハ己の言
 葉ヲ從ひしヤ否ヤと見んとおもへ里其時二徒ハ尚活ねれども
 久しく飲食せぬるハ鞭撻身ハ重傷をうけたれば只一線の
 呼吸と存するのハ然る小絶望ハ其死せざるを見て大いに怒り
 二徒ハ其言に從がざるを責め必らず重た苦しみを加へて其
 生るも死に如きなりとめんと語り二徒ハ此言と聞て戦慄基督
 徒ハ暫く昏失がて人おもも有ざりしが頃くあつて魁り絶

望のいひしことを以て復び羨徒と相談しき決りかねたり
 一が其うち基督徒ハ絶望の言ハ從がんとする様子多れを羨
 徒ハ基督徒にむかひ羨兄ハ日おろ甚が大膽なり今何ゆへ其
 事と忘しや彼の亞波淪さへも雨と戦て勝てかば亦死の
 陰谷小おいらも雨が見るといふ聞とあは乃諸の危く懼し
 二やが雨を屈撓しき兄ハ皆おまを味をひし何故今
 ハその様ニ臆病なるヤ我ハ素より雨より弱き小今雨と我
 此獄中にとりて絶望の爲ニ傷められ飲食も絶え暗中に
 哀哭しつゝ雨と少しも異なるや然も我ハ強ク忍んじ
 待べしとおもへり且兄虛華市ゆへ甚だ剛勇鐮の鍵も囚

籠いれ籠かごき刑罰けいばつ不及おおよばずぶとも懼おそまきり〜に何なにもや今いま我等われらハ力ちから残あり
 尽つく〜強つよくたへ忍しのんで時節ときせふを待まち可べきなり此かく〜て縱たへ脱のがる〜能あたらば
 亦また自みづから自殺じこくして聖徒せいとの名なを辱おとしむべからむ是この夜よ絶望ぜつぼう
 の妻つまなる弗信ふしんハ復またび其夫そのおとこふむらひ二徒ふたりハ我等われらのいひ付つけし隨したがひ
 一いや否いなと問とふ「セツル彼の二徒ふたりハ甚おそろく強悍きやうはん者ものありもろ〜の苦くるしみを
 受うる〜い〜も絶たく自殺じこくま〜と甘あまま〜「妻つま明日あしたハ彼かれ等らと曳ひ
 び〜て仕置場しちじやうばに連つれ往ゆけ前まへに雨あめに殺ころされたる者ものの屍首しよくいをもつて
 彼等かれらをみせ近ちかまりち此者等このものらのぶ〜其身そのみを裂ひる〜トいひ
 たり〜因より絶望ぜつぼうハ朝あさ早く起おき復また二徒ふたりの處ところへ行いく〜曳ひき〜
 城しろの庭にわに連つれ往ゆき妻つまのいひ〜お〜〜と曰いふ〜雨あめハ見み

況いはや絶望ぜつぼうヲ乎
 疑う塞さいトイヒ絶
 望ぜつぼうトイヒ弗信
 トイフ事ことタ悟
 リ易やすシ〜トタ
 入いり返かへ正ただト知
 ラザレバ天路
 ノ望のぞハ絶望ぜつぼうト
 彼かれ、絶望ぜつぼうノ為
 ノニ橋はしニセラ
 レ裂ひ碎くだル、ナ
 リ絶望ぜつぼうト弗信
 ハ同おなじ一いつ体たいト
 リ此こノ一いつ段だん、
 脚色きゃくしやくハ其演戲
 場ばハ何なに、所ところニ
 在あルヤト問とハ
 ハ母はは由よしト云いハ
 ニテ即すなはチ他人
 ノヲニ非あらズ我
 ガ方寸かたうんノ間まニ
 於おテ信しんト疑ぎト
 接つ戦せんスルヲ
 描え出だセリ事こと者

〜其身そのみハ我われガ心こころのまふ裂碎れつさいたり雨あめちもも〜未幾まもなく此様このように滅めつ不ふ
 たり是日このひ土曜どよう日にち二徒ふたりハ獄ごくみらりて悽慘せきさん故ゆゑのぶ〜其夜そのよ弗信ふしんハ其夫
 と談た〜二徒ふたりのこ〜及および〜を絶望ぜつぼうハ言い〜我われ捧た〜もつて之
 と鞭むちりち言ことばを以もつて之これに逼せまる〜と〜彼等かれらの終はつみ自殺じこくせざるハ
 實じつニ解げせざる事ことあり「妻つま其その〜に彼等かれらの死しせざるハ恐おそら〜ハ
 別べつの望のぞ〜ありて他人た〜來きりて救すくふ〜の或あるひハ自みづからに論ろんありて
 此こ〜以もつて逃のがれ出でん〜と冀ねがふ〜ん「絶ぜつ賢妻けんさいガ〜通とり必かなず
 夫等これらのこ〜あるべからば明朝あしたあけハ我われガ〜細こま〜彼等かれらの身みと探たり

天あま谷や三さん三さん
 百六十九
 百六十二

ノ用意想
又々小信
ノ戒ト云
ナリ候故
ナリ

疑團ノ釈キ難
キヲ如此シ教
重ノ門アリ又
其上ニ鍊門ア
リ

見んと語りりひぬ。扱此夜彼の二徒ハ真神ヲ祈禱夜の明ん
まゝ項までも祈禱やまがりし天明の頃に基督徒ハ忽ち夢の
えぐめて覚しが如き心地ゆゑ自ら悟て曰るより我既ニ能く自
由かる由斯る真き獄のらちり忍んで居ることの愚さ我懐
中ハ恩許の鑰を必む之にて此疑塞の門と開得べし美若
其様の事かれ之に越たる幸かといざ急ぎ取出して試みたま
是時基督徒ハ彼鑰と取いだして獄の門と開んとし一轉
ロシともや否や戸を忽ち開けしは二徒ハ此處を奔りし
中門より復此鑰をもつて開き後外ハ此の門也と
此門を全く脱出らるるやれども此門ハ鍊門ありて

數日舌マテ食
ハカテ推ス
ノ氣カトカ
ヘシニ徒ノ情
發カテハ神
威カテ下シ賜
ニアラサレバ
如此ナルハ
ハス只此ノ意
ハ信者ニアラ
サバ悟リ強
ハサル所ナリ

が然るに二徒ハ此鑰をもつて終之を啓き急ぎ逃
き出んし力を尽して扉を推たし此聲絶望を驚醒せし
ば突然起りて二徒と追留んとせし計らずも絶望ハ此時疾
ふび作りて手足は力なく一寸も歩み得ぬを二徒ハ急ぎ奔つ
て元の柵門より復て天路に入りて危死を免ることを得る
蓋しこの地ハ絶望の來る所也二徒ハ幸ひ此來る
ことを得互ひ相談し曰るより後來る者ハ旁徑より往
來重ねて絶望の爲に獲ぬる如何なる法と以て示すべきや
遂に議して一の石碑となく此柵門より直に疑塞を通くもの
て内ハ絶望といふ強兇者ありて主を藐視其徒と戕賊ふ

天路
各天路

此を行人ハ此よりして往てなつれ又一詩と列秘く

詩云

人行禁地實多危

絶望捉余囚暗獄

後亦の地と行くも之と讀でおほく危たを免まこと

初基督徒と美徒ハ再ハ天路は從て行き樂山といへる山に至り

此山の主ハ即ち美官山の主なり。時子二徒此山小のなりて見と

を花菓の園湧出の泉ありて其水ハ之と飲んで渴と止めり體

とわくへく其菓ハ意のまふ之と摘で食ふべし山之路旁

小は適く羊を飼の所乃牧者ありて立たれば二徒ハ其側に

疑ヒテ去レバ
衆ミ生ス疑案
ヲ出テ淨山ニ
到テ順序然
可クナリ

以馬内利以實
垂書七章十四
節又馬大傳一
章廿三節

天氏ハ人ノ答
牧者ニ非ヤ
レハ言ヒ出ヌ
能ハス

時身も倦れ杖をたれけり彼小問ふていひ此山

の主ハ誰カもや山の草を食へる羊ハ誰のものれや牧者答へるハ

此山ハ以馬内利譯まれを神我と偕あるの意あり耶穌乃名あり

の地ありて此處より望めば其城と見らるる此羊ハ悉く彼れ

物にして彼ハ諸々羊のたれ又ハ生命と舎りたり「基此所より由て

くハ即ち天國に至るべきの路ありや」牧者曰く「然り」基此より天

國に至るの路ハ何程あるや」牧者曰く「此路の遠さと論トカキ

天氏の外ハ必も其遠まを憚るべし」基其路ハ安らるるや抑危険

や」牧信者ハ之を履に危まてくあ」但道は逆ふ者必も其中に

跌らん(何西書十四章九)「基行人が此より来て力倦思つる時之

天路

遠人羅馬書十
二章十三節又
希伯來書十三
章二節

心真二道ヲ樂
シ喜悦ノ腹ヲ
以テ牧師ヲ見
ルモ蓋シ鮮
シ外面假色ノ
者ハ牧師之ヲ
見テ其肺肝ヲ
知ル

智識練達等ノ
諸賢ニ非レハ
樂地ニ立ツト
鉄ハズ

天路歷程

が為の宿屋あるや「牧此山の主が我曰るより遠方の人と念頃
にまると忘る勿ま今まの處乃物々悉く雨の前小具へて雨の心
のまゝにまるとを聴ま。牧者又二徒に問て曰く雨ハ何より来
りし何より此路に入りて能く久く行今まの所小至りや蓋
此路に入もの能みの所来り此山中におい我其面と見せ者
鮮か。二徒ハ始よりの事をもつ一々おれに告一かを牧者ハ之
を聞て甚ど悦怡顔して曰るより爾方山の山来一我が心と喜せ
たり。時小諸の牧者即ち智識練達謹守誠實等ハ二徒の手
と取て帷幕の内より引入備へたる物ともつて之を食させ又之を請
て暫く留まらせり數日互ひひ熱識ここと得まも此此

復生の事と妄
り言つて虚
証ノ戒ヲ侵せ
り且ツ聖書中
ニ於テ其意味
ヲ明テ理解
セナル事ヲ輕

樂を享たり二徒も亦願ふく之が為か留り是夜まで深ければ
二徒ハ寢につきたり一昨夜の明ころ諸の牧者ハ二徒を起して共
この山子遊び四方の表も景色と觀週遊んで居たり一其時に牧
者互に告て曰けるハ數所の異蹟を我等此行入示まべると乃ち
二徒を引て一ツの山に登たり此山の名ハ異端といひて其山の後ハ甚
高斜なり二徒ハ俯して山の下に骸骨のあるを見たり之皆山の
より墜し者ありて骨身を打碎かきたり「基これハ何れを
牧む。許米乃。腓里徒。妄り復生の事と云て虚誕とな
一又その説に従ふ者あつて遂に道小背きたり（提摩太後
二章十七八）爾ハいまこの事を聞きり一や二夜その事ハ我ら

天路歷程

卒ニ説ク可カ
ラハト公會條
例ニ掲ケタリ
此ノ意味ハ闊
外人ノ知ル所
疑フヲ入ラバ
師ニ就テ正ス
ベシ
高きニ過テ絶
頂トイフニ
ハたよ一諸者
葉と拍つへ

五道ノ柵門

も亦聞おらびたり一牧山下の碎れたる骨ハ即ち此人なり今
小尚彼と墓ヲ埋めざる者ハ之をもつて後の戒めたり人
て高た小まぐるてわく異端の絶頂に近づぬより為たり
牧者ハ復び二徒と連て警戒といへる一ツの山ニ登り二徒ハ遙く
遠くを視まば數人ありて亂墓の間と往來する小似たり其者
等ハみか盲目に昏迷と毎も躓跌く墓所といづること
を予一基此ハ何故をや一牧此山を下りて速くもかく道の左
の柵門あり其より入バ其道ハ草原なり爾未だ之と見ざるや
之と知たり一牧其門に入まば直小疑寨に通リ絶望といへる
強者ありて此城を守り墓の間を行數人ハ先ハ皆天路を

所羅門 箴言廿一章十六節

行く者かり一彼柵門小至り一ある路の甚難澁なり
行やたふより乃ち草原に入り絶望のため小獲たり疑
寨小囚たりその後その目を控て之と此墓所に放ち茫茫途は
よみて今に至るまづ出ることを得ま此一事ハ猶所羅門の
「智明の道を舍れば必らむ群死の中に居ほといへるが如し」時
二徒ハ前情と思ひ感して互ひり涕と流たり
時我夢小見ておとむ牧者ハ基督徒と美徒の二徒と連て
復び山の下なる門の所に至り此門と啓きて二徒再視さ
せり中ハ悉く幽暗ありて四方に火烟あり其うち烈火の聲
慘哭の音硫磺の味などを恍聞たり一基此ハ何ゆへなるや一牧此ハ

天路歷程

地獄私語 妙對
雲間捷徑
以掃創世記廿
五章卅三節
猶太馬太廿六
章十五六
亞力山提摩太
後四章十四節
亞拿尼亞使徒
行傳五章二三
節

乃ち地獄の私門アレキサンデルありて諸の偽善者の入る所なり以掃アレキサンデルふを以て其
長子の業と賣者猶太は效ふて救主と賣者銅匠亞力山大アレキサンデルな
らぬ福音を謗讀者亞拿尼亞と其妻撒非喇サッヒラを以て今
言を裝飾者の若し「美我此等の人と觀る小各々天路を行アく
ハ固より我輩は似て同ト旅衣をもちぬより一牧彼の天路とゆアい
久しかりて「美彼何ほどの遠きまで行きて酷亡たるや」牧行
こ此山を過し者有り亦此の山ア及アむざる者あり其時二徒互
小勸アていへるより吾儕ハ切ア主の力を我賜アらんことを求む
へまかり一牧然り爾主の力を得ア又アまアふ之と用アべし。時二徒
も前行アことを欲し牧者もまア此のこアれを願アて遂アと送ア

山後小びりあり

斯徒竟至樂山場

中有牧師飼主羊

摩示二徒諸往鑑

且驚且喜得平康

時に牧者ハ互ア相アかアりて曰ア「今日天國乃門をアくるべきア我
丹千里鏡ア何れア此行人ア借アて一觀アせアむるハ善アむアむアや
二徒ハ之アと欣ア領アく乃ち牧者ア連アらアきて清景アと名アづけた
る一ツの高山ア小アいたり彼の千里鏡アともつア二徒ア交アたアれば二徒
ハ千里鏡アと執アて觀ア兼アて見アし所の諸情ア小思ア及アひア「此時心
おろろき手慄アへて定視アるア能アハアざりア然アまアも稍アな城
の榮耀アと見アまア其門アも微見アえたり二徒ア觀ア訖ア乃アち復ア

天路

前行

智識練達牧之名

人所難知彼解明

我到樂山逢此輩

觀諸奧妙益吾情

二徒ハ將小起程せんともる時諸の牧者のうち一人ハ路程誌
 録とあへ一人ハ謹下諂媚者と防げと戒め一人ハ迷氣地中
 て必も睡るなわれと戒め一人ハ其安と祝ふと主一路爾
 借なもんことを願ふといへり此に至りて我夢乃ち醒た
 後再睡て復夢と彼二徒と見る小此時漸く山と下り天城小む
 りふて往稍木の山と左に離れし所小自満と名づくる地あり此
 内は二の徑のりて小きく且曲りたるが側より天路ふ入れり二徒

ハきの徑の小口に至り一時適く一人の年少者に遇はば彼の體
 態輕率しく其名と無知といへる者が是地より來たり基督
 徒彼小むふて何より來り何へ往やと問ふ「無知余ハ此山の左
 小生長せし者あるが今天城に往んとするまゝなり「基君ハ
 如何小思ひ玉ふや天國に入らんと思ひ玉ふ天國は入ると
 とハ甚だ難きことハ思ひ玉ふや「無善人ハ入るとの成ふ
 れバ余とも入るとの出來ぬことハか「基君が若しも天城
 小到し時ハ何あら憑據らつて其門ふり玉ふや「無吾が主乃
 命と我ハ知まじり我ハ素より善くを行は義ともつくと人待
 らひ祈禱斷食家資を以て聖會と助け貧乏人と濟ひ合はる

天路歷程

己の本邑をまて、天城は行人とまらかり「基君ハ此路へ入來
 に何故窄門小由らぎして曲徑より入里しや今自うう天國
 入ること許さども誠におそろしく審判の期かかお爾と
 視て賊となり豈彼城に爾の入りしことを許さるべき無君等ハ
 まことに我を知らざるあり且素より互に識らぬかのふまを爾
 ハ爾の教に從ひ我ハ日教に志すがちん我かといふ方こそ
 失策ハかのるべし爾のいふ窄門あつものいせの人乃知おと吾邑と
 けふあつこと甚だ遠けきを此門に至るは路ハ我邑の者一人も
 識者なり然とも此亦何のさすけあんとや如何とわれを我
 來りし徑ハ捷徑ありて行やましく稍正路と同くけきとなす是

おいし基督徒ハ斯く彼の自くら是とまらば見て遂に語を傳
 て美徒小曰うう聖書小曰く愚蠢なるの輩ハ尚のぞむべき有り
 (箴言廿六章十二)此人小至てハ則ち望なり又曰う凡そ無知なる
 者トたび諸途小づもば智識足らむして若し人と言てく何
 き即ち其無知と露いせ(傳道書十章三)我今何ある法
 て此人と處せんや彼と復言しましまさ抑之とまら先
 ゆた彼とて我の言を思へめ後その來るをもちて漸く之
 を勧めば或は能く悔ひ改むることありて益をうべきなり我
 の意ふ今一時小彼といひ盡まことはいちふ可かむと暫く彼
 先だつて往た後若しゆき折れ其時ま言べし

人生自滿實無知

若果執迷終不悟

輕棄平言即自欺

屆期審判不憐之

諸も基督徒と美徒の二徒ハ夫より進んで前より行地無知もまゝ
あつたり随ひて未だ遠くも行ぬうち二筋の陰徑に差りて
此所あり或る人が七邪神又七ツの繩をもつて縛らる直ま
舟山の下乃門又向ふて曳き段々二徒の方に近づき一ツは二徒
ハ之を視て大いに懼れ戦慄して居りて一は基督徒ハ之を
視て意ふより是ハ棄信郡の背道なるべし。然も彼も彼を
盜賊の捕られ如く其首を垂れて通りて一は分明にそれ
とも觀定めぬより志の彼を通り過ぎてのち義徒ハ廻視

此三賊日々吾
革ノ室門ヲ窺

て彼の背を見れば文字ありて云ふ「此れ外ハ聖徒を殺すも
實ハ淫悪にて道ヲ背くが為永此刑罰を受べし定まらざり
と。時ハ基督徒ハ義徒に向ふて曰く「今遇てこの事あり我ハ
一人の善徒と思ひ出せり此ハ其名と小信といひて心誠郷あり
一の彼も亦我門のこゝ天路と行つて此陰徑に入りたる
然るも又別に一ツの徑ありて直又闊路を通り其名と殺徑とい
り其譯ハ常ニ此處におゝる人の殺さる故あり時ハ小信ハ其處
み坐て睡りける又適く三人の強賊あり其名と懦志疑心罪
辜。なほくる者濶路より下りて殺徑に入り小信ハ此所に
睡ると見て其方へ近づれり此時小信ハ目を覺て起き

天路歷程

あがり復び前日進まんとせし彼の三人ハ側日近づき之を嚇り
 つけて曰く此小立て。小信之を聞て貌驚し走も勿くねハ敵たふ
 事も出来ず青くあつ居りし一カを懦志の白金を出せ。小信
 ハ甚く其金と失ふことを願も延緩して出さねハ疑心ま
 逼りて之又近づき手と其懐小入きて探りまハ囊中より其
 金一感と奪取たり。小信ハ大聲に呼りて盜賊くといは是
 おぬ罪幸ハ大杖を以て其首と撃ちて地日顛仆暫一の間
 ハ血流れ出て大方死たる有様なりし時遙か人聲あり
 て此處小來りる者ハ篤信郷の崇恩なりしカ彼の三人ハ
 盜賊ハ小信を遺して足疾脱去り暫く小信ハ大方愈

りを勉強して前行あり

懦弱與罪賊靈魂

幸有崇恩居篤信

擊小信徒命僅存

崇恩一至賊皆奔

其時美徒ハ基督徒日向ひ美時三人の盜賊ハ其物と
 奪つてせや「基否く小信が持たる寶石の在所ハ盜賊の
 搜り得ざりし故母其寶石ハ残りたり然し此損失のたえ
 小信ハ大い悲しめり如何とわれを賊の為ニ彼の路用と奪
 ちれ唯奪ちれざりし物ハ寶石と其外ニ端銭が僅ら残るの
 かれを此金で小信の旅と終らんことハ甚く六ヶ敷且其彼の
 寶石ハ決して賣ここのちぬ者少く命をつぐ為ハ乞

初非人力提摩
太後一章十四
節
彼不失此室被
得前一章九節
此引証ニテ室
トハ靈魂ノ
トハ靈魂ノ

食とせねばなりぬらう小終は空腹少く乞食ふから残り
道と歩きたり一羨小信の手は天國に入るべきの證文あるに
盜賊が夫とと奪はざりし實は不思議のこゝろなりや「基
誠」不思議なる事なり然し盜賊が此寶石を見付て取
し小信の智慧よきには非む如何もわれを小信が賊に出遇
し時ハ甚だ恐懼て本心をも失ふ程なれば中々其物と藏
たりあるカも手間もなかりしにわれハ此寶石と賊が奪はざりし
ハ全くもつゝ人のカもわれハ實は天の恩なり「美小信ハ其寶
石を失はざれば夫に依て心と慰さぬらん」基若し小信
が此寶石を飽くでも善く用ゆ其用の方を失ふはざりしに

漢書ニ云ク徳
ハ本ナリ財ハ
末ナリ

此一段ノ文意
ハ小信カ信徳
ハ小ナリトモ
可ク且テ愛ス可
キナリ然レハ
其信ノ小ナルヲ
以テ大信ニテ
難ニ違フハ高

らば小信小取て大いなる慰もなれども但或人の云ふは小信
ハ金と盗られし時の驚れり終は寶石の用方と大に失ひ
し程小て寶石ハ存りても此旅路に於て毎々寶石ハ在るこ
と忘るる然し時々して其の寶石と思ひ出して心と慰さぬ
おあま時われども又その盜賊はあひしことを思ひ出して慰
轉て憂ひとかりたり「美此人ハ何故そのやうに憂ふる誠
哀しきまゝとかり」基然し其憂ひハ實は甚だしくなり若し
我等が他國小在て盜賊に出遭金とをわれ身體に傷と蒙
りしや其憂ひハ亦彼と同しなるべし故に小信が此難に遭
ひ憂ひく死せむ何れも不思議のこゝろに非む當然の事也人の

天路歷程

言ハリト云氏兼
テ現世ノ人々
ノ盗難ニ逢テ
キ心得テテ
テ説キ出ス故
文詞ノ合ム所
多クテ洗暢ナ
ラニ言句ノ洗
寛ユルニ似テ
アリ此レ著書
生ノ用意ノ處
リ有官等隔ニ
之ヲ看過ハ切レ

天路歷程

言ハ彼の小信ハ其後旅する時惟哀歎悲苦するのときお路
中中人小出遇バ一々語りて云ふらう何處小あり一とき如何
る賊に遇ひ如何なる物を奪われ傷をうけ大方小命を喪な
もんせり「羨左程小困り一なり彼が持ところの寶石と質
小置とらまへ賣拂ふとの志何故又旅の路用を補かふなり
一や基爾の言葉ハ未だ殼と脱せざる黄離小異なりさるなり
夫れ何を求めんとて此寶を賣んとまよや又誰ハ此寶石と
賣んとするや賊小遇一所てハ此寶石を賣とせむ故ハ此
寶石と賣て路用小備らるる難一蓋天城に至るとハ小
此寶石と持つ小ららぎれば天業を受嗣ことと得む故ハ小

以掃創世記二
十五章三十三
節
希百宋書十三
章十六節二
哺啜ノ為メトア
リ

信の心でハ天業の受らまぬハ萬度も賊ハ出遇ハ大ハ困
難ハおハひハおハんハ一羨兄弟ハ何故汝ハ左様に我ハ言ハ辛ハ折ハ
や以掃長子たる時饑て一飯のため小長子の家督を賣らり此
長子の家督ハ以掃の身ハ取らて、第一の寶ハ然らるる以掃ハ之
と賣らことを為せり小信ハ何ハ是を為さり一や基以掃ハ實ハ
長子の家督を賣り且此小ハ其様ハ事と為さ者數多
あれども其様ハ為さ者ハ矢張以掃のハ小水福ハ棄
たる今汝ハ以掃と小信ハの人ハ為さり其持物ハと區別ハまさき
かり彼らの人ハかりも彼等ハ持物ハも大ハ同ハび以掃ハ長子
の家督ハ直ハ天ハ寶ハとハて天寶の表ハ然ら一小信ハの寶ハ

天路歷程

情慾ノ奴隷覺
ノ子ト云ニ
信ハ小サレト
モ尊ムベシ況
ヤ大信トモ

實の天寶なり以掃ハ口や腹と主とあせども小信ハ左ノ非サ以掃
の嗜む處も血内乃慾なれども小信ニあつてハ又左非也且以
掃の心ハ慾ヲた免ニ蔽ヌれて遠ク見ると能はず如何ハ
分れを以掃の云ハ一言ハ我ハ殆んど死せんとも伐ニ長子の
家督ありとも我ニおいて何の益ナらんや小信においてハ其
信仰が至つて小サなれども以掃の法外の事となさる
以掃が長子の業を賣ニ様ニ小信ハ寶石と賣らむ益ク夫
と尊び見る様ニなりて爾も聖書の中ニ何處あても以
掃に信ハることを讀ニ處あるま然まを彼ニ小サ信ハる
もナキ勿レ若一人ハ信仰ガ多クハ惟情慾の爲ニ使レ其

寶石ノ真價

長子の家督も靈魂も残らむ賣て魔鬼に従ハる者ナリ是レ
奇トまる小足らず心ガ情慾ニ陷ル知如何ナル者ニ慾ニ爲
棄てたまへども惟小信ニおいてハ專ラ天物を好ミ常ニ天恩
聖道を以て生と養ハへり故ニ人ガ若シ信あるを縱令人ありて
此寶と買んと求むるも此大切ナル寶石と賣テ其代リハ他
の物あるや極めてナリ且如何なる人あても腹をみくらハ爲メ錢
といふて草々易ク易ク者ナらんや又爐とバ如何ハ勸むるも鳥
鴉の如ク屍と食ン去ルハ難クハ然レバ信仰ナ知者ハ情
慾のためハ所有物おもハ靈魂までも皆賣能ふとて信
ある者ハ由リ其信ガ小なれをて決テ其様ガ事ハナクハ

かり此をもつて見れば爾の言葉も大に謬まきなり。

其時美徒は云ふ我も固より其事を知て居ても餘り爾の言
うらうが嚴しきゆへ我も大に怒りをおこさせたり。基督徒
の曰く爾ハ鳥が未だ殻を脱きしむに路上と走りて如くわれども
然し此事ハ扱置た尚議論まきべし。我意ふは彼の三賊ハ臆
病者の仲間なるべし如何とされば人の足音を聞くとむくりと
走りしゆへあり且まき小信とても何故斯うに懼れて大胆
なりたるや先敵と戦ひ力ありをばは其後之に服するも遅
ゆへなるものを「基人」が多く賊ハ臆病なることを言ふといハザ
己が其場ふのぞみ之に遇はば此と言ふものなり。小信ハ固より

左ノ願石ノ願
ハ教徒も此時
にまれたりや

大胆なる者ありは雨の言處よりこれハ爾も此賊ハ出遇はる
を一時争きつて後小従うべくハ従うべし然まきも汝ハ彼賊小近
つりたる故大胆なり若しも彼の賊ハ小信は為しこく汝もむろく
来るゆへに汝ハ今の心ハ愛するべし。能く考ふべし彼賊ハ旅人と苦
しむる者あり其上に深淵と云ふ王あり若し大事あれば其王
忽ち来て賊の加勢をかせ其聲ハ獅子の吼るが如し。我も一度小
信のうら小彼三賊ハ出遇はば我ハ力をつくして禦はらふ其時
三賊一聲ををてば其王はあまら来て加勢をかりたり世俗に
云ふ如く其時ハ我命ハ錢の値もかりり。が幸に真神の恩に
より身に堅甲あれば飽まをも力を盡して防ぎしが然るも竟り

及ばざるに實に個様の敵と抵抗する時の苦情は身小覚へある
 人下かけを知ら難し「羨若し其時小崇恩来らば彼賊等も
 王と共に逃去るべし」崇恩来らば彼等も走ること何るべし如何
 となれば崇恩は我り主の大將かり然し小信と大將と此二ツの
 者は大に異なり至に幕下は多くの民おれども皆悉く大將
 小信とされし諸くの敵あふ時ち大將のより小奇功と建る
 おく能はざるなり昔太闢ハ柯利亜を殺せり此ハ凡ての小
 兒が皆能く得る所は非も婦鳥の力ち豈で田と耕まこ
 とを能くせんや聖徒の中にも或は力の強きあり或は力弱
 きあり信仰の大なるあり小なるあり右小信のよきま固より

大闢母身上
 十七章
 鶴鶴之力量能
 及耕牛也

弱者か故敵小遇て即ち敗れかり「羨此三賊が崇恩と遇
 するに惜れしとなり」基縱令崇恩とて此賊小味は亦
 難かるべし如何とされを崇恩善くたらしむ兩鋒相ひ抗の時
 之と禦ぐとも若し懦志や疑心が其場を臨み來まば其
 敗を仕る事と免れ難し人若し地を仕まらば何事
 とも勿能ふも且崇恩の貌と見し人ハ必らも其面を傷痕
 のあると見て我が言葉と實とまべし昔崇恩戦中小に
 時言たるを我生命と保の望と更絶たりトも此強き
 敵大闢を憂苦せしめ事如何をくりたりぞも希曼
 と希洗家ハ主の大將かりに賊を襲まれしと力とつし

如人既仕地有
 何能為耶ト知
 言ト云ベシ
 昔崇恩ハ漢譯
 ニ昔保羅トア
 大辟母苦操等
 耳下廿四章十
 節
 希曼未考
 希世家列王紀
 下廿八章

一婢馬太廿六章六十九

て防ぎたれども終に重く敵またり且主の使徒といわれ彼
 得まら或時その能力を試んとして敵のため小心と弱め
 卒に二人の下婢と恐るるはふりしれり而して其賊の王に近き
 居りて賊等呼時何時でも聞える處に居るは賊等が
 戦て負ける時何時でも来りて賊を助る此王は實に強兇
 して刃を以て切ても切さず鎗を突ても透らぬ甲冑も用さず
 鎌も蓬蒿の様思ひ銅の枯木の様に見る矢を射ても恐る
 石を投ても草まひくく人々投矢をまれば藁とや戈と舞せ
 る彼おほひ笑ふ個様から者に向つて如何せむ勝てよや備
 人が約伯の馬を乗りて胆力を強くして防ぎは或ひは秀逸たる

我輩賊ト同
 居マレアリ又
 賊ノ奴隷トナ
 ルアリ早ク此
 境ヲ出テ耶山
 ニ走ルベシ
 ニ入ルベシ

切と建りべし(約百四十一章廿六以下三十九章十九節)其馬の大略

頸壯若雷霆 嘶時氣象噪 谷中歡逞力

陳上直衝兵 矢密軍聲震 刀鈍鼓角鳴

此間危且險 馬躍罔知驚

汝や我等の如き者ハ彼の賊敵小出達とて決して喜ぶま
 かり且ま彼の敵小負者ハ彼の汝ハ自慢して我ハ其敵
 勝べしと云ふことなれ若も自慢して戦ふらば其敗北を取
 こし前の人よりも易うるべし前もいひて彼得のこ
 とを思ひ見れば大い言をまきて主を誇り衆庶がたとひ
 耶穌を見てもかまはぬ我ハ決して耶穌を離さむといへり然

大言馬太廿六章三十三

火箭以弗所六章十六
大辟死蔭谷詩三篇六節
摩西出埃及三十三章十五

ども其後そのちは他たの人ひとをも過まして敵たきを負まとせしあり。夫故それゆゑ我々
が天路てんろと行く道中みちのちうで個様こようある賊ぞくの我われと劫あせやうと聞きか
らを謹つんで堅かま甲かぶと信仰しんこうの盾たてを用意よういまこと肝要かんようなり昔むかし
或ある人ひとが彼かの賊王ぞくおうを禦あせぶ信仰しんこうの盾たてなり。うは終ついに其戦そのたたかひハ
勝かつたりた故ゆゑ我等われら若もし右みぎの甲かぶと盾たてを持もつ。うを彼の賊かと
決かくして我われと恐おそまむ或識者あるしやくしやの言ことばに諸あまの者ものを第一だいいち信仰しんこうの盾
と用意よういまむ。若もし此盾このたてを用もちゆるふおいて惡賊あくぞくの火箭やまきも其その
しな。且かつまゝ主しゆ祈いのちて主常しゆじょう我われを守まもり我われと共ともに行いたまへんと
と求もとむ。昔むかし大辟死蔭谷だいひくしのうかげに居ゐ。此この信仰しんこうの盾たてを持もつ。故ゆゑ
其心そのこころ安やすく。摩西モーセも神かみと共ともに行いふ。されを決けつして

其任そのにん處ちよと去さる。好このまふ友ともつ。其處そのちよで死しむ。増さかりとせ
ん我兄弟われがけいだい神若かみ。我等われらと共ともに行いたまふ。千萬せんまんの敵たてありとも
恐おそる。不足たらむ若もし。神かみと共ともに居ゐ。うを假令たとひ如何いかにな
る強勇かうゆう者しや来きりて我われを助たすくる。皆みな必かならずに死しむべし。我嘗われかうて苦戦くせん
をかせ。とれ王おうの助たすけよりて死しせざる。とえ。然しかし我われが其敵そのあてま
小負こみたり。勇ゆう小誇ここること能あはむ。只ただ此後このちあ惡賊あくぞく小逢あひ。うを
我われが喜よろこび。更さらに大おほいあるべし。我われをい。大おほいある危あやまこと。に
出遇であひ。前まへに獅子しし熊くまふ。で。ひ。ま。あり。其時そのとき之これがた。免
れ吞かされ。我われが幸さいひなり。此後このちあ唯一た圖づに惡賊あくぞく出逢であひ。こ
しを恐おそる。われも若もし。之これに遇あひ。この有あり。うを神かみ

必らむ我を助けたまはんことを希望の所なり

聖徒信小事難成

與敵相逢必大驚

若頼耶穌專信主

敵雖千萬力能勝

夫を基督徒と羨徒は前を行き無知も亦之に隨ぐひ一時
ふ或所に至りて正途に混入たる一ツの途あり其途は直く平ら
に正途ふまざりしをうりければ二徒は此所へ佇立て何と正
途とも定めず躊躇して居る所へ一の黒漢が皎白の衣を着て
二徒は所より來り君等何故其處に立たまふやと二徒は之を答
えて我等は天國小旅する者なり此兩途小遇ふ可まも分
ち難けむ此處に立たるあり黒漢の曰く我も亦其處に

往くんとされば我に従うて來り玉へて終つ二徒は黒漢にあ
ぐひ偏たる途より往くめ志が其路次第に向きがかりて間も
なく天國の背後とありて二徒は猶も之に従ふ様子ありか
是又間もなく網中より引入り足は之の為に纏絆て身動き
もあらず時々黒漢の皎白の衣に忽ち脱たり二徒は此有様と
見て脱出んとされども脱する事あたたまを暫く網の中にお
痛哭する其時基督徒は美徒小むりて曰く謹んで諂媚ものと防
ぐことハ牧者が戒めり今我は誤りしを知らず所羅
門の言ひし小人其隣小諂媚ハ猶網と志せし人の足と纏ふ
の如くむむるや一箴言廿九章五「美牧者ハ前々我等に道

中記と何とて我等の迷まぬうかせし我の之とみることを忘ま
 て此亡びの途に陥りたる大辟の言る言葉凡そ我が行動即ち
 主の言と以て自ら守れば諸の亡ぶる途に入らざらばト(詩十七篇)節
 然る今我等の此れごとくなる誠大辟の智及たざるなりト
 語りあひほ網の中より嘆哭しが後一乃光耀者手不鞭と執て二
 徒近つきて曰く何まより来りま何故此處小あるや「二徒吾
 等、困苦旅人たるが郇山不往んとて一の黒漢に出遇し其
 者も亦旅人あるや我等を導きこれ不随りや終る路と
 誤りなり鞭と執者の曰く此黒漢、即ち諂媚者也貌と光
 明不托て假し基督の使徒たるのト言訖つて其網と裂二徒と

其中を助け出せし之に向つて我小まぐ我爾と導まき正路
 不返さんとして二徒を引て原野入り其時二人又問てのめり
 昨夜、何處小宿りや「二徒昨夜、樂山におし牧者の幕中小宿
 り」執鞭牧者の道中記とあるへりや「二徒與へり」執鞭左様な
 らば何故小早く道中記を見ることを為む猶豫して居たりしや「二徒
 我等其事を忘れたれあり」執鞭牧者が爾を戒め謹んで諂媚
 そのと防けと言さるや「二徒其言、聞たれども但此人の言、ころの
 甚だ婉く故小諂媚と思はるり也其時我夢の中、鞭と執者を
 見ま彼二徒と地、鞭と以て之を鞭ちたり如何と勿れ彼等と
 ち正路とあゆませんとなり且鞭うつ時之小曰るら我愛まる所乃

者ハ之と謹之と鞭うつ故に當其志を鋭く悔改ベト命おそりそく復往くめ且之を告るより牧者が示せし處の諸くの誠め謹んぶ忘るゝあかざりれと時二徒ハ其惠愛と謝し足とははて進こたせ

路上諸徒此可觀

雖蒙救主開羅網

輕聽諂媚遇艱難
且受重鞭身痛酸

基督徒と美徒の二徒ハ夫より前に進こつて程多し向ふ方より徐行して來る者あり基督徒ハ美徒小向ふて曰らう向より天國と背みて後戻と為る者我等の所來らんことを我れも已之と見しが恐らくハ亦諂媚者なりん我等ハ能く慎むべき

こしかりト言時彼人ハ漸次近づくて二徒の前小來り其名を罔天と云者也二徒は向より何處小往んともやと問ふ「基督徒ハ曰らう爾何を笑ふや」罔爾の無智を笑ふり遙々此遠路を行も徒ら苦勞と招くのみ「基督徒ハ何の言でがや我等ハ天國小到るも納られまと思ふく罔爾ハ幻想とら場所ハ此世無とあらわれ爾と納るべく誰ら其處に居座起や」基督徒ハ「世小かくとも來せしは必し有り」罔我昔本邑にありし時其處の事を聞し故之を尋るため小往し二十年乃餘もわたりしが今に至るまで此處のあるを

此世の樂ハ人
慾のまじり
た神の詩ハ
も自己の智カ
て成就せし
人智我慾を
まじりて地獄
に落す

見ぞ「基實」是處あり我等ハ聞て此所乃有と信むるなり
「固」我の本邑「在」一時雨のおく之を信むる非ざる此遠
方と遙々来りて尋ねばまじりたれども我ハ之と慕ひて
諸てのせし事と棄たるなり然れども今其所を見當らば
る之復び本邑に歸りて此世の樂みと享んたるなり倘も
果して其處が何れも我ハ必ぎ之を見まべし如何ぞなれば我
行「道程」ハ爾も更々遠々ればなりと其時基督徒ハ
美徒小向ふ此人の言所ハ眞實本當の事なり「我
等」ハ謹慎むべし此等々諂媚者たぐひかん我前ハ此輩に
從て諸の難儀を受たれし兄ハるせし此事と思はるや如何

で天國を無くせん我等樂山ふおひく之と望見し非ざる我
ハ信よりて行へく目小よりて往るるべし切小直前ハ執鞭者
の爲小逐るるなれ聖書小曰く迷人ハ智道ニ離る小子聴くなら
ま下「箴言」九章廿七節「此言ハ兄を我小教へま今我ハ及つ
雨とをへたり雨切小彼の人ハ聴かれ我等ハ信小う救ひ
を得べきなり「基」我君小問をかき我ハ信むる所を疑ひ
し小うす惟雨を試み雨ハ誠と表さんとせしゆ分り我々
早くも彼人の惡世に迷ひしことを知りたり今我ハ信
むる所の眞理小於て少しも謬りなきことばあれは之より直
進むべし「我」今我ハ大いなる榮と企望して心喜小勝るるなりと

言つ二徒の罔天と捨て行き罔天もちり笑ふ去る。時我夢
二徒の前行を見ても其後一ツの地はゆるが其處ハ凡て初
て入る者其氣も感して睡を催まの所あり二徒此所來り
時羨徒ハ心つらきて睡たかり基督徒曰ふ我今甚だ睡
多かりて睡が明けぬれを暫く此處に睡ること欲
るがを「基決して不可なり誠に恐る一たび睡らば醒るあか
ふまど」羨如何で斯の如くなくんや夫旅して倦る者ハ睡を見
こと羨もき食物のむら若く暫時睡らば精神ありは
爽やの多るべし「基昨日一牧者の言ふ迷氣地あれ決して其
所は睡るべからざれば戒免るを兄ハ之を忘るる且聖書に曰

もや我輩ハ衆れ知く寝るなりれ當く儆醒謹守べし帖
撒羅尼迦前五章六「美我も過ちを知れり我若く獨此小のり
しを必も睡て死に至るべし」所羅門の言に一人ハ兩人より
むと誠なるか此言や傳道四章九節「兄が私の伴ありて實小
我の大きい益あり兄力めて我を勧め後必も善報を得べし
「基此所ありて睡らぬため善事を擧て互に議論せよ」羨我
も其事ハ甚だ願ひしことかり「基互に議論せよ」先づ何
事を論むべきや「羨真神の始ふ我心を化せしことを以て
論むべしれども先兄之を言たる

恐睡於斯當互言

歷將恩化復尋原

果能相勸常祈禱

迷氣地中乃不悟

看官目と割り玉へ

羅馬六章廿五節
以弗所五章六節

沉淪馬太七章十三節

是くおしき基督徒ハ美徒ト向ひ爾の始め行ひ今この行の様
 小かきりハ何故かや「羨我の昔」此靈魂の寶と如何と知
 や問たまふ「基然」羨虚華市中あて賣る所見の物の素
 我が好む所物なりハ後此物ハ若ク之と好んで止まん
 終ハ沉淪ふべき事と知れり「基其物」は如何なる物ハ
 「美即ち世の財富放恣・酗酒・呪詛・謊言・淫欲・あね等の諸惡」
 當時我の樂む所ありハ後ハ真理と聞て思へら此惡
 におかり者ハ皆眞神の震怒と被むる終つてハ沉淪
 此情と知りハ昔虚華市中ハ盡忠と爾言と聞

第一罪ヲ悟ラ

第二慾ヲ舍ガ

「羨無我ハ此罪惡乃非き事ト罪惡の永刑トと知りおれとも已
 小はひて深く省みること願はむ心ハ真理よつひて感動
 雖も目を閉して視ず真理の光ハ我心と洞燭を欲せ
 里」「基眞神の聖靈が始め」爾の心を感ぜ」爾ハ何故是
 のことと之を拒りや「羨其故數」ある蓋此のおと我
 感動せ」眞神の恩化を知らざれば第一ハ眞神が衆人
 を化して善き歸せ」めんともむる時ハ必也先づ其罪と悟ら
 むるを知らざる子因て之を拒き第二ハ其項我ハ諸の私
 慾と樂之と嗜む事甘き食物のおと心と之と捨てり」

因^り之^を拒^げき第三^{の中}素^{より}交^遊とあ^らずの朋友^ハ我^甚と其人^と
と交^るを樂^しむる其^行ふ處^も樂^む因^て之^を棄^るふ忍^びが
里^に因^り第四^{の中}凡^そ罪^を悟^るの時^ハ我^ガ心^ハ甚^だ憂^驚が
ゆ^ゝ復^び其^様か時^に出^遇と好^ます且^憂驚^{の時}乃^こま^はす
之^を心^にだ^も思^ふて好^ますり^ゆゝ^キ基^兄乃^言とら^ん哉
聞^み罪^を悟^き憂^驚する^はと^り里^あら^ず時^と々^ハ又^無理^マ
其^憂驚^を免^ること^有べ^し「羨^時々^ハ其^様か^ら然^し間^に
そ^ら復^び其^罪を悟^憂驚^する^甚だ^りき[「]基^爾を[「]
復^び罪^を悟^らま^は何^のゆ^ゝふ^や「羨^る故^ハ澤^山か^ら里^に
或^ハ路^上や^善人^と遇^ふ事^或ハ偶^聖書^の道^と聞^事或^ハ己^の身

小^病あり事^或ハ傍^人小^病有^り或^ハ人^の死^たる^を哭^くの聲^を聞^き
ま^或ハ我^の死^{する}時^と思^ひ及^び或^ハ人^ハ暴^死する^{こと}を聞^等お
ま^皆我^ハ復^び罪^を悟^て憂^驚志^むる^所かり夫^のこ^ろに未^だ
聞^もか^き小^我を必^ず主^{の前}に到^り審^を受^べま^し事^と思^ひ
一^ハ憂^驚とま^らち^{あり}「基^爾罪^を悟^るあ^らず其^がな^れば
時^ハ爾^ハ心^を任^せて無^理ハ其^憂を免^ること^ハ出^来ずや[「]羨^る
固^{より}能^はば^{なり}如何^にな^れば我^ハ心^に罪^を悟^ること^ハ為^す
其^拍され且^罪を惡^むの心^もつ^て甚^だだ^らぬ^や然^{して}
ま^思の惡^中に^入る^{あり}て益^ハ我^心を愴^まめ^{たり}
儲^{基督}徒^ハ羨^徒小^向ふ^や曰^ふや^其時^爾の行^ハ如何^{なり}や

少き悪を非
ふ手交違を
絶ちかて
神は仕え
勤め聖書と
いふこと罪を
けれたる
き誠と
看官も
よつめ行ひ
ゆ

「義其時我が自らおもふハカ一杯過をあゝむべき事若
左もなバ沉淪と免れか上基爾ハカ一杯過を改めんと思
其お行や「義然り夫のなげに舊き悪を遠離り
朋友と交るゝと絶ち且まう力をつくゝ真の神小事へ時々祈
禱勤めて聖書を讀み痛く吾が罪を哭き言と以時誠を
存する等の事と為し其他にまら敷事あれども今こゝに述
べ「基其時爾其お行ひ自ら其等と以て最宜
おまひ「義一時其謂たり但知て過を改めり雖
ども前ふ憂驚おむき思ひ復び我が心觸たり「基爾を
舊き悪をあゝめ何ぞま是のむ憂驚や「義我と此の

此處己の功を
特むの愚なり

破るものハ亦いろの故あ蓋聖書ふ人の善義
破る汚れたる衣の「ト以賽亞六十四章六又曰法を恃
て行ふ者ハ義と稱せらるゝと得む（加拉太二章十六節）又曰
我儕も主乃命む所を行ふも亦まふ自無益の僕といふ
ト（路加十七章十節）此の言ハ聖書中におほく載てあり故に
我自ら思ふ自己乃善義破れて汚れたる衣の「法を
恃んで行ふ真神の前にあつて義せらるゝを得む主の命
従ふも亦無益の僕に属せまバ己の功を恃てて天國を計らん
を其くが此則ち愚なる事實甚だ其時
自らおもふ或る商人が若も五百金などの品借をかりて借

ことを云ひ次ぎ
基督に依る
罪の救を得る
一説話と挿し
序の商人の
者手段亦妙

財となりたらん少、其後引取品と現金小拂ふとも倘前物の
と拂ふあゝいむんを債主に必む之と官に訟たく終獄囚ま
釈放すこと能ふま、其事を爾ぢ小比較カバ如何を
「我自らと揃見る小我いまで小罪を真神小獲深く其債を
負たり故小今過ちを改たむるも前の債ハ其ま残りたれ
我毎過と改むるの後、猶前惡の為、沉淪して免れ
を思へる
時、基督徒ハ美徒、曰く其喻ハ實小、倘再び語りた申。
義徒の曰く過と改るの後も尚他の原因ありて我心を安んぜ
り如何にむれを我り行々入處あり、至善とせ、者も細

一日の惡地獄
ニ落ち畢生の
善ハ賈ニ足ら

小之と視き、尚惡まき、其うち小雜れ、前小自ら是、自ら
賢いとせ、後小一日の惡地獄、陷る、足て畢生
の善といへとも賈ふこと、信ぜり「基時小又汝の行、如何か
り、や、美始小、方角と失ひ、程かり、の後衷情と以て、事
と盡忠小告たり、盡忠ハ我が相識なる也、時小彼の云ける、小は
若一の罪なき者の義と得る小あらず、己の義、また世界中の
義、亦も皆我と救ふこと、能ふま、ト「基盡忠が言、ことと真
かりと信ぜ、や、我も、過と改めて、自、満足するの時、彼の
言を聞か、必らむ之を愚かりと云ふ、れ、但、其時、ハ、
小己の過と知り、己が善、行ひ、小惡の雜る、

骨隨
歴卷

各

奉世無一金善
全英之人詩十
四篇同五十三
三篇傳道七
章廿羅馬書
三章十節ヲ
着其他歲
言廿章列王
上八章三出
タリ
馬太傳十九章
十七云於神而
外無一善者路
加傳十八章十
八節

有と知れ、盡忠の言ふと信ぜども、居らまぬなり、「基
忠が君との罪なき者れ、を云、時汝は世間、是の如き人
ありと度ひ、う、羨始めに其言を聞、時の吾固より之を不
議として疑ひ、を繼ひて之と談まらち漸次、其事を信
る様ふなりたる、基此罪か犯者、誰のこゝと又彼が如何
爾を義と稱まるとを得せ、むるやのこゝと爾、其時彼小問ひ
一か、羨然り彼の云、此罪なき者、即ち吾主耶穌、
今真神の右に坐せり、又曰く、義と稱せらまんと、
歟、世小在り行ふ所の義木、懸て受ると、
之に倚べきなり、我、彼、曰く、耶穌の義が我を主の前

凡勞苦仕重者
歎就哉則賜爾
安
一点一畫馬太
五章十八節

て義と稱まると得せ、むるや何を以て此と致まや彼れ云、
耶穌、即ち全能の主宰、世小ありて行ひ、
一、事、皆己のため小非む、實、乃ち人の為なり、我若し信
之に倚む、其義、其功、を我小歸せ、
行、如何なり、「羨、時、小、其、我、を、救、ふ、を、肯、ふ、や、疑、ひ、未、だ、敢
て、信、ふ、を、おれ、小、倚、さ、り、死、基、盡、忠、爾、小、何、と、云、く、羨、彼、の、謂、小
往、て、見、べ、し、我、此、事、を、無、益、か、ま、れ、も、彼、が、謂、小、不、然、主
ハ、已、我、が、往、を、請、り、て、聖、書、に、載、る、を、以、て、(馬、太、十、章
廿、八、節) 我、小、示、我、の、疑、を、釋、又、云、聖、書、の、一、點、一、畫、諸、を、天、地
に、較、ぶ、る、小、更、小、固、や、て、廢、べ、く、
時、小、我、彼、再、問、我、主、小、就

天路歷程

んせを如何にすべきや彼の云ふ當心^{まごころ}を専^{もつ}め^らる意^いを専^{もつ}ら^るふ
跪^{ひざま}づきて我心^{こころ}と燭^{あかり}耶穌^{いすう}を識^しくと天父^{てんぷ}に懇^{こん}求^{まう}まへト我^{われ}
ま彼^{かれ}小^こ白^{はく}ハ天父^{てんぷ}不^ふ懇^{こん}求^{まう}如何^{いかう}ふ為^なべきや彼の云^いハ天父^{てんぷ}時^{とき}々^々
其^{その}恩^{おん}の坐^まに坐^まハ凡^{たゞ}て其^{その}坐^まふ就^つものふ天父^{てんぷ}が大^{おほ}い分^{ぶん}慈^じ悲^ひと
もつて赦^{ゆる}宥^なくことを喜^{よろこ}び玉^{たま}へト爾^{なんぢ}當^{あた}れ之^{これ}に就^つて疑^{うた}ふ事^{こと}な^らべ
ト其^{その}時^{とき}我^{われ}ま彼^{かれ}小^こ問^とひハ其^{その}恩^{おん}の坐^まに就^つハ何^{なに}を言^いふべきや
彼の云^いハ真^{まこと}神^{かみ}不^ふ懇^{こん}求^{まう}我^{われ}罪^{つみ}人^{ひと}を憐^{あは}れたま^{たま}ハ耶穌^{いすう}基督^{きりすと}我^{われ}
をして識^して信^{しん}ぜむ我^{われ}ハ耶穌^{いすう}の義^ぎに倚^よるにあ^あらざるは
終^{つひ}ふ必^{かなら}ずを沉^{おぼろ}淪^ろと知^しれり又^{また}主^{しゅ}ハ乃^{すなは}ち慈^じ悲^ひの至^{いた}りて爾^{なんぢ}
の子^こを遣^つりて世^よを救^まひ爾^{なんぢ}乃^{なんぢ}子^こを以^{もつ}て喜^{よろこ}んで罪^{つみ}人^{ひと}に賜^{たま}ひ

大^{おほ}く我^{われ}聞^き知^しりぬ我^{われ}ハ固^{かた}りり罪^{つみ}人^{ひと}なり王^{わう}我^{われ}ハ大^{おほ}罪^{つみ}と赦^{ゆる}す
以^{もつ}て大^{おほ}恩^{おん}と表^{あら}す爾^{なんぢ}の子^こハ義^ぎと念^{おも}ふ我^{われ}ハ靈^{たま}魂^まと救^まひ給^{たま}へト
求^{もと}めヨと云^いり
其^{その}時^{とき}基督^{きりすと}彼の曰^いハ爾^{なんぢ}ハ盡^{じん}忠^{ちゆう}不^ふ教^{きやう}らま^まとて祈^{いの}りや
我^{われ}も數^{かず}次^じ其^{その}心^{こころ}を祈^{いの}たり「基^き時^{とき}ハ天^{てん}の父^{ちち}ハ其^{その}子^こを以^{もつ}て汝^{なんぢ}に示^{しめ}
ハ爾^{なんぢ}とれと識^しせ」^ら義^ぎ多^た次^じ祈^{いの}禱^{たう}たれども其^{その}昭^あ示^しを蒙^{あま}らざる
「基^き時^{とき}に汝^{なんぢ}ハ如何^{いかう}ありや」^ら我^{われ}固^{かた}りり何^{なに}の故^{ゆゑ}とも知^しることな
「基^き汝^{なんぢ}を如^{ごと}く數^{かず}次^じ祈^{いの}禱^{たう}とせよ」^ら尚^{なほ}主^{しゅ}ハ昭^あ示^しを得^えざる
ら最^し早^{はや}いのりを止^とめよ「思^{おも}ハざり」^ら「義^ぎ然^{しか}り度^たくあ^あらざる
「基^き然^{しか}らば何^{なに}の急^{いそ}ま^まに己^{おのれ}に祈^{いの}禱^{たう}とせよ」^ら「義^ぎ兼^あて聞^きく

とも如^{ごと}く
と思^{おも}ふ事^{こと}は
く^く切^き諸^{しよ}君^{きみ}
若^{ごと}何^{なに}

天^{てん}各^{かく}保^ほ正^{せい}星^{せい}

まゝに若しも耶穌の義ありあつても世畏中より我を救ふ者な
らば我のこの言を信したる故に自ら思ふやう若しもあま
しで祈禱せまんと我に必らず死をへられば寧ろ祈禱して止ま
るに猶或ひは生を望まんおは如し又おもふ小聖書に云ふ天
示定期あり若し遅ければ必らず待て其來る必も速やのなり
（哈巴谷三章三節）故に祈禱して已むるか後天の父の果て子と
以て我に示したりき「基子」ともつゝ爾に示せる其情は如何なり
しや「羨子」ともつゝ我に示せるは我より目小おれを視る小悲
吾の心おれを視たり蓋し或る日のおとに我に甚く百愛戚
生涯のうちおれを視るの事はかならぬ思ふ程のおもひなりし

約翰傳六章三
十節不識
渴

が此に我罪の大き且あるを知らず我に必らず地獄に陥
靈魂に必らず永刑を受べしと思へばなり其時不意に主耶穌と
見るがまゝ天より俯視し我と目てのこも思ふれは其言
小當り主耶穌基督と信むべし方能く救を得ん我おれ應
て曰く主よ我は乃ち莫大の罪人なり。主いひたまふ吾恩は爾
を救ふ小足るなり。我いひ主よ主と信せむ若何おれを主いひ
まふ我に就むもの水く饑えむ我と信する者も水く渴むも此
一言に實に小我として主を信するも主に就むを知らしめたる
也即ち就む信するを大抵同じ意義にて若し耶穌に就て專ら
耶穌の義に頼りその拯救を望まば亦これ耶穌と信するなり

其時我ハ心ヲ感ト目ニ涙ヲなガセシメ復レハ心ヲ悔ミシメ主ニ我ラ
罪ハ斯ク大いナリ小豈デ爾小納ラシメ爾ノ救ヲカキテむるベシヤ
主レハ玉ニ凡ク我ヲ就者ハ我ヲ救ムル之ヲ棄テ約翰傳六
章三十五三十七我レハ我主ヲ就んと欲シテ如何セシメ錯ル
ルニシヤ主レハ玉ニ基督耶穌ノ此世ニ臨ミテハ罪人ヲ救メ
んとシテ提摩太前一章十五凡テ信トシテ之ヲ信スル者ハ罪ヲ救メ
シテ義ヲ稱セラシメ得若シ摩西ノ律法ヲたのみハ此ヲ得
シテ信スル者ヲ以テ義ヲ稱スルヲ得セシメ彼等我ガ罪乃チ死ニ
死ニ付我ガ義ヲ稱セラシムルニ付死ニ復シテカヘリたり且シテ我

中保希伯來
二章廿四節共
他四福音ニテ
祈禱希伯來
七章廿五節ニ
出タリ

と愛シ血を以て我が罪に滌け眞神と我等これ間ハ中保
かりて永く天に生じ我ガ為メ祈禱せし我レこの言を思ハテ
義ヲ稱セラレんと欲スルニ必ズ専ラ耶穌と信シ罪とあが
かハんと欲スルニ必ズ其血ヲ頼ル事ヲ知レ且彼ガ天律に
依リテ律法ノ刑ヲ受けハ己ノた免ル然ラセシメ非ズ乃チ人
ノ為メレハ若シ之ノ恩ヲ感セシメ即チ救ヲ得
時我レ其ノ事ヲ知リ悦樂ハ心ニ滿チテ涕ハ兩眼ニ流
シ満懷ニ基督を愛シ其民を愛シ其道を愛シたり
其時基督徒ハ我徒小向テ曰ク其ガ識小基督を以テ爾
ニ示され爾等之ヲ得レ後心ヲ悔ミテ感ゼシヤ詳ク語り

たまたま「義我之を得」ふりて普世の人が自り稱して義人
 りと云ふも彼等ハ尚罪中ふあることを知り又真神の義ハ至
 公かり罪人ハ耶穌と信まはしてふりて義とせむもいと我
 知りまも我前の悪と悔愧ふかく前日の罔昧なりと
 訝れり蓋キ基督の美處と我ハ素より思ひ及ばさりガ故かり
 又我ハ聖潔の行をたのし切み人ハ勸めて耶穌と信ト其
 名と尊むんことと望たり又自つ思やう吾身ハ若シ千
 石の血ありバ耶穌の多め小慈く流さんも亦我ガ喜び願を
 後かりト時キ我夢ふ義徒と見れバ彼たも廻顧て先刻
 あとに舍おきたる無知の来るを見基督徒とむひて曰く彼

の年少き者と見ゆ何故延緩し我等ハ遠く離まり来る者
 我之と見るふ彼ハ固より我ハ同行と樂しまぬゆゑなり「義我
 おもふ我等我ガ意こりて行き彼も我等と同行ふ少
 一も害なるべ「基然り然れども彼ハ同行せ必ら害ハ
 らん「義我等其此のどくん事と度へ但彼の来る我
 僕産二徒ハ暫く待たれも無知ハ漸く来り近づまたり基
 督徒之と呼て曰く早く来よ何故其様ニ延緩まるや「無若シ
 我ハ深く喜ぶ人ハ何れ我ハ獨行と喜んで人と同
 行まるやと喜まず時キ基督徒ハ聲を低くて義徒ハ向
 ぶく曰く彼乃同行と樂まぬことハ我ハ已に言ひたりから但

我等彼舟近づく共小行へ且此處寂莫れば彼と談話
 して此日を送るふ志ありト乃ち無知小向ふ曰く子今安まら
 今爾ハ真神につひく其情いふや「無余路と行の時満心
 常小善念のまを以て自く慰めらるることを得るなり」基如
 何なる善念ありや請我小告たす「無即ち真の神れたる我
 念ひ天國のこゝを念ふふあり」基惡魔と諸の沉淪者も
 も亦この念あるあり「無我ハ但これを念ふのこゝを之と得ん
 ぬことを欲せり」基多くの人の之を得んとすれども終小得ん
 一聖書小曰く「おれを懶惰者ハ心を得んと欲すれども終小得
 るや」らなり」箴言十三章四「無但これとおもふのこゝを

之がためふ又所有と棄たり「基恐らく未だ其変りるま蓋
 其所有物とてぞぐく棄るハ甚が仕めき変りて人おわく之
 と易いとていども其實ハかたなり然ると爾ハ真神と天國との
 爲る其所有物と悉く棄りといふ之ハ何らなりて証據となら
 るや「無我が心と証據とすべし」基所羅門の云く「小自其
 心と恃む者ハ愚かり上箴言廿八章廿六節「無所羅門の斯く言
 一惡心とひ者かれども我が心ハ則ち善し」基何の証據あるや
 「無」らに天國とのぞく毎深く慰さ免らるればなり「基此
 情、爾の心小自ら欺くものなるん毎も人ありて一物と得んこ
 を望み其れを得べきの故ありといへども其心まご侈然として

空しく喜ぶものなり「無余いのを徒らふ故あまのものと望らんや
 如何ゆるわれを我が行かふ所心と相符故なり「基誰る爾乃
 心と行と符合」と証據なりや「無我心おれを証すべし」基
 ア、此ハ丁度賊が自から我ハ賊小あらむと言て証據なるに異
 ることなり爾れ心如何なり是ありても真神の道之と証據た
 りるにあらむ其他慈憑がた「無毎も心善れ念を生せば豈
 下善心非らん且人の行と若「真神の誠」にあらむのそと豈
 善行非らん「基心善念を生むると固り善心てあり
 真神の誠」遵ふて行かふとも亦固り善行あり然れども
 但自ら度つ善心善行ありとまるとも未だ必らむも果

教と請ふこと
 と知るハ無智
 不あり

無義人前
 あり

て其が「か」るるなり「無然らば爾れ意ふは善念ハ如何
 小なりと又真神の誠小なりと行かふも如何なりと云
 請我に告べし「基善念も數端あり念の己身に及ぶれを
 念れ真神おび亦基督おびものなり「無念の己身に及
 ぶものと何小なりて善しゆや「基若「真神の道小合」善と
 り「無念の己身に及ぶもの強何なりとて真神の道に合
 とゆや「基真神が我等おつひと謂まらむ我等も之と意
 へ即ち真神の道小合」ものなり今試み詳らふ之と言を
 真神が我が世人と指て云ふ一の義人なり「善を行なふ者
 あり」又曰く人心の圖るところ永く悪念と懐くの一(創世記

天路歷程

又曰人の云々
詩篇五十一篇五
節

六章五節) 又曰人の心の切時を即ち悪念と懐く我意も
其まゝおもひ且己身のことと念ふも亦かゝの如くこれを此ま
はち善念に似て真神乃道合ものなり「無心」是れおどりの悪
あつらんとは我ハ信ドが「基爾」意かゝのこゝに故に生涯
自うらおもふ所一ツの善もなきなり我今進んむ之と言ん夫真
神が我等につつ我が心若何我行若何と云う我も我が
心と行ととおもふ悉く真神の言とこと合即ち是善念を
り「無爾」今つ所の意を我がた免ふ詳く之を言「基真神の
道我が行ふとこを指して云ふ人の行ふところハ曲て直かゞび
不善に似て僻なり上詩百廿五篇五) 又曰く人生ハ正道と棄る

且つ正道を識らむト(箴言二章十五)人若くや自うら其此の
まを念ふ自ら悔ひ自ら怨む其念まかち善くして真神の
道合そのかり「無念」の真神におもふ當小若何まきや「基真
神と念及くハ聖書」言ところ合ふてこれまかち善
かり聖書に悉く真神の事を載せたり我今こゝに速く
能はず若く真神と我等との心を論む我の人となり真神
更之と知れむ我にあつて自うら知りたる慶乃罪をも真神ハ
則ち之を知り我が深衷蓋念一ツとして其前に露まざるなり
かり又我が義とまるものも真神之と視るは悪臭のこゝ
かれを若くも己の善とたのんで其前近づくを真神必我

天路歷程

原罪現罪ニの物にも知らは

と容まじし我真神ふつひく此のまじくおもも即ち善なり「無
爾なんぞ我と思もれりて視るや我なりて真神の見るや
こは我に勝まむとせん度ふに我いうで己の善と恃ん「真
神に近づくと為まじや「基爾の意くくむ若何也無其
大略といふ我におもひは義と稱せらるんさかば基督と
信むべき筈なり「基ア爾いさぐ其罪と知らざるに又なんぞ基
督と信むると言と得ん若何にかなむ爾が原染の罪と及び
行ふところの悪と皆自く之と知りざる故なり「我れ人の罪あるが
故に基督の義と得るに何くまむ真神の前におい誠義と
稱せられぬ然ると爾の言みれを心も行をさか善なりと明

基督の義と自
己の義と至容
の違ひ

いへし實に自く其罪と知らぬ然るを何ぞ基督と信む
いふや「無然りと雖ども我は信むなり我は善なり「基爾は信
む所々若何ふ「無我は基督罪人のため小死すことと信
且真神の前ふ於て我は罪と赦され義と稱せらるるを信む
我は我律ふと行ふよりて真神恩とほむと我と納
るなり而して其我は真神小事の行ふより天父といはれ
義と稱せらるる即ち基督の功よりるものなり「基爾は雨のい
所と我は辨むべし夫は爾乃信むるこあら此のまじくわれは實
聖書のおへふ合さるる聖書に載るやと若くは人の義とせ
らるる基督の義我小歸まるふ因て義と稱せらるるものなり

此の處ハ俗ハ
自カ他カレ
違ハあり無知
の以テ自カ
以テ意カキ基督
徒の以テハ憐
れの以テハ憐

真神我が行ふところと納我を稱して義とせずにあはざるな
る今爾の以て所と按むる小基督の義ハ我が行ふところ真神と
納らるれば後我を稱して義とせずと此毫釐の差も千里にお
ぶものありて爾は信仰ハ實小自り誤るものあり審判の日に
おらんて此様乃信ありとも尚真神の怒りと免るべからば夫と
信して義とせずともあハ律法小つて望むべきもの無きと知
る故小律法と逃さく基督の義ふもものあり此義ハ基督の
我とめらる我の律法とあはるること小なりて真神小納らるる
ことを得せしむるものありと乃ち基督の行ふとあはる我
に代つて律法小あはる我に代つて刑と受たれば凡て真

信むる者ハ専ら此義にありて白晝衣の體と蔽ふおぼく始
くして真神小薦められ真神ハ我といれ始めて我と罪せざるべ
く無ア我等がまつて基督の行ふところ倚んとはつる此の
如きハ人々ありゆる小私慾と縱まじり己の意小任て妄に行ハ
むるあり倘も我一たハ基督と信して即ち其義我に歸り罪と
免され義とせざることを得ば則ち惡と行ふとも何の害あるや
「基爾の名ハ無知なる其言も亦無知なり夫も人ガ義とせず
るの義ハ如何なる義なるや爾あれと知らぬ又この義と信し
ても主れ怒を免ることを得るを知らぬ且基督の義と信し
る其效ハ若何なるやと知るなり蓋し其義と信されば則ち我

真神と悦服ふく其名と愛し深く其道と愛し深く其民
 と愛されも爾無知の想ふおしく豈で彼をわしひまふふ妄
 に行ふことあるんや此時羨徒は基督徒に向つて曰く天父が基
 督を以て彼に示せしや兄之と問ひたまへ無知者の言と聞て即ち
 曰くア此の言はれしや兄や我ももつて爾輩が其様の
 と言ひ必らも皆心の癩より發する所なるん羨此の何言ぞや
 夫れ基督の藏れて真神の所ふあれを初より人の視及と
 ろふ非む若しも天父が之をもつて人示さるあはれを人
 終ふ之と識らざるなり無雨の信の斯のおくおれども我然
 らざるなり爾も多し妄想し我之に及まざるなり但我

心願の説又其
 想の説せし甚
 多し

接の字着眼

信むるどころ度ふく爾ちとがびに宜し「基我の一言と
 此一事ハ爾かののぢぢ輕言べくは夫れ我が善伴の云
 とする我が証する所蓋し天父が基督をもつて人示さるあ
 らむ人馬らんぞ之を識んや且人信をもつて基督小接を
 此信はまかち真神莫大の力人心小生むるなり此の言
 の有るとも爾か之と知らむ故に速く醒悟する己の危と揣
 り奔て王耶穌に就べ夫耶穌即ち真神其義ハ即ち真
 神の義なり若し其義小なるもの方小罪ゆきと得べし無
 爾れ行ふハ甚だ疾し我の信小行くとあらず爾まづ行べ
 我の後あると要すとあはれにわし二徒ハ吟して曰く

無知何故執愚情 告以忠言曷不聽 若頼己功功未足

惟憑主義義方稱 素行罪惡應沉没 今倚耶穌始得生

奉勸無知當悔改 不然末路必遭刑

此時基督徒ハ美徒に謂ふやう彼の情まて此のこころわれ我

等ハ復獨りゆべト是ふおい二徒ハ疾まらみ無知ハ躑躅之後

まて來れり時ハ基督徒曰く惜むべ一此人ハ末路ハ向はず

不祥一義哀ひあそく吾邑の人多くハ彼おあそくあそく即ち

全家も全里も名ハ聖徒なれども其實ハ悉彼のおあそく我邑

まて此の如き者多けれ況て無知乃本郷ハおあそくあそく

「基督書おあそく固ら言ふあり曰く真神其目みて見られ

お其耳よ聴とす聰らまざる小任まて(約翰傳十二章四)

但今爾ハ我とのこ此ふあり爾ハ彼がおあそく者おつひて若何

おもふや彼おあそく時ハ偶ハ其罪と悟り其危おそく我知

こころあるまて「我兄ハ我より年長かねバ先自のこ之

と言ふ「基督爾ハ言ふを我ハ意ハ依らん我おそく此

輩も亦時ハ罪を悟るこころわれども但其素本無知ハ

るの多自ら其罪と悟るまての實ハ有益なるを知らず自ら

其罪と悟るの心と我滅ハ其私意をおあそく悵然自ら恃む

者なり「我ハ我の意くも兄の云ふ處ハ似たり蓋ハ人ハ罪

と悟りて驚懼まら誠ハ大益あり之より初めて天路と行

ことと得る其心正ふて偏らざるを得ることありあり「基
 人々斯く罪に驚懼するは固より大いなる益かり蓋し聖
 書小曰く真神を敬畏あつても知恵の始めなりト(詩篇百十一
 の十)要するに驚懼を宜しきに適ふべきものなり「義適宜の
 驚懼とは何と以て之と言ふ「基三ツの事ふりて辨むべし蓋し
 其發端ハ罪と悟るあり一なり且其驚我ハ迫りて一心基督に就て
 救と得ること欲せしむるニかり且此驚我ハ必らざる能く深く
 真神を畏む謹んで其諭ふたがひ心を小あつて誠小稍違ん
 ことと恐む凡ての行ふ所又真神と玷辱我ハ心の安と害し憂
 ひと聖靈小賜し不信者をく真道を誹謗しむる等を恐む

其三「義兄の言ふ所ハ誠ハ是のおど然し迷氣地ハ
 早行まきんとするも「基兄ハ何ゆゑ其様を問と為や此變の論
 談ハ厭しや「義非然な今何處と行くらん欲せし
 故なり「基今「最ふ六七里も行わ即ち此地を過ぐべし
 然し我ハゆき小前言と論むべし夫罪と悟て驚懼するも
 無知の輩ハ益ありし知らざりて之と我滅せんしをり「義彼ハ
 何ゆゑ之を滅さんとするる「基第一罪と悟て驚懼するあり
 固より真神のさせたまふことなり然るも彼ハ魔鬼の致す所
 と意ハ他に害せらるることと恐むて之と拒絶するむるを為さか
 第二は彼ハ驚懼が能く主と信むるの心と害するも意ふの

故小力とつくく之と遇めり惜うか斯人自ら王と信むる
 ありと謂も其實はなきなり第三其彼懼ふきとありあり
 と謂ゆ多し心の偶く驚懼まるとたひ仍つて自らを恃んで
 懼れざるなり第四其彼も罪と悟つて驚懼まるとたひ自らを恃
 ん自ら賢あること能まざる故小つとめり此驚懼と拒むり
 時小基督徒曰く我等いま無知乃あやと捨て別く裨益ある
 ことを論べ義徒曰く此ハ吾の樂む所なり但兄復先其言た
 まへ「基此十年々雨の邑少く一人真道小從ぐひ力行先を
 あらそひし者有り其名と暫信といひしが爾ハ之と識や「義
 識まり彼も素と信實地と離る六七里ある絶恩郷小也

且反舊といふ人の鄰なり「基然り固より反舊と同居せり此
 人曾て深く醒悟せしが我がおそふは彼の其時實に自ら其罪
 と罪の應報と知りしを「義我も亦其おそふ意ふなり蓋し彼の
 家と吾家と離るること僅小十里なるが毎小來りて我を見心
 感し目涙せり時小我此人と憐惜彼の善を為べきことと望
 たりしが但其後の様を觀むは徒らに主ヨ主ヨといへり「基彼ハ一
 次我小むくつて意と決て天路と行んとするといひしが後たちま
 ち惜身といふ者と朋友となり此よりて遂に我を疎となり「義
 我等いま此人につひく談とせし當り少く此輩と察まらば
 何ゆゑ彼ハ忽ち真道を離るるか「基此事につひて論むる誠

犬轉食彼得後
二章二十二節

天福二字限
無味アリ

益あることなり爾先言ひたまへ「羨我おもふ小其故四あり第
一ハ此輩の心罪を悟ると雖も志尚いま改たまらざるもの
故罪を悟ること漸く亡むば真神小事の心も亦漸く亡
て遂にまゝ其故迹のへるなり恰も我夫の狗と見る小其脾胃
も安んぬ時ハ其食まることあはれと嘔出まなり此ハ食物が腹
を奈小りて心切らむも此事をかせり勿れ其疾愈脾胃や
まきとらる仍其咄ところを嗜て遂に身と轉て悉く之を
るが如く夫れ彼の輩ハ心天堂小熱まるハ惟心の地獄を懼る
故かれ地獄の懼を漸く冷なれば罪を悟り驚懼まるの心ま
小亡て天福と求るの心も亦亡び遂に其故迹を行ふもの也第ニ

不見之情のこ
前の信と
行目と
母れの處と
み

此輩人と畏ること太甚ゆゑは信仰ひまらぬ也聖書小人と
畏るるの心中小陥阱ありト箴言廿九の廿五此輩ふか地獄の畏る
べきを覺へて時小切り救を求むとて但驚懼の心稍寛まれ
て遂に他意と懐いて謂ふや真道に從ぐ小なれば則ち人
事をあはれ大なれば則ち其身と家と危く馬人を見ざる
の情と圖り甘んぶて此と取むと自ら知らざるべけん乎と其思
ふところ此乃びなる故乃ち復世俗に從ふかり第三に真
道に從ふの羞耻が彼等乃前路と阻げたり蓋し其心驕傲な
まむ世の惡より離れ真道に從ふと視て鄙むべし羞べき
のあはれ守心あり故小地獄の懼心において漸く亡び遂に又その

故迹を行ふなり第四は彼等罪と悟て驚懼するごとと甚だ
畏れ預め其後災と知こを欲せざりたり倘し能く預め
之と知りて驚懼をひた或ひ能く諸くの義に效ふ者ハ迷して
主の處に任み安と得べき小但彼等ハ罪と悟つて驚懼するごと
を拒まんじまる故に漸く真神の怒と忘と遂に正と捨て邪とつ
まかりなり「基兄の言ところ亦是彼の心志を究むるに未だ更に
新なりざるなり罪人が白洲の前あるの如く驚懼戦慄して
人前ハ前非と痛悔するに似ても其實と究むれ刑と懼る
のこ小過も初めより實に自ら罪と悔る小非るなり故に彼
放されざる必だ復賊とあるべし然とも若まことに其罪を悔

なりは必らざる是の如くなり「我暫信が真道と棄て
我まふ其由と言へり其後の有様ハ兄之と言たまへ「基我固より之
と言だ樂めり夫彼等が真道と棄んとする時ハ心と尽し力と竭し
絶て真神とおもはずあひ死する此時審判の事且聖徒自脩の職
事まふハ私ハ自ら祈禱すること或ひハ欲と迫め徹醒罪と悔る等
の如きを念まざる様ふつと免漸々小之と棄て凡て熱信の聖徒と
彼ハ疎んとして之を遠ざけ後小會堂に到り道と聴きあるひハ
聖書を究め或ハ互に天國のことを論むる等みハ漸く之と厭ひ
時小ま陰小聖徒の失と拾ひ此小藉て真道を絶且つ漸く放恣
私慾の伎小近づき相交りて友とあし又暗室におひく不正語とい

たし或ひハ善徒小偶ハ此悪た事何水ハ彼ハ則ち之と喜び益々
 放恣を行ふ忌むとあり且つ頭然小悪を玩るび遂に堅く僻
 ところり悪情畢く露も既小ま自か陥阱小納る若莫大
 の恩拯ふ之と出まにあはば必り水永く悪中に没せん
 我夢小基督徒義徒の二徒ハ此時迷氣地を行過て適要地小
 入を見たり(以賽亞六十二章四五)此地ハ地氣清く且寧くして天
 國小往の路これ小由べけれも二徒ハ此より行て一時甚だ樂に聞
 再百鳥ハ時あむむして呼鳴ると聞き日女衆花満地を見ま
 睢鳩の聲を聞たり是所の日晝夜長明なるゆゑ此地小至も
 死蔭谷と隔るこ遠く絶望の決て到る所をざる所ありて並ひ

疑寨と見む且其處(至れ)即ち其將小往んとまの城と見
 まる天民ありてこれと相會せり蓋此地ハ天小近く天乃
 光耀者毎此小遊び即ち新郎と新娘と重て約する所又新
 郎が新娘とよろこぶが如く即ち真神其民と喜ぶなり是所ハ
 酒も穀も悉く足り且一路得んと欲する所の物此に至りて之得
 る甚おほし既此所小至ま又天城より聲出て大い呼ぶと
 聞く曰く視よ爾此救將小至んと爾の賞借に來るなり此地
 の民又二徒を稱して聖民とせり主贖ふところの人モガす(以賽
 亞六十二章十三)時小二徒ハ行て此小至り天城に近づくと得
 りむ其樂に前より甚だ時小漸く天城小近づき之を見

益々明々なり城ハ悉く珍珠寶石の建るこゝ街衢ハ悉く黄金と鋪り故小城極めて燦耀日に映して冲輝なり基督徒ハ思慕て疾と致し羨徒も亦志くり故小一時々小留つて痛く呼んで曰く若し我が愛する所の者に遇む我が爲に之と言眷愛の情已小多く我とて魂と銷せしむ(雅歌五章八節)後二徒も力稍健に乃ち復前行で漸く行漸く近づけば是處は百菓の園ありて門天路を通るを見る二徒此に至るに園丁道旁に立あり之小問て曰く此羨園ハ誰に属するや園丁曰く此ハ主宰に属す即ち主宰の種る所より自樂之兼て諸天路とて者と樂まざる所也是ふ於て二徒と引く内に入ら其菓と食ひ

葡萄酒の能蓋

黙示録二章の十六

力を増んあを請も主の樂遊ぶ所ともつ之小示し歴觀れを二徒ハ暫く此處に留まりて安睡せり我夢に基督徒とて徒乃二徒と見る小彼等睡の中におぬ言こ路を行ともよりも多けしを我々の何故あると訝りに園丁我小向て云や雨何ぞ此と訝るや夫此園の葡萄酒ハ食して咽下り易く之と食ふ者といへ能く言ひむるなり時に二徒と見まを睡より醒て遂に自束身とて天城小向て上らんとせり然るに城の燦耀その目小燦きて二徒之を注視こと能はざりき時小其衣ハ金の耀のごとく其面光ハ日のごとくなる二人あり二徒と出遇しに彼二徒又問ひけるハ爾等何より來りや二徒其情を以て告ぐれを彼ま問ひける様路上より

天路歴程

以諾創世廿章
廿四

ら何きの處こゝ宿りまゐり如何なる危難きげんに陥おひ如何ある安樂あんらくと享うけり
や二徒ふたりも一々其妻つまと告つたりき其時そのとき二人ふたりの白はけるハ爾等なんぢらかゝる
も二ツの難かたふあふべし其後そのちまさ小城中せうじゆうふあることを得えんと依よつ
て二徒ふたりハ彼かれと同行どうかうせんを請こひけるに二人ふたりハ之これと許諾きやくだく且かつ曰いや
う得うる處ところハ爾なんぢの信しんと以もつて得うる也なり是こゝふおほく彼等かれらと共々ともどもふゆ
た已ま小城門せうじゆうもんの近ちかづらると見みたり時ときは我われ二徒ふたりと城門せうじゆうもんの間あひだより
即すなはち死しと名なづけける一ツの河かわあると見みる其上そのうへには橋はしなく河かわま
極きめく深ふかくれむ二徒ふたり之これと見みて驚おどろくお甚ふしく引ひくさんと志こゝろ
々されむ彼の二人ふたりの曰いく若もし此河このかを過すされば城門せうじゆうもんふ及およぶと得えべし二徒
城門せうじゆうもんふ及およぶも他の徑みちハ無なや一入いり然しかども以諾エノク以利亞エリヤの外あひだ

以利亞列王下
二章十一

開闢ひらけり以來いらい尚なほいま人の此徑このみちふ由よしと許ゆるさば即すなはち末日しうじつに
のかる時ときふ亦また人ひとおれむ由よしとす時ときふ基督徒きりすとハ心こゝろを憂うれはむを
いたしむが義徒ぎともも然しかり左右さゆう顧くわんむもさども別べつふ他策たさくの此河このかを
渡わたることを免まぬかざるを得えざれば乃すなはち二人ふたり再問またとて曰いく河水このかはどれ
れ所ところも皆深みなふかく乎や一入いり否いな但ただ此こゝよりして我爾われなんぢと助たすること能あたら
ずむ汝なんぢの信仰しんかうの大小だいせうに依よつて必かならず此河このかの淺深せんせんと知しべし是こゝに
おいて二徒ふたりハ河このか小臨せうりんんがゆき基督徒きりすとハ其中そのうちに入りしめ漸すすく
下くだりしむ大おほく義徒ぎとを呼よんで曰いく我われハおほむ水みづみ深ふかく
大浪おほなみ我われが首くびと踰こゆ主しゆの波浪なみおほく我われを踰こたり義兄ぎけい心こゝろと
安んやすむべし我われハ其底そのそこと踐ふみ實地じつちあると覺おぼえし一基い死しの憂うれはむ我われ

深水大浪詩篇
四十二の七節一四
六十九の二節二出
實地詩四篇
流乳出埃及記三
章八節

登るに蓋し蓋し
或當時ノ誤
リト云フ又
或ハ岸ニ登ル
ト云フ前説ニ
似タリ

危ひ我基督後
の信仰も死ん
絶えんこゝろ
とまのこゝろ

魔の擾せる下
文小知知
下文諸敵
る照應せり

と繞り流乳流蜜の地我必見ると得。時小幽暗驚懼
叢集て基督徒登るに昏昧前を視て見へを幾人人事と
省えず前小得る所の恩恵時追憶ふ能く循環
に之と言あらず其時小ころ恐る其憂懼といふもあ
河小没むの中天城小入ることを獲ると恐る又いふ聖徒
前聖徒とかなれば後等小かり獲るころの罪と此際
再おいて一々追憶憂感まににおかりき又其時魔鬼のた
擾まれ其言とあふ小かり知らずなり。義徒力と盡し之と輔
んともれども亦その首乃沉まざるを免し難し。蓋し或ひ
沉ん幾んど死ん忽ち又翻然こゝろ起バカ

陷阱以賽亞
四章十七節

陷阱の詞と聞
て讀者悚然
たり危く

義徒彼を撫て曰く兄よ我々の門を見たり上小人ありてま
ま小我等をむくんとて「基を雨と迎んとまるとのよて我
と迎る小非るなり蓋雨と我互ひ小識仲るが雨の品行
と義まべられあり」義兄の品行も亦義まべ「基兄よ我と
果して此のいゝあゝむるに主今豈我と救さず我が罪
小つて我と陷阱の中小引て我と棄るにあらむや」義聖書
に曰く彼の死まるとた亦縛とらるるか其刃堅固かり他人の
苦を受るがむき小あらむ他人の煩擾さるるごとく小あらむ
(詩七十三の四五)此固より悪人と指して言かり兄は之と忘ま
や今兄水中小かり此苦辛と憂擾小あふも此小ても真神の

雨と棄るにわづらむと証するなり蓋し真神雨と試みて雨の
 前に得るところの恩と今われと憶ふへるる且苦みの中に於
 て主と信し其生命を保と觀んとなり(我基督徒と見
 ても此とき一時黙想せり「義兄心と安くすべし」馬太九
 章二節 耶穌基督雨ちを救へり是よりいへば基督徒大い
 呼んで曰く嘻我復之と見る主我小向ふて曰く雨諸水と過る
 我のわづらむ雨と偕せん雨諸河と過る決して没るこ
 とか(以賽亞四十三章二節)是にわづらむ二徒の心悉く河
 を濟り岸の小なるふわんで彼の諸くの敵は石の静りり
 かて復あし擾まず時基督徒は又實地の踐べきと得後

石沉淵出埃及
 十五章五節
 石の静尼希米
 記九章十節

河はしりし浅たとおほえたり二徒河を濟り其情かくれ
 時二徒彼の岸小登ま前見る二人已小是處あり相俟ち
 二徒が河と出るとた之を賀して曰く我ら乃ち役使の靈ふて
 凡て救ひを得んとする者事へん為遣はされたる者なり(希
 伯來一章十四)是よりいへば共小行き漸く城門小むりて往り今
 まさに謹んで其城と誌まべし即ち巍山の上より二徒此小
 登るとた二人其手あり之と扶けしより之の小のぼること甚ま
 易く且其肉體なる衣は已小河乃中遺たり蓋し河小入る時
 此衣ありしが河と出るとたは則ち無し故小城の基は雲
 より高しと雖も二徒の上昇あつて飄然とて便捷し時に二人

謹誌とて淨物
 語と二例小と
 るべし

肉衣まじふ名
 文驚き汗正着
 官も亦くにお
 て一時黙想あ
 るべし

害なく河と
渡る害ありて川
と渡ること不獲
考へ

天路歴史

と談して甚く樂にたりそは害なくして河と渡りしより又
此二の光輝たる者を送らむを得しより心甚く欣慰つ
その時談まるとる皆天國の榮と言ひ二人曰く天國の羨しき
こと天國の榮言ふつゝ又曰く此所小郇山天上の
耶路撒冷あり(希伯來十章廿三四)天使千々方々會集し
又義人の靈ありて天國の全うた福を得しより爾も今まき小真
神の樂園小往き生命樹と見ると得其水く鮮なる菓と食ふ
ことを得んとき爾このことあるに到らむ必らず白衣とものつ
爾にたまひ日々主と互ひ言ひ共におとび世々窮んたり
ん爾世々處し時ハ憂悶疾病苦辛死亡等諸事ありしが

是ところあり終ふ復れと見む蓋し前事ハ已往く(黙示録
廿章四節)爾今まき小亞伯拉罕以撒雅各おとび諸の預言
者に近づくと得んとき此等の人の皆真神の救へる人なりて生
前義を行ひ今ハ安樂を得しものなり。二彼彼問うるハ我等
聖所に到らば行ふとある當り如何おとびまきや二人曰く爾この
ところ小到らむ必らず勞を安き小易へ憂と喜び小易へ爾が
前世にありて播とあるの祈禱流涕主のたはん小難とらくる
等是ところありに到りて必らず其菓を得ん且つ是ところ小在り
て必らず金冠を戴き天の聖主小時々見ゆることと得其真
榮の如何と見ば見ゆる所必らず二ツあり(約翰一書三章の三)爾

天路歴史

全故之主歌句
大意帖撒羅尼
迦四章十三至十
七節

前まへ世よ亦もあるとた固もくも主も事つらへんと欲ほせり然しかもども肉く体たい軟弱じやくじやく
して之これは事ことふること難たかり〜今いま爾なんぢの處ところに到いたらむ必かなず常つとに主も
に事ことへ讚ほ美め歡よろこ呼び稱ほ謝うして時とき々とき僕わがも是こゝろ處ところ全ぜん能のうの主も爾なんぢの目めつか
らむ其その榮はを看みると樂たのし〜耳みみかかす其その聲こゑを聞ききたり〜友とも乃すな
先に此こゝろ處ところは往ゆく者ものも爾なんぢ往ゆく必かなず重おもね〜會あひ爾なんぢの河がは〜より
來きる者ものも爾なんぢ喜よろこんで之これを迎むかへ且かつ爾なんぢの所ところは居ゐらむ必かなず榮は光かりと
得えて衣ころもと〜榮は車くるまを乗のりもの〜か〜足あ榮は主もと同おなじ〜行ゆき主も天てん
の雲くもに乗のりて下くだり〜ラッパの鳴なる時ときは爾なんぢも亦また之これと同おなじ〜往ゆくと得え
主も審しんの坐ざみある時とき（哥か林りん多た前ぜん六ろく章しやう二三。但たゞ以もつ理り七しち章しやう九く十じゆ爾なんぢ〜旁はた
坐まと得え且かつ或あるひは惡あく鬼せうあるひは惡あく人にんの罪つみと主も斷きくと〜主も爾なんぢも

天路歷程

羔の管運黙示
十九章九

亦また與あり斷き〜わ〜得えん蓋け〜王わの敵てきは素もと〜り爾なんぢの敵てきわかれ〜り
審しんみ〜り〜主も天てん國こくに歸かへる時ときは爾なんぢも之これと〜か〜歸かへり〜主も
永とこ居まるを得えん斯かくの如ごとく互たが〜談わつ漸お〜城しろ門かどに近ちかつげ〜忽たち
衆しゆ天てん軍ぐんあり〜出いで〜久ひさ〜二ふた光かり耀やく者もの二ふた徒たと指さ〜天てん軍ぐんに向むか
ふ〜曰い〜此こゝろは即すなち世よに在ある主もと愛あい〜王わのためは所ところ有あると舍する
者ものなり〜王わ我われとつ〜彼かれと帶お〜今いま已ま〜此こゝろ〜至いたると〜彼かれ
〜城しろに〜入いり主もと見み〜喜よろこびと得え〜の〜時ときは天てん軍ぐん歡よろこんで
之これを賀が〜曰い〜凡みな〜羔かの管ふえ運た〜赴むかひ〜と〜者ものは福ふくなり〜ト。
時ときに主もの樂がく工こあり〜出いで〜迎むかへり衣ころも白しろ〜〜且かつ耀やくき聲こゑ大おほひ〜
〜和な〜音ね響ひび天てんに震ふる〜二ふた徒た世よと離わかれて〜此こゝろに〜至いたると〜衆しゆの樂がく工こ

天路歷程

極めて之と賀し其口の歡呼し其樂は大ひ作り二徒と周擁
或ひ先とかり或は後とかり或は右或は左とかり之を護つて上
昇びて路樂作高聲和鳴せり人若し其此の如たを見其
意必ぞ天を降し迎ゆるものせん衆此の如く前行む樂
工歡然時々音樂を奏し手とあけ足と踏し其二徒と得て伴
爲まを樂し喜び來りて相むらふと知らむ時小徒未だ天
城不入らざり雖も己不在天の樂に如く諸天使と見ると得
更し其樂の雍和まると聞た自ら樂しく勝む時行て此に
至む城寸が尺全く見され恍として一城鼓鐘と聞く小將小之
と迎へて入んとまも小似たり二徒又まもふらむ必らむ此衆と得て

伴し此は居て天を樂み世々遷らざらんといふ
極め甚たり其時の榮樂孰れも口墨を以て之を傳
へん乎二徒行て天門といふ所の情かくのおどろし時其門を
門首と見れば金の文字あり凡そ主の識しめ小遵ふ者ハ
福かり應し生命樹と得べく且門ふりて城に入るべし黙示
録廿二章十四とありたり時我夢のうちに小見てあれむ二
光耀者二徒小門とたけり命に既其門を扣けば人ありて
門上より視下たり是れ小を分ちて以諾摩再以利垂等がり
衆ふれ小告て曰く此二徒は主と愛まふ因て將に城を
離して來るがなり是時二徒は前を得てその惡巻と取出

て納めたり遂に此巻物を以て主小呈しこれを主経閱畢し
 乃ち曰く其人は安く小在る曰く茲小門外に立ちたり主乃ち命
 して門を開けし真道を守るの義民と志す入る小くを得せむ
 (以賽亞廿六章二)我夢小二徒の天城小入ると見せし適て門小
 入るも貌もかち愛し金の如き光ある夜と得又其前小琴
 と冠を執て之賜ふなり其琴は主と讃むべく其冠は即ち
 尊貴の冠なり時我夢間小聞けし擧城鐘鼓のこゑありて
 歡然大作つ二徒小謂て曰く請爾主の樂をたのめ(馬太
 廿五章廿一節)又聞く小二徒高聲小唱へて曰く願くは福祉
 と尊榮と權カと天の位小坐する者および羔小歸して世々

聖哉
 六章三節又際
 示ニ出ケリ

窮りかけん(黙示録五章十三節)方門適く開けて二徒と放ち
 入る我其中と窺ふ小城の耀くは日如く街衢は悉く黄金と
 鋪き上り多くの人ありて行く首に金乃冠と戴り手は勝敵の
 棗枝の主と讃むるの金琴と執りたり又衆中を見まは身小
 異る者相呼て曰く聖なるるか聖なるるか吾主真神と(黙
 示録四章八節)其後門をかくち闔るり我斯の情と観て甚
 だ我もまゝ其中小在んことを欲したりた時我正又此と觀
 て偶く頭と廻顧し爰に無知の適く河旁に近くあり彼は
 河と過るも甚く速やうり大い小二徒の艱難と異なり
 たり蓋し彼此小至る時たまひ一の虚望と名づくる渡人に

逢一あひ小舟こぶねまで濟わたけきを彼かれも亦また二徒にた如ごとく天山てんざん小上こじやうり城じやう
門もん小往こわうたり然しかまじも其往きやうと知しる獨ひり寧なく行ゆて一人ひとりも來きり
迎むかへ來きたり賀がまもる者ものを既すでに天門てんもん小到こたうり仰おほむて門首もんすうの文字もじ
と見みまかとも亦また門もんと扣たたり意いへらく門もん必かならむ立たちとらに
開ひらけて之これみ入いりて得えんと時ときに門上もんじやうより俯視みくだ者もの問とて曰いく
爾なんは何なにもを來きりぬと得えんと欲ほもるや無知むちの曰いく我われ
素もとより主しゆに前まへ小在こありて飲食おんじく主しゆ我われ所ところにありて教誨けうゑたり
時ときに門上もんじやうの人ひとは其憑きひん巻まきを取とり主しゆ小呈こていせんことと要もとめられ無知むち
も是これ小こつて遍懷へんわいと搜索さくさくとしくも其物そのものの無なきことを覺おぼへり
門上もんじやうの人ひとは小問こもんふて曰いく爾なんは其そのと有ありたる無知むち半はんを語かたりて對たい

ふるふけきを門内もんないにあるその此吏このしを以もつて主しゆと達たつたり主しゆ
初はつめより之これと下視くだみず乃なもち前まへの二ふた乃な光耀くわうぎやう者に命いのちと彼かれ
手足てあしと縛くわり之これと曳ひき立たて去さりて二光耀ふたぐわうぎやう者もの手て小無知こむちと
提ひげく空くう小由こゆて往ゆた前まへ見みる所ところの山門さんもん小至こしる小こおんぐ
乃なもち彼かれを此こ小棄こすり時ときに我われ天門てんもんより亦また路みちありて地獄ぢじやく
小通こつうまりこと一ひと將亡しやうじやう城じやう小由こゆるが如ごとく然しかるまじと知しり我われ
夢ゆめ此こに至いたりて乃なち醒さむ
夢者ゆめもの讀者よみもの二向ふたむかて曰いく
夢裡ゆめぢり諸詞しよじ速すみ聖經せいけい 爾なん須す着意しやくい解げ分明めいめい 章しやう々々用もち此こ傳でん鄰友りんどう
句く々々將斯しやうし教けう弟てい兄けい 慎しん勿ぶ專思せんし文外ぶんがい事こと 惟ただ當たう深究しんきう理り中情ちゆうじやう

聽ハ青韻古語
 庚青通音ナリ
 拋葉句恐ク穩
 ナラズ原書ニ
 林檎ト交易セ
 ストアリ
 三十四番唐
 ニ句原文全ク
 此ノ意ナシ昔
 宇唐字尤モ惟
 ムヘシ
 一本ニ番ヲ裁ニ
 作り唐ヲ人ニ作
 ル

天路歷程

諭言入耳毋狂笑
 真道繩心謹伏聽
 五卷余書雖偶謬
 歷程天路切宜行
 誰拋菓曰菓藏核
 孰棄金云金味精
 番作茲篇為世鐸
 唐從是經得天榮
 而今所夢如無益
 誠恐本人別夢生

天路歷程意譯 大尾

010190527730

